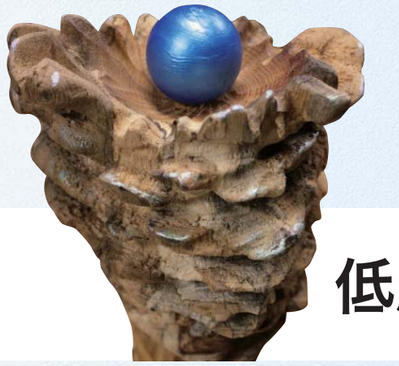
ストップ温暖化大賞
低炭素杯2011



低炭素地域づくり全国フォーラム

報告書

2011年3月

編集・発行
一般社団法人地球温暖化防止全国ネット（全国地球温暖化防止活動推進センター）
〒101-0053 東京都千代田区神田美土代町9-17 神田第三中央ビル5F
電話：03-6273-7785　FAX：03-5280-8100

発行日：2011年3月

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会

ストップ温暖化大賞 低炭素杯2011

低炭素地域づくり全国フォーラム

日　時：2001年2月5日(土)13:00〜19:00
　　2月6日(日)10:00〜15:30

会　場：東京大学・安田講堂及び山上会館

主　催：低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会

共　催：東京電力株式会社
　　トステム株式会社
　　一般社団法人地球温暖化防止全国ネット

協　賛：OMソーラー株式会社
　　木原木材店
　　株式会社ぎょうせい
　　佐川急便株式会社
　　株式会社損害保険ジャパン
　　株式会社ポッカコーポレーション

後　援：環境省

事務局：一般社団法人地球温暖化防止全国ネット
　　（全国地球温暖化防止活動推進センター）

共催

いつもの電気、もっと先へ。

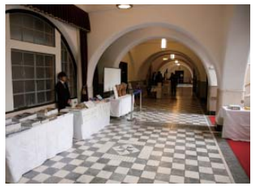
東京電力 TEPCO　TOSTEM

協賛

OMソーラーハウス　木原木材店 北はりま小径木加工センター　株式会社ぎょうせい

TRAN'SPORT! COMMUNICATION SAGAWA　損保ジャパン　POKKA

会場：東京大学 安田講堂



参加団体プレゼンテーション

分科会　第一会場

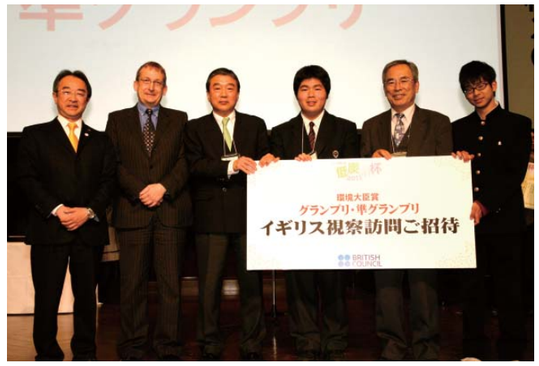
審査委員会

分科会　第二会場

記念シンポジウム

全体総括

表彰式



グリーン電力証書
The Certificate of Green Power

低炭素杯　低炭素地域づくり全国フォーラム 殿

Serial No.：バイオマス発電04B004-1004-1004-00608001A01～00612000A01

Green Power

発電電力量: 4,000kWh
Generated power

発電期間: 平成22年４月
Power generation period　In April, 2010

発電方法: 自然エネルギー発電（バイオマス発電）
Type of power generation　Natural energy (Biomass power)

発行日: 平成22年12月27日
Date of issue　December 27th, 2010

この証書は、日本国内において上記の通り自然エネルギーによる発電を行ったことを証する。
This is to certify that the above-mentioned amount of power was natural-energy-generated in Japan.

グリーンエネルギー認証センター認証済
Attested by GECC,J

日本自然エネルギー株式会社
Japan Natural Energy Company Limited

はじめに

次世代に向けた低炭素な社会を構築するため、学校・家庭・有志・NPO・企業などの多様な主体が全国各地で展開している地球温暖化防止に関する地域活動を報告し、学びあい、連携の輪を拡げる「場」を提供する「ー低炭素杯2011ー低炭素地域づくり全国フォーラム」を、「低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会」の主催により、平成23年2月5日及び6日に開催いたしました。

一昨年、3年間にわたる「一村一品・知恵の環づくり」事業が事業仕分けの結果、廃止となり、当該事業を通じて、地域の先進的な取り組みを掘り起こし、相互に紹介しあい、さまざまなノウハウを交換し、交流してきたことにより大きな資産を獲得してきた我々や全国の地域地球温暖化防止活動推進センターにとって、この取り組みを自身の手で継続させ、この結果を社会に伝える使命があると考えました。

今年度は、東京電力様、トステム様など民間の方々の多大なご支援をいただき、この低炭素杯2011を開催することができ、ご参加いただいた多くの方々に感動と元気を持ち帰っていただくことができましたことは、何よりご支援をいただいた皆様及びご出場団体のご関係者の熱意とご努力の賜物であったことは言うまでもありません。

心より感謝申し上げます。

そこで、皆様のご支援・ご努力に僅かでも報いるため、低炭素杯2011の経緯や内容を可能な限りお伝えすることを目的に、今年度の報告書を取りまとめましたので、ご一読いただければ幸いです。

何とぞ、今後とも、ご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

一般社団法人地球温暖化防止全国ネット
（低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会　事務局）

目次

はじめに …… 10

1. 挨拶 …… 12
実行委員長挨拶
環境副大臣挨拶

2. 主催、共催、協賛、後援団体・実行委員会等一覧 …… 13

3. フォーラムの全体プログラム …… 14

4. 低炭素地域づくりの取り組み発表と審査結果 …… 15
(1) エントリーから審査、表彰の流れ
(2) 審査副委員長の講評
(3) 低炭素杯　制作者のコメント
(4) 受賞者一覧

5. 参加団体 …… 20
参加団体一覧
参加団体の取り組み紹介

6. 分科会の開催 …… 70
『地域づくりとコミュニケーション』
第一会場「伝える力、広げる力【コミュニケーション力】」
第二会場「地域おこしと企業【地域活性化】」

7. 記念シンポジウムの開催 …… 81
『エコで快適な住まいで低炭素社会を実現しよう！』

8. 事業評価アンケートの結果について …… 94

9. 全体総括 …… 100

資料編

1. 実行委員会組織と事務局運営体制 …… 104

2. 参加者 …… 105

3. 広報等実績一覧 …… 106
(1) ホームページ、パンフレット、プログラム
(2) 報道発表資料
(3) その他の広報等実績
(4) メディア等の掲載

4. エントリー様式 …… 119

1 挨拶

実行委員長挨拶　実行委員長　小宮山 宏

本日は、「低炭素杯2011」にご参加いただきありがとうございます。

去年まで3年間継続されてきた一村一品事業が国の事業仕分けにより廃止となり、それを今年多くの民間企業が支えてくださり、装いも新たに「低炭素杯」という名前で継続し、本日開催できたことは大変素晴らしいことであります。

さて、地球温暖化というのは、人類の21世紀の課題であります。

二酸化炭素はいったいどこで発生しているのか。一番多く発生しているのは物をつくるところですが、残りは私たちが日々の生活の中で出しています。つまり、二酸化炭素の問題は、私たち一人ひとりの問題であり、二酸化炭素を削減していくうえで、民間むしろ市民が立ち上がって進むことが何より大事であると考えます。そう考えると、本日の「低炭素杯」は全国から集まった地域の皆様によるフォーラムですが、それもまた必然だと考えます。なぜなら、日本の中の暮らしはそれぞれ多様だからであります。北海道、東京、沖縄で、状況はまったく異なります。

一方、これは、日本の非常に有利な点ということができます。同じ緯度にあっても日本海側と太平洋側ではまったく違います。そういった意味で、多様な暮らしの場が日本にあるということができます。

それぞれの地域を、特に経済発展の著しいアジア諸国と比べてみても、非常によく似ています。つまり、日本における多様で多面的な暮らしの中でのさまざまな取り組みは、共通性を持つアジアに進出していきやすいといえるからです。

皆様が各地域でさまざまな形で努力された成果を、今日、明日とこの場で発表していただくということは、アジアへの広がりという意味からも、非常に意義のあることなのです。それでは今日と明日、よろしくお願いします。どうもありがとう。

環境副大臣挨拶　環境副大臣　近藤 昭一

「低炭素杯2011」表彰式の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

まずは、本日お集まりの皆様方が、日頃より、地域や学校、職場等における温暖化防止活動に尽力されておられることに対し、環境副大臣として、心から敬意を表します。

また、全国各地で展開している地球温暖化防止に関する地域活動を報告し・学びあい・連携の輪を拡げる、このような「場」をつくっていただいた、小宮山実行委員長はじめ委員の皆様方、共催企業の皆様方に対し、厚く御礼申し上げます。

さて、先日の世界気象機関（WMO）の発表によれば、2010年の世界の平均気温は、2005年及び1998年と並んで、観測史上最も高くなったということです。地球温暖化問題への対応は待ったなしの状況であり、世界が手を携えて取り組んでいく必要があります。

昨年末にメキシコで開催された「気候変動枠組条約の締約国会議（COP16）」においては、我が国は、松本環境大臣を先頭に、すべての主要国が参加する公平で実効性のある枠組みの必要性を粘り強く訴え、将来の合意に向けて一定の成果をあげることができました。

また、国内においては、我が国の優れた技術と、自然との共生を旨とする伝統を活かして、地球温暖化対策のフロントランナーを目指していくことが重要です。現在国会に提出している「地球温暖化対策基本法案」は、低炭素社会の構築に向けた我が国の大きな方向を示すものであり、その早期成立を図って参りたいと考えております。

このように、政府として、低炭素社会構築に向けた国内・国際の枠組みづくりに努めていきますが、この地球を健全な形で次世代に継承していくためには、まさに、全員参加の取り組みが必要です。そのためには、国、地方自治体、事業者、NPOの方々はもちろん、国民の皆様一人ひとりが、できること、なすべきことを考え、実践していただくことが欠かせません。

今回の「低炭素杯」には、37都道府県から47の代表が参加され、それぞれの地域に根ざした、アイデアにあふれた取り組みをご発表いただきました。皆様方の活動は、いずれも我が国での模範となる取り組みだと考えます。

皆様方におかれましては、今後ともより一層のご活躍をいただき、全国で地球温暖化の防止に取り組む多くの方々の目標となっていただきますよう、心より期待いたしております。

最後になりましたが、皆様方の今後ますますの御健勝と一層のご活躍をお祈りいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

2 主催、共催、協賛、後援団体・実行委員会等一覧

（1）主　　催：低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会
（2）共　　催：東京電力株式会社、トステム株式会社
　　一般社団法人地球温暖化防止全国ネット（全国地球温暖化防止活動推進センター）
（3）協　　賛：OMソーラー株式会社、木原木材店、株式会社ぎょうせい、佐川急便株式会社、
　　株式会社損害保険ジャパン、株式会社ポッカコーポレーション
（4）後　　援：環境省
（5）事 務 局：低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会 事務局
　　（一般社団法人地球温暖化防止全国ネット、株式会社オリコム）

■実行委員会

委 員 長	小宮山 宏（三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問）
副委員長	川北 秀人（IIHOE［人と組織と地球のための国際研究所］代表）
委　　員	秋元 智子（一般社団法人地球温暖化防止全国ネット理事［埼玉県地球温暖化防止活動推進センター事務局長］）
委　　員	石橋 和之（トステム株式会社広報宣伝部長）
委　　員	岩谷 忠幸（NPO法人 気象キャスターネットワーク事務局長）
委　　員	影山 嘉宏（東京電力株式会社執行役員環境部長）
委　　員	金谷 年展（慶應義塾大学大学院教授）
委　　員	高橋 康夫（環境省地球環境局地球温暖化対策課長）
委　　員	ヒュー・オリファント（ブリティッシュ・カウンシル 科学・環境部長）
委　　員	マエキタ ミヤコ（サステナ代表）
委　　員	森 摂（株式会社オルタナ代表取締役・オルタナ編集長）

■事業評価委員

委　　員	松本 安生（神奈川大学人間科学部人間科学科教授）

■審査委員会

委 員 長	小宮山 宏（三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問）
副委員長	金谷 年展（慶應義塾大学大学院教授）
委　　員	岩谷 忠幸（NPO法人 気象キャスターネットワーク事務局長）
委　　員	影山 嘉宏（東京電力株式会社執行役員環境部長）
委　　員	鈴木 秀二郎（トステム株式会社執行役員社会環境推進部長）
委　　員	ヒュー・オリファント（ブリティッシュ・カウンシル 科学・環境部長）
委　　員	マエキタ ミヤコ（サステナ代表）
委　　員	松橋 隆治（東京大学大学院教授）
委　　員	森 摂（株式会社オルタナ代表取締役・オルタナ編集長）

3 フォーラムの全体プログラム

(1) 活動のプレゼンテーション、審査及び表彰

○1日目午後：参加団体によるプレゼンテーション審査（公開）
○2日目午前：分科会の開催
○2日目午後：「低炭素杯 2011」記念シンポジウム、表彰式の開催

(2) 分科会

テーマ『地域づくりとコミュニケーション』

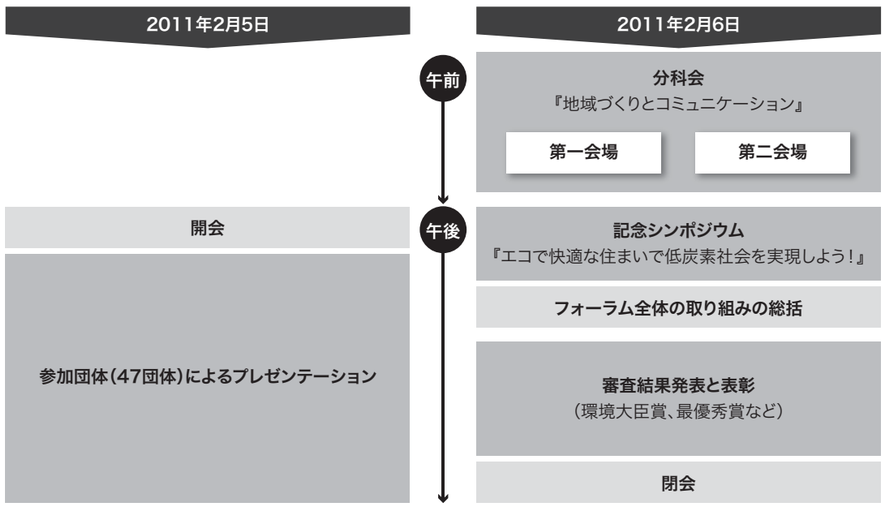
○第一会場：伝える力、広げる力【コミュニケーション力】
○第二会場：地域おこしと企業【地域活性化】

(3) 低炭素杯2011 記念シンポジウム（トステム提供）

テーマ『エコで快適な住まいで低炭素社会を実現しよう！』

コーディネーター	赤池 学氏（株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所所長）
パネリスト	小宮山 宏氏（三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問）
	大竹 俊夫氏（トステム株式会社取締役社長）
	菊川 怜さん（女優）

低炭素地域づくり全国フォーラム プログラム構成



4 低炭素地域づくりの取り組み発表と審査結果

(1) エントリーから審査、表彰の流れ

参加団体のエントリーからプレゼンテーションまで

地域センターからの推薦によりエントリーした取り組み（33件）

全国窓口へ直接エントリー（37件）

広報

エントリー数

地域センター推薦	全国窓口
33	37

第1回審査委員会（12月）

プレゼンテーション団体数
47

第2回審査委員会（1月）
地域センター推薦分＋全国窓口受付分　各賞の受賞団体の書類選考

全国フォーラム（2月5日、6日）
プレゼンテーション審査 ➡ 第3回審査委員会
各賞の受賞団体の最終決定

低炭素杯開催までの経緯

8月 26日	第1回実行委員会
10月 1日	ホームページ開設
10月 27日	第2回実行委員会
11月 15日	全国フォーラムへのエントリー受付開始
12月 15日	エントリー受付終了
12月 24日	第1回審査委員会
1月 24日	第2回審査委員会
2月5､6日	全国フォーラムの開催（第3回審査委員会）
3月 8日	第3回実行委員会

(2) 審査副委員長の講評

審査副委員長
金谷 年展

皆さん､おめでとうございます｡今回このステージに上がっておられない皆さんにも優秀賞を授与させていただいておりますので、その皆さんにも改めておめでとう、と言いたいと思います。

私も昨日プレゼンテーションを見て本当に感動いたしました。どれも本当に素晴らしいもので、賞を選ぶのは大変苦労いたしました。グランプリの環境NPOオフィス町内会の皆様は、書類審査と最終審査が同じく1位でした。間伐材を活かして森を守り、地球温暖化問題の解決につなげて地域を活性化させるため、ユーザーサイドから新しいクレジットの仕組みを示したことは大変に評価をできるものではないかと思っております。

次に準グランプリ賞の3つには異なった方向の取り組みが入っています｡今回審査員の皆様から、3つとも非常に画期的なイノベーションを伴うものであったというご意見がありました。通常、開発というと安全性に問題があったりコストが高かったり、いろいろ実用化の問題が非常に大きいものが多かったと思いますが、今回は非常に効果が高く、単に地球温暖化防止につながるというだけではなく、安全性やコストもしっかりと見据え、普及促進や販売のネットワークなども含めて考えられ、非常にレベルの高いイノベーションが見受けられました。

最終審査で最も点数を伸ばしたのが鹿児島県の出水市六月田下自治会さんです。大変感動するプレゼンテーションをしていただきました。楽しんでやるということはまさに低炭素杯の真骨頂ではないかと思います。しかも、集落全員が参加するという考え方を我々は高く評価させていただきました。光熱費を浮かして温泉旅行に行けたと嬉しそうに言っていただけたことは審査員冥利に尽きます。

その他でも、賞を差し上げたい取り組みがたくさんありましたので、是非、再チャレンジをしていただきたいと思いました。今回そういったたくさんの候補の中から、審査員特別賞を4つ選びました。

まず滋賀銀行さんは非常に有名な環境先進企業です。いろんな企業が低炭素社会に向けてイノベーションや商品開発を行うためには、金融機関の取り組みはなくてはならないということで審査員特別賞を授与させていただきました。

ENEX株式会社さんは地下水熱利用というこれから注目される分野です。それを地域資源として活用をしていくことがこれから重要です。そのような地域資源を活用して地域経済を活性化させるという意味で授与させていただきました。

次に、ビレッジ美合館さんは、審査員の中で感動した方が多く、自社の建物にあったボイラーを自社開発して、その余熱や排熱まで使いきり、ほとんど石油を使わずにできるシステムをつくられた、まさに素晴らしい取り組みということで授与させていただきました。

高山グリーンホテルさんも、省エネ、新エネ、堆肥化というトータルな取り組みを長期間継続してきたことに敬意を表して授与させていただきました。

私自身、皆様のプレゼンテーションを見させていただいて、ある言葉を思いだしました。それは、イギリスのウィリアム・アーサー・ワードという社会学者が「教師とはなにか」について言われた言葉です。「凡庸な教師はただ話す」「よい教師は理解させようと努める」「優秀な教師は自らやってみせる」そして「本当に優秀な教師は心に火をつける」という言葉です。

今回のプレゼンテーションを見まして、私の心に火がつきました。今日ここに集い、発表をされた皆様が私の先生だと思っております。素晴らしい本当に優秀な教師の皆様に拍手をしていただきたいと思います。

最後に、私は改めてこの低炭素杯という形でストップ温暖化大賞が復活して、本当によかったと思っています｡どうも皆様ありがとうございました。

(3) 低炭素杯　制作者のコメント

「低炭素杯」杯の制作 その素材と背景へのこだわり

自然界には人の創造など及びもつかない、多種多様な造形の美しさ、不思議さに満ち溢れています。

それらに尊敬と畏敬の念を抱くとともに、何とか近づきたいという思いに愚かにも取りつかれ、創作活動を続けてきましたが、地球の病む姿を、世界で起こるさまざまな現象を目の当たりにしたとき、地球温暖化への警鐘としての創作活動へと変化してきました。

単なる「表彰杯」ではなく、低炭素社会の実現に向け、地球温暖化防止活動に取り組む人々の活動を讃えるに値する、背景を持った素材にしなければ意味がないと思い、素材探しに山へ分け入りましたが、皮肉にも、温暖化の影響なのでしょう、森には風倒木が幾本もあり、背景を語るには十分な素材がやすやすと手に入りました。

日本のみならず、世界で猛威を振るう自然災害や異常気象！
「何とかしなければ」と高い意識を持ち立ち上がった人々が此処にいます。

見て取れるように、幾つにも重なり連なった輪が人々の結びつきを表し、個々の個性と一人ひとりのその活動のつながりが私たちの青き地球を支えています。
「低炭素杯」の芽が大きく育ち、それぞれの活動の輪が世界へと羽ばたくよう、祈りをこめて制作させていただきました。

青く美しい地球の姿を子供たちに残せるのか否かは、私たちにかかっています。

「低炭素杯」が機軸となり、地球温暖化防止への取り組みが大きなうねりとなるように皆様に期待しております。

私たちが地球人であることを忘れないために・・・

〈作者プロフィール〉
齊藤 公太郎
woodart greenart QUPO 主宰
風倒木、廃材などを素材とし､eco､自然環境を制作テーマとする、木工造形家。
有機農法を通して自然環境問題に取り組む、有機農業家。
スローライフを山里より発信。
http://www.woodart-qupo.com/

(4) 受賞者一覧

環境大臣賞

■グランプリ

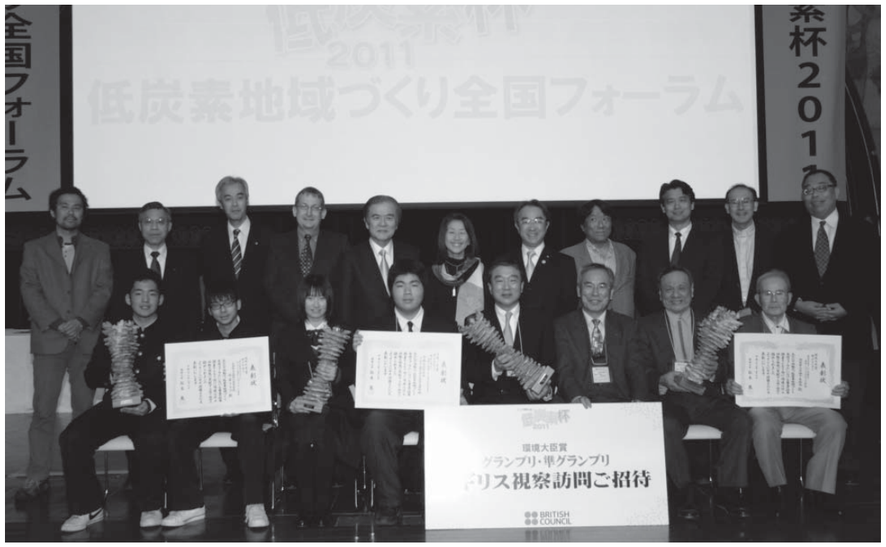
東京都　環境NPOオフィス町内会
森の町内会（新たな仕組みによる間伐促進と森林のCO_2吸収）

■準グランプリ

大分県　大分県立日田林工高等学校 林産クラブ
「里山再生プロジェクト」
竹とバークを原料としたファイバーボードの開発

鹿児島県　出水市六月田下自治会
集落全員でCO_2削減10%達成しつづける元気なエコ集落

京都府　京都府立桂高校 TAFF「地球を守る新技術の開発」班
都市を冷やせ！ ～温暖化・水消費を抑える緑化システムの普及～



最優秀賞

■地域でエコ賞

静岡県　静岡県立富岳館高等学校・光触媒研究班
富士山の環境を元気にする富岳館高校生の挑戦

■家庭でエコ賞

北海道　わがやの省エネコンテスト実行委員会
平成22年度「わがやの省エネコンテスト」

■グローバル賞

兵庫県　特定非営利活動法人 ワット神戸
省エネ・新エネでストップ ザ 温暖化

■コミュニケーション賞

東京都　エコ・リーグ Campus Climate Challenge 実行委員会
Campus Climate Challenge（CCC）

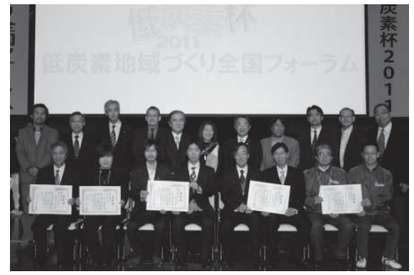
■審査員特別賞

滋賀県　株式会社滋賀銀行
「しがぎん琵琶湖原則」で、お客さまと手を携えて
地球環境保全を

秋田県　ENEX株式会社
地下水熱ヒートポンプを利用した菌床しいたけ栽培

香川県　ビレッジ美合館
間伐材でエコ温泉

岐阜県　高山グリーンホテル
環境にやさしいホテルをめざして



■WEB投票賞

愛知県　たはらエコ・ガーデンシティ地域協議会
みんなで減らそうCO_2 簡単なことから1つずつ実践

5 参加団体　参加団体一覧（プレゼンテーション順）

No.	地域	代表団体	取り組み名	掲載頁
1	熊本県	ESDキッズクラブ	親子で実践！ ECOしつけ！	35
2	奈良県	奈良県立王寺工業高等学校　無線部	「地球に優しいものづくり 地球を救うひとづくり」	36
3	福井県	社会福祉法人 コミュニティーネットワークふくい	竹屋根材で遮熱！ グリーンオフィスプロジェクトでCO_2削減	37
4	静岡県	吉原工業高等学校 花エコプロジェクト2010	ひまわりロール2010、関門海峡を渡る!!	38
5	愛知県	たはらエコ・ガーデンシティ地域協議会	みんなで減らそうCO_2 簡単なことから1つずつ実践	34
6	山梨県	山梨県地中熱利用推進協議会	自然エネルギー地中熱ヒートポンプシステムの推進	39
7	東京都	環境NPOオフィス町内会	森の町内会 （新たな仕組みによる間伐促進と森林のCO_2吸収）	22
8	愛媛県	愛媛県立三島高等学校 生徒会	高校生がやっちゃいました!! ～四国中央市油田化プロジェクト～	40
9	福岡県	魚町商店街振興組合、 魚町一丁目商店街振興組合	太陽光発電（魚町エコルーフ）を活用した 商店街のにぎわいづくり	41
10	群馬県	粕川フラワーロードの会	花緑とリユース食器で見える 美しいふるさと・美しい地球	42
11	大阪府	大阪府立佐野工科高等学校 自動車部	技術の力で竹林被害を食い止めよう！	43
12	宮城県	山﨑義幸	家庭から発信「寺・園児・地域社会へのエコ拡大」	44
13	兵庫県	特定非営利活動法人 ワット神戸	省エネ・新エネでストップ ザ 温暖化	28
14	秋田県	ENEX株式会社	地下水熱ヒートポンプを利用した菌床しいたけ栽培	31
15	滋賀県	滋賀県立大学 グリーンコンシューマーサークル	大学生が文具で広げるグリーン購入	45
16	三重県	三重大学 環境ISO学生委員会	三重大学における環境ISO学生委員会を 活動主体とする3R活動	46
17	京都府	京都府立北桑田高等学校 森林リサーチ科	元気な森づくり ～京都発・森に囲まれた高校生たちのチャレンジ～	47
18	香川県	ビレッジ美合館	間伐材でエコ温泉	32
19	福島県	株式会社ひまわり	人に、地球にやさしい脱・温暖化地域づくり	48
20	島根県	合資会社一文字家	地産地消で110年 こだわりの駅弁めしあがれ	49
21	山口県	宇部市地球温暖化対策ネットワーク	2009年度省エネ家電普及促進事業	50
22	大分県	大分県立日田林工高等学校 林産クラブ	「里山再生プロジェクト」 竹とバークを原料としたファイバーボードの開発	23
23	滋賀県	株式会社滋賀銀行	「しがぎん琵琶湖原則」で、 お客さまと手を携えて地球環境保全を	30
24	北海道	当別町	当別ふれあいバスとバイオディーゼル燃料による 環境プロジェクト	51

No.	地域	代表団体	取り組み名	掲載頁
25	東京都	特定非営利活動法人 外断熱推進会議	外断熱建物の新築、改修によるCO_2削減	52
26	富山県	黒部・宇奈月温泉観光活性化協議会 でんき宇奈月プロジェクト実行委員会	宇奈月が熱い！ 電気で元気!! でんき宇奈月プロジェクト発進	53
27	千葉県	特定非営利活動法人 ビオスの会	うちのバクちゃんが生ごみをパクパク ―家庭系生ごみ処理普及活動	54
28	東京都	エコ・リーグ Campus Climate Challenge実行委員会	Campus Climate Challenge（CCC）	29
29	佐賀県	佐賀環境フォーラム	正しい環境認識を有し、 環境配慮意識の高い人材の育成	55
30	石川県	小松電子株式会社	地域のRECO環境循環システム （生ごみの堆肥化リサイクル）	56
31	福岡県	北九州市 環境局環境政策部 環境学習課	楽しく学べる環境教育ワークブック『みどりのノート』	57
32	岩手県	いわてバイオディーゼル燃料 ネットワーク	―天ぷら油で車を走らせよう― 地球温暖化防衛軍	58
33	広島県	広島市地球温暖化対策地域協議会	省エネ電球キャンペーン	59
34	京都府	京都府立桂高校TAFF 「地球を守る新技術の開発」班	都市を冷やせ！ ～温暖化・水消費を抑える緑化システムの普及～	25
35	鳥取県	三朝町調理センター	地域連携による「食育」が導いた 地球温暖化防止活動	60
36	和歌山県	紀州大地の会	EM菌群・HDM菌群による 生ゴミの総合的効率的処理システム！	61
37	青森県	特定非営利活動法人 青い海	低炭素社会実現に向けた ソーラー船開発・活用普及啓発事業	62
38	栃木県	栃木県立栃木農業高等学校 地域おこしプロジェクト班	ヨシの恵みで、とりもどせ農村のヨシズ産業・ よみがえれ足尾の森	63
39	東京都	丸の内朝大学企画委員会	丸の内朝大学 ～出勤前のジブン磨き～	64
40	福岡県	菱化ロジテック株式会社 九州支店 二島物流センター	小グループ活動による省燃料活動	65
41	静岡県	静岡県立富岳館高等学校・光触媒研究班	富士山の環境を元気にする富岳館高校生の挑戦	26
42	岐阜県	高山グリーンホテル	環境にやさしいホテルをめざして	33
43	山形県	港屋商事株式会社	古新聞でガソリン割引 ～古紙回収を通じての環境保護活動～	66
44	秋田県	秋田県商工会連合会	あきた「エコリンピック」商工会50年目の維新!!	67
45	埼玉県	環境まちづくり地域協議会 in にいざ	緑のカーテンを通した地域一体型の環境学習	68
46	鹿児島県	出水市六月田下自治会	集落全員でCO_2削減10%達成しつづける 元気なエコ集落	24
47	北海道	わがやの省エネコンテスト実行委員会	平成22年度「わがやの省エネコンテスト」	27

環境大臣賞 グランプリ

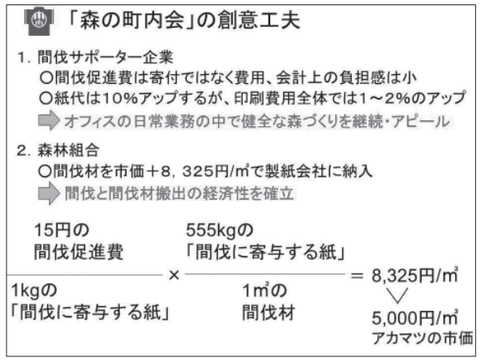
森の町内会
（新たな仕組みによる間伐促進と森林のCO2吸収）

東京都 環境NPOオフィス町内会
〒116-0013　東京都荒川区西日暮里2-25-1
ステーションガーデンタワー 807
03-5156-0408
http://www.mori-cho.org/

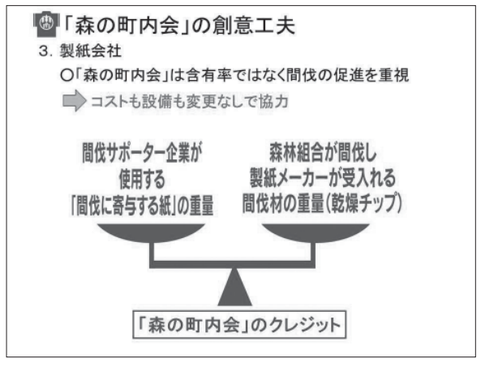
「森の町内会」は、サポーター企業に使用してもらう「間伐に寄与する紙」に上乗せした支援費の全額（15円/kg）を間伐促進に充当する新たな仕組みです。現在、4地域で207社が参加し、紙の使用量は835t/年に及び、58ha/年の間伐を促進し、491t-CO_2/年を吸収する元気な森づくりに貢献しています。

1

2

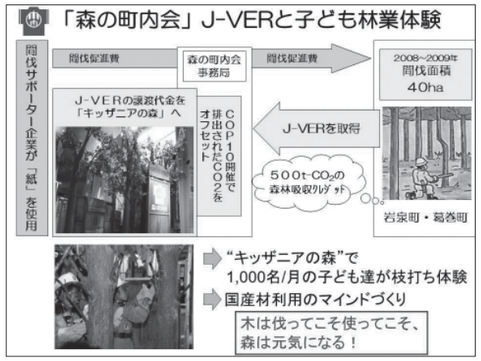


3



4

5



6

環境大臣賞 準グランプリ

「里山再生プロジェクト」竹とバークを原料としたファイバーボードの開発

大分県 大分県立日田林工高等学校 林産クラブ
〒877-0083　大分県日田市吹上町30
0973-22-5171
http://hitarinkou-h.oita-ed.jp/

「里山」にはびこる竹と、林業地である大分県日田地方に大量に産出され処理に困っている樹皮（バーク）を原料とした全く新しい形のファイバーボードを開発。接着剤を使用しないため安全でJIS規格にも合格。地域や竹産業工業会、研究機関、企業と連携を持ちながら、学校から技術情報を発信し、地域の活性化に取り組んできました。

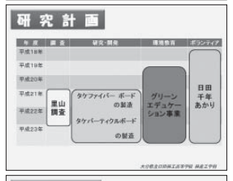
1

2

3

4

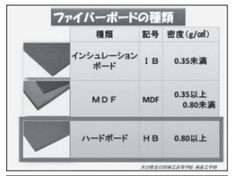
5



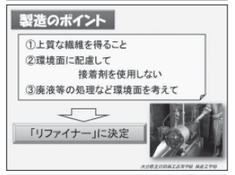
6

7

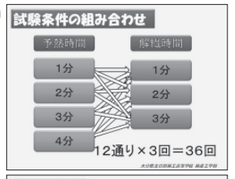
8



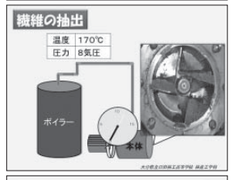
9



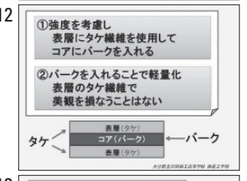
10



11



12

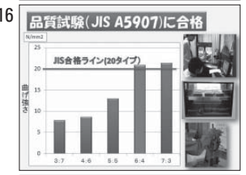


13

14

15

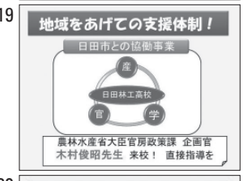
16



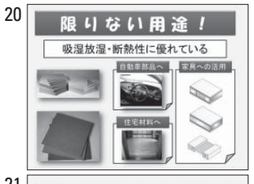
17

18

19

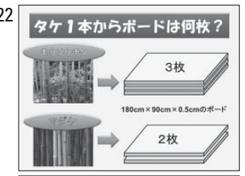


20

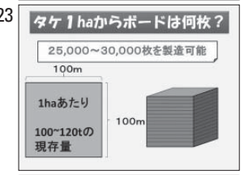


21

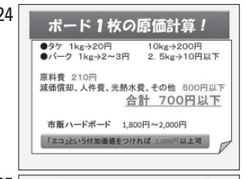
22



23



24



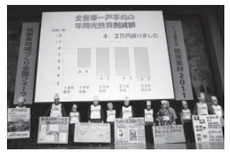
25

26

27

28

環境大臣賞 準グランプリ



集落全員でCO2削減10%達成しつづける元気なエコ集落

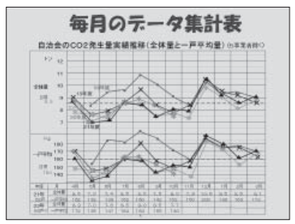
鹿児島県 出水市六月田下自治会
〒899-0126　鹿児島県出水市六月田町491
0996-67-2693
http://www.mbc.co.jp/umigame/eco.html

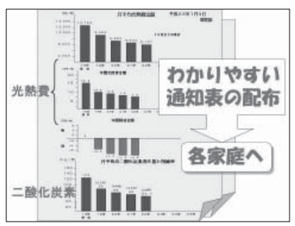
平成18年4月から集落全世帯で温室効果ガス（二酸化炭素）の削減活動に取り組んでいます。各家庭から毎月提出する実績データからCO2発生量と光熱費を捉え、目標に対し省エネ活動の結果がどうだったか各家庭と集落全体で評価できるシステム運営で、国が進める低炭素社会づくりを集落全世帯で目指す活動です。

1

2

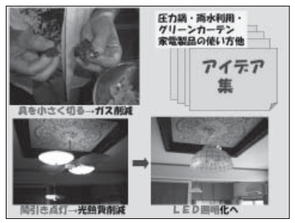
3

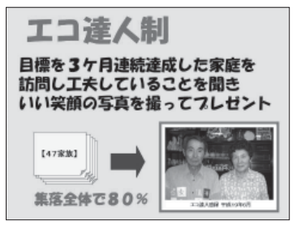
4


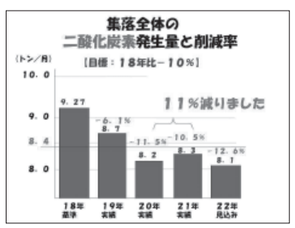
5


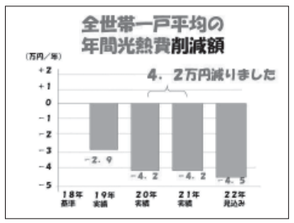
6

7

8


9


10


11


12

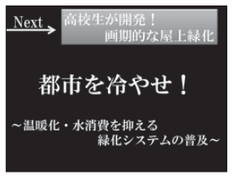
13

環境大臣賞 準グランプリ

都市を冷やせ！
～温暖化・水消費を抑える緑化システムの普及～

京都府 京都府立桂高校
TAFF「地球を守る新技術の開発」班
〒615-8102　京都府京都市西京区川島松ノ木本町27
075-391-2151
http://www.kyoto-be.ne.jp/katsura-hs/

温暖化防止のためには都市・屋上の緑化が効果的ですが、場合によっては水問題・外来種の問題を引き起こしかねません。そこで、在来種であるノシバの発芽及び育成に関する画期的な技術と、軽量・節水型の屋上緑化システムを開発。学校の屋上緑化に活用しています。ノシバ育成技術は、古墳の復元にも活用されはじめています。

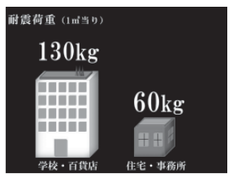
1


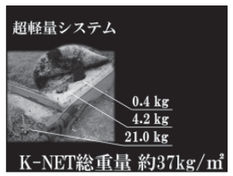
2

3

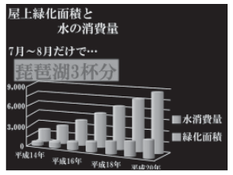
4

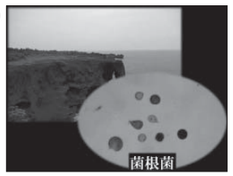
5

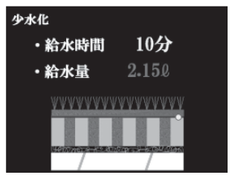
6


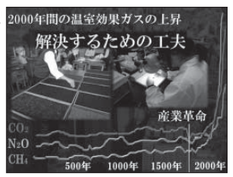
7


8

9


10


11


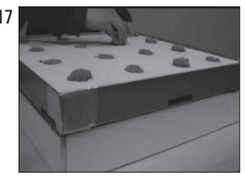
12


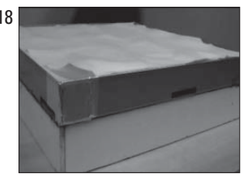
13

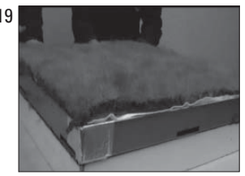
14

15

16

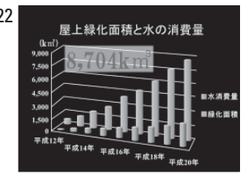
17


18


19


20

21

22


最優秀賞 地域でエコ賞

富士山の環境を元気にする 富岳館高校生の挑戦

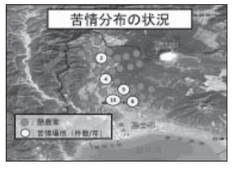
静岡県 静岡県立富岳館高等学校・光触媒研究班
〒418-0073　静岡県富士宮市弓沢町732
0544-27-3205
http://www.fugakukan-h.sakura.ne.jp/

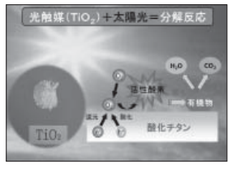
光触媒による畜産の脱臭を大学と検証、高い分解能力のあるDNA-TiO2を作成しました。太陽光で反応する（CO_2削減）光触媒再生紙チップを企業と開発、静岡県（富士山麓）および北海道、秋田県の126酪農家を視野に導入しました。堆肥は生徒や他農家のキャベツ経営に活用、循環型農業を確立しました。

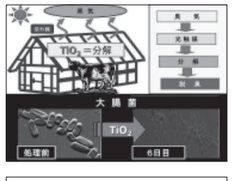
1

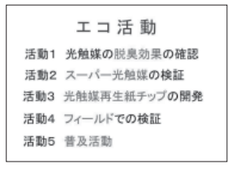
2

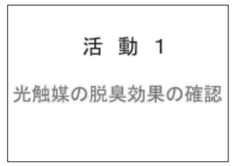
3

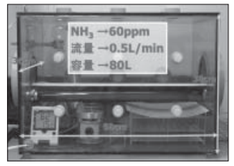
4


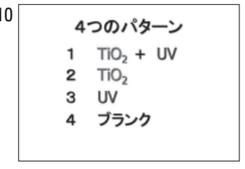
5


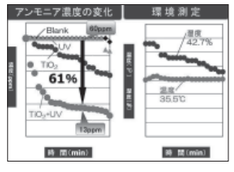
6


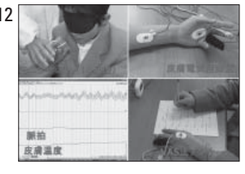
7


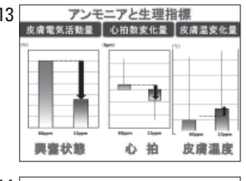
8


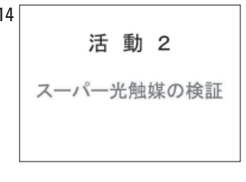
9


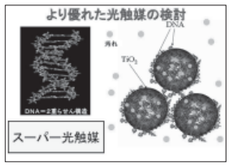
10


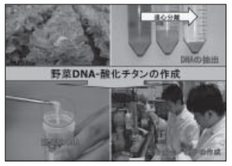
11


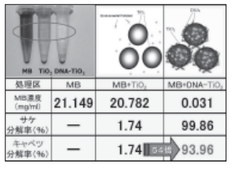
12


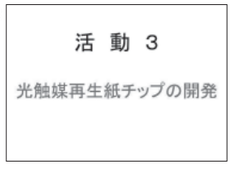
13


14


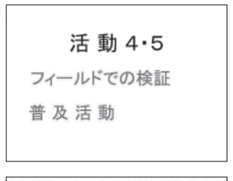
15


16


17


18


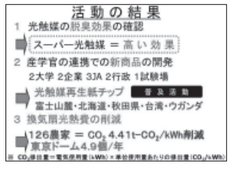
19

20


21

22

23

24


25

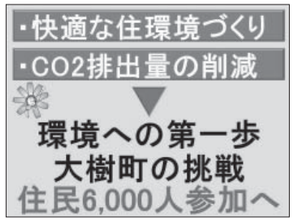
最優秀賞 家庭でエコ賞

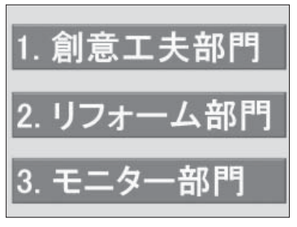
平成22年度 「わがやの省エネコンテスト」

北海道 わがやの省エネコンテスト実行委員会
〒089-2195　北海道広尾郡大樹町東本通33
01558-6-2113
http://www.town.taiki.hokkaido.jp/

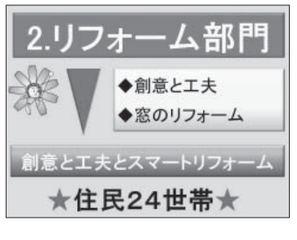
大樹町と一般財団法人生活環境研究センターは、快適な住環境をつくり住民の環境に対する意識を高めるため、住宅の高気密・高断熱化のための省エネ対策を実験的に行い、CO_2（二酸化炭素）排出量を削減して地球環境保全に資することを目的に「わがやの省エネコンテスト」を行っています。

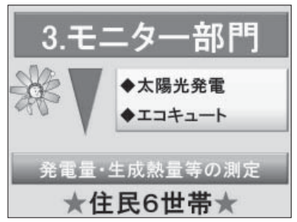
1

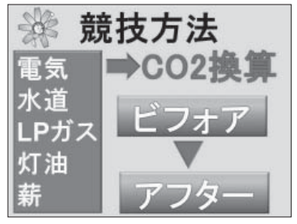
2


3


4

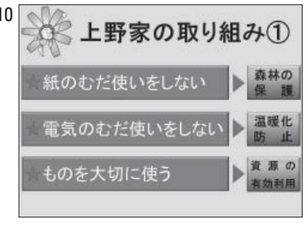
5


6


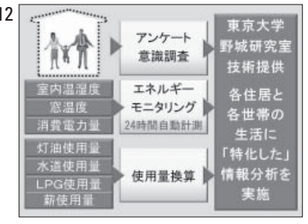
7


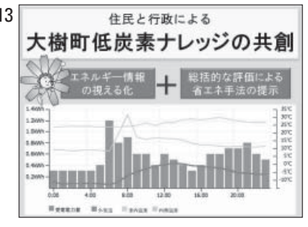
8

9

10


11

12


13


14

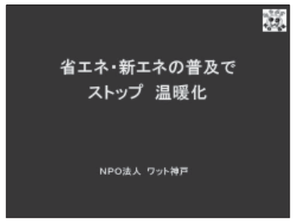
15

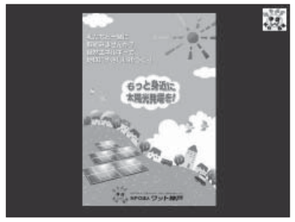
最優秀賞 グローバル賞

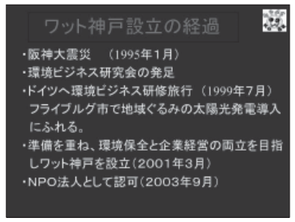
省エネ・新エネでストップ ザ 温暖化

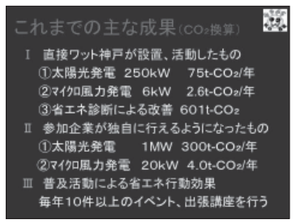
兵庫県 特定非営利活動法人 ワット神戸
〒650-0042　兵庫県神戸市中央区波止場町5-4　中突堤中央ビル
078-335-0908
http://www.watt-kobe.jp/

地域住民および事業者に対する新エネルギーおよび省エネルギーに関する普及啓発、教育、指導事業。並びに新エネルギーおよび省エネルギー実施事業者への技術支援、コンサルティング活動。

1


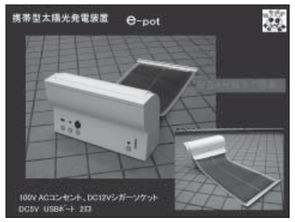
2


3


4


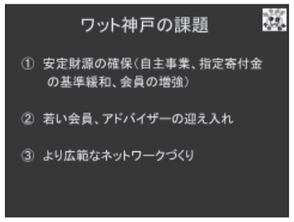
5

6

7


8

9

10


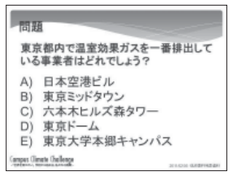
最優秀賞 コミュニケーション賞

Campus Climate Challenge (CCC)

東京都 エコ・リーグ
Campus Climate Challenge実行委員会
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19　銀鈴507
03-5225-7206
http://ccc.eco-2000.net/

2008年に環境NGO『エコ・リーグ』を母体として、大学生を中心に設立。学生の過ごすキャンパスを“大きな実験室”と捉え、大学が社会に率先して温暖化対策を行うことを支援するとともに、大学生の意識向上を目標としています。 ①大学の温暖化対策の調査・先進事例の発信 ②大学の温暖化防止活動の支援・能力向上 等の取り組みを行っています。

1

2


3

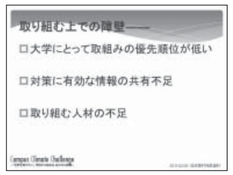
4

5

6

7

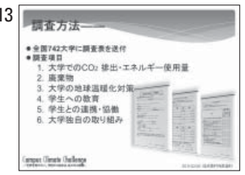
8

9


10

11

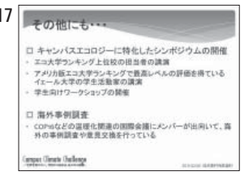
12

13


14

15

16

17


18

審査員特別賞

「しがぎん琵琶湖原則」で、お客さまと手を携えて地球環境保全を

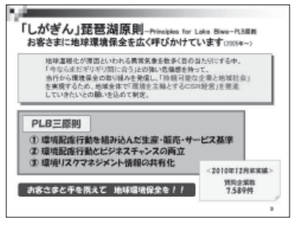
滋賀県 株式会社滋賀銀行
〒520-8686　滋賀県大津市浜町1-38
077-521-2207
http://www.shigagin.com/

琵琶湖をはじめとする地球環境保全への願いを込めた、「しがぎん琵琶湖原則」への賛同を呼びかけています。ご希望の方には当行独自の「環境格付」を実施し、環境経営に対する「気づき」のツールとしてご活用いただいています。また「琵琶湖原則支援資金」により、環境保全に取り組まれるお客さまをサポートしています。

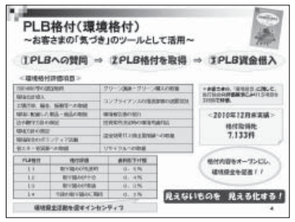
1

2

3



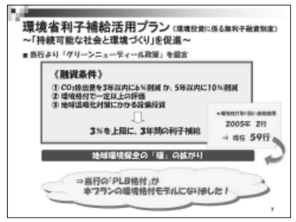
4



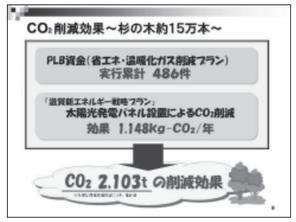
5

6

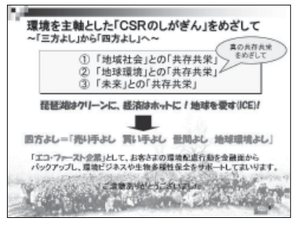
7



8



9



審査員特別賞

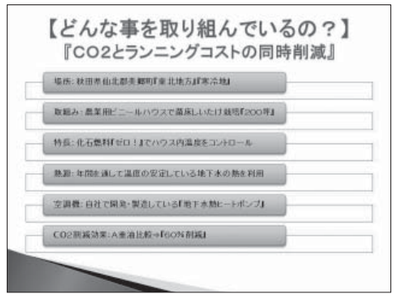
地下水熱ヒートポンプを利用した菌床しいたけ栽培

秋田県 ENEX株式会社
〒019-1522　秋田県仙北郡美郷町金沢東根字蛭川11
0187-84-1170

当社は、これまでの化石燃料を使用したハウス栽培における燃料消費量の削減を目的として、自社開発・製造した地下水熱利用ヒートポンプエアコンによる冷暖房を使用して、菌床しいたけの周年栽培を行いました。その有用性を実証するためにデータを収集し、その結果を周知させることで低炭素型農業の普及拡大を目指しています。

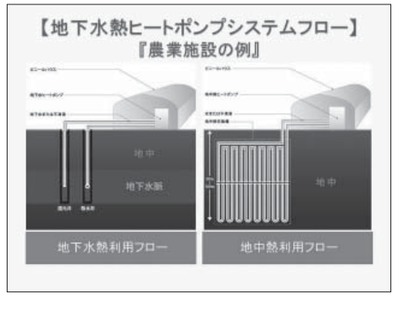
1

2

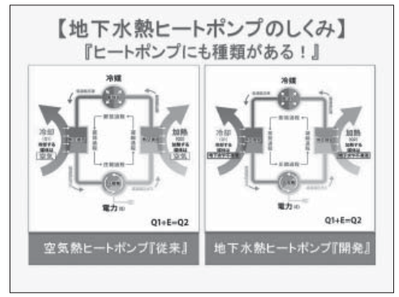


3

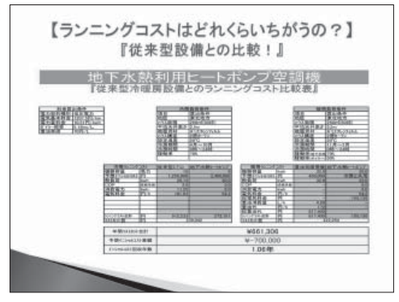
4



5



6



7

審査員特別賞

間伐材でエコ温泉

香川県 **ビレッジ美合館**

〒766-0204　香川県仲多度郡まんのう町勝浦1番地
0877-84-2001
http://www.miaikan.co.jp/index.php?id=7

地元の山林の間伐事業で発生した間伐材をそのまま燃料として使用できるボイラーを開発し、乾燥した間伐材を温泉施設のボイラー燃料として利用することで、重油燃料に比べて大幅に二酸化炭素の排出を抑制しています。なお、間伐材の地産地消を目指した取り組みや、地元の中学生に体験学習などを行い、温暖化防止の普及にも努めています。

1

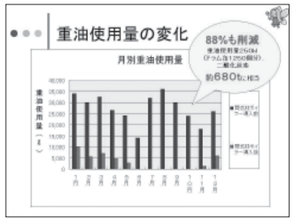
2

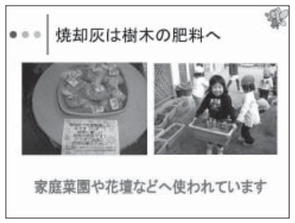
3

4

5

6

7


8


9

10

11

12

13

審査員特別賞

環境にやさしいホテルをめざして

岐阜県 **高山グリーンホテル**

〒506-0031　岐阜県高山市西之一色町2-180
0577-33-5500
http://www.takayama-gh.com/past/eco-hotel.html

「環境にやさしいホテルの実現」を目指して、ホテル施設の省エネを推進するために、地産地消のエネルギーとして『木質ペレット』を使用するボイラを導入し、高山市バイオマスタウン構想との連携を図っています。また、『地域循環社会』を目指す町ぐるみの取り組みをエコツアーとして紹介し、他地域への啓発を行っています。

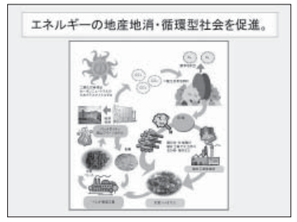
1

2

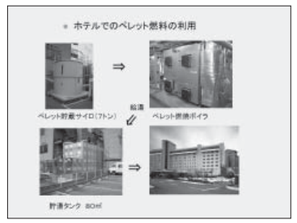
3

4

5

6


7

8


9

10

WEB投票賞

みんなで減らそうCO2 簡単なことから1つずつ実践

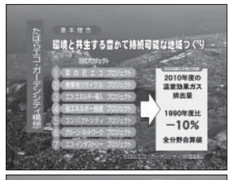
愛知県 たはらエコ・ガーデンシティ地域協議会

〒441-3492　愛知県田原市田原町南番場30-1
☎0531-23-7401
http://www.city.tahara.aichi.jp/

『地球温暖化防止都市宣言に伴う温室効果ガス削減の普及啓発』①たはらエコチャレンジ宣言の登録者の拡大。②地球温暖化対策実践取り組みアイデアの募集及び表彰。 ③小中高生及び一般を対象にした地球温暖化防止啓発ポスターの募集及び表彰。

1

2

3


4

5

6

7

8

9

10

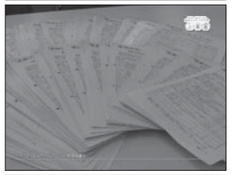
11

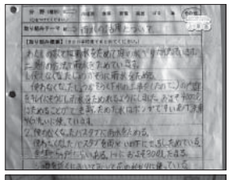
12

13

14

15

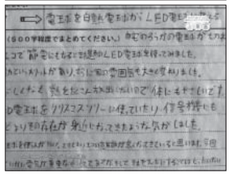
16


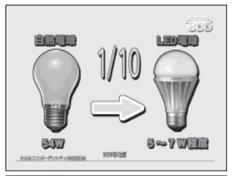
17


18

19

20

21


22


23

24

25

26

27

28

優秀賞

親子で実践！ ECOしつけ！

熊本県 ESDキッズクラブ

〒860-0047　熊本県熊本市春日4-36-12
☎096-324-2039
http://esd-kidsclub.ecgo.jp/

ESDキッズクラブのメンバーと保育園・幼稚園の先生方が連携して、1）園児の環境教育（ECOしつけ）、2）園の環境経営を行い、3）園児の保護者へ環境配慮活動を啓発し、4）園の行事などを通じて、環境配慮活動の地域社会への拡大を図る活動です。現在、熊本市とその周辺の7園で実施中。今後、全国展開を目指しています。

1

2

3

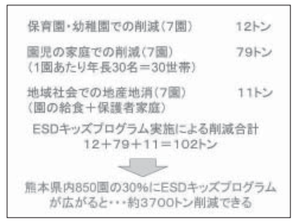
4

5

6

7

8

9


10

優秀賞

「地球に優しいものづくり 地球を救うひとづくり」

奈良県 奈良県立王寺工業高等学校 無線部
〒636-0012　奈良県北葛城郡王寺町本町3-6-1
0745-72-4081
http://www.oji-ths.ed.jp/

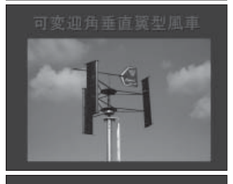
環境に優しい作品を開発し、地域で実施されている環境フェアに参加しています。これからの地球環境を考える子ども達が、楽しんで環境に優しい作品に興味を持ち、試乗や体験を通して地球環境の大切さを実感してもらっています。また作品に興味関心を持つことで、将来“環境を考えたものづくり技術者”への夢をも持たせています。

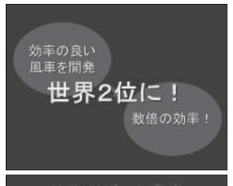
1

2

3

4

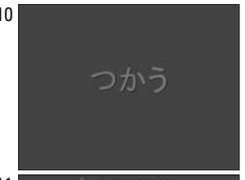
5


6


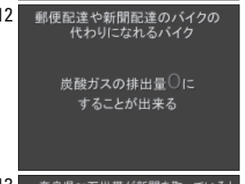
7

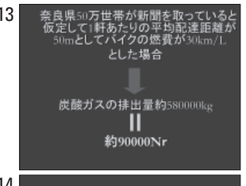
8

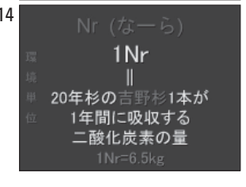
9

10


11

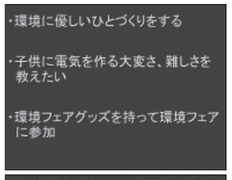
12


13


14


15

16

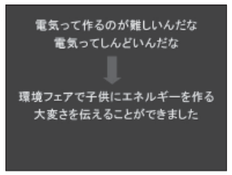
17


18

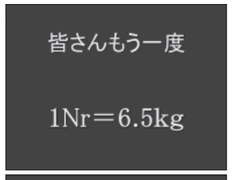
19

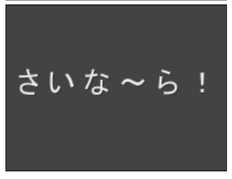
20

21

22


23

24


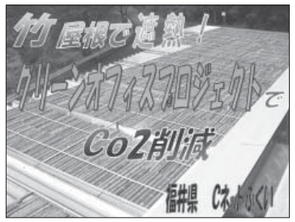
25


優秀賞

竹屋根材で遮熱！ グリーンオフィスプロジェクトでCO2削減

福井県 社会福祉法人
コミュニティーネットワークふくい
〒636-0012　福井県福井市島寺町92
0776-98-2910
http://www.c-net.or.jp/

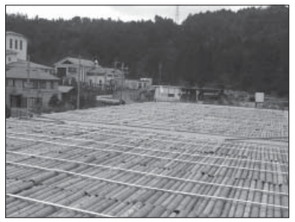
「竹材環境対策事業」として高齢者と障がい者が共に働き元気に暮らす社会づくりを目指し、荒廃する里山保全と地球温暖化防止に向けた商品開発として、遮熱用竹屋根の施工、竹炭製造に取り組んでいます。

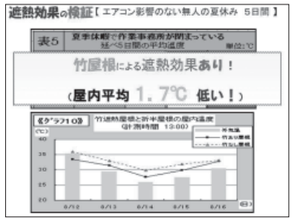
1


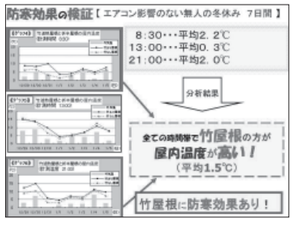
2

3

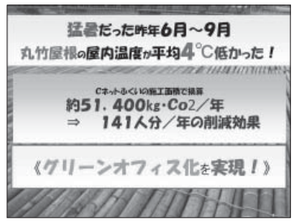
4

5


6


7


8

9


10

優秀賞

ひまわりロール2010、関門海峡を渡る!!

静岡県 吉原工業高等学校
花エコプロジェクト2010
〒417-0847　静岡県富士市比奈2300
0545-34-1045
http://www.jikkyo.co.jp/downloadcontents/6183421497.pdf

富士商工会議所との連携事業で、地域の学校や企業でひまわりを栽培して茎をパルプ化し、地元製紙工場の協力を得て3代目“ひまわりロール2010”が完成。本年度は福岡県北九州市で開催された環境関連イベント「エコスタイルタウン2010」で、ひまわりを活用し地域を巻き込んだものづくり教育について発表し、マスコミや地元に反響を呼びました。

1

2

3

4

5

6

7

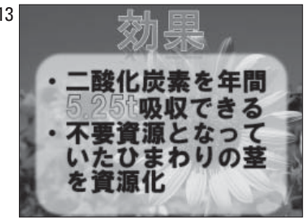
8

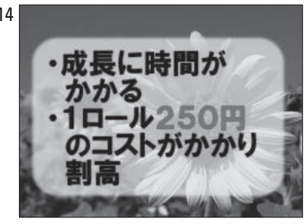
9

10

11

12

13


14


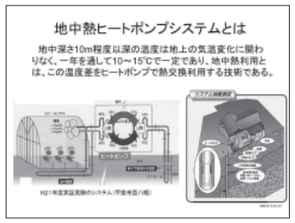
優秀賞

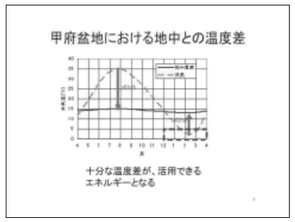
自然エネルギー 地中熱ヒートポンプシステムの推進

山梨県 山梨県地中熱利用推進協議会
〒400-0845　山梨県甲府市上今井町740-4
(株)萩原ボーリング内
055-243-4777
http://www.a-mec.jp/ygha/index.html

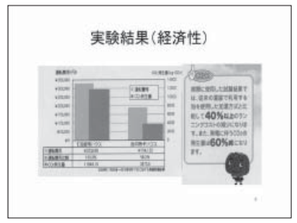
地中深さ10m程度以深の温度は地上の気温変化に関わりなく、一年を通して10～15℃で一定であり、地中熱利用とは、この温度差をヒートポンプで熱交換利用する技術です。この地域の豊かな地下水資源を地中熱ヒートポンプとして利用し、地球温暖化防止に資する自然エネルギーを開発・普及促進することにより、環境貢献と地域の活性化を目指しています。

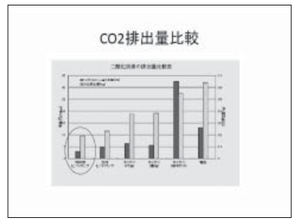
1

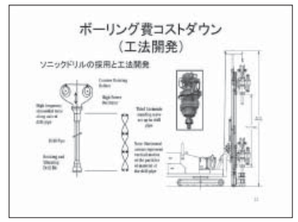
2


3


4

5


6


7


8

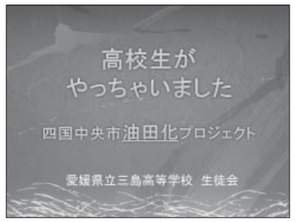
9

優秀賞

高校生がやっちゃいました!!
～四国中央市油田化プロジェクト～

愛媛県 愛媛県立三島高等学校 生徒会
〒799-0405　愛媛県四国中央市三島中央5-11-30
0896-23-2136
http://ehm-mishima-h.esnet.ed.jp/

「高校生の声を地域に発信したい。」三島高校生徒会はそれを形にすべく「温暖化防止活動」をテーマに選びました。企業訪問を契機として使用済み天ぷら油のバイオディーゼル燃料化に着目し、校内はもちろん商店街・飲食店・幼稚園・小中学校での油回収活動を進めています。目標は高校生が手掛ける四国中央市の油田化です。

1


2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

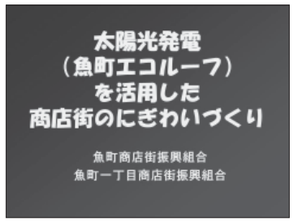
12

優秀賞

太陽光発電（魚町エコルーフ）を活用した商店街のにぎわいづくり

福岡県 魚町商店街振興組合、
魚町一丁目商店街振興組合
〒802-0006　福岡県北九州市小倉北区魚町2-6-1
093-521-6801
http://www.uomachi.or.jp/

国道をはさんで立地している2つの商店街アーケードをつなぎ、一体的なショッピングモールを整備しました。そのシンボルである『魚町エコルーフ』には、太陽光発電をはじめLED照明や光触媒塗装を採用しています。この整備を契機として、エコをキーワードとした活性化のイベントの取り組みが行われています。

1


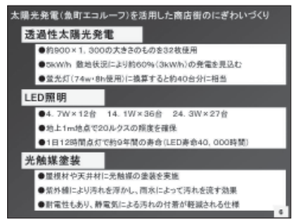
2

3

4

5

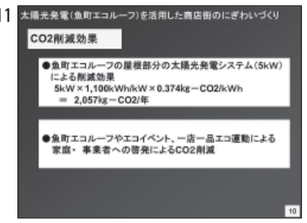
6

7


8

9

10

11


12

優秀賞

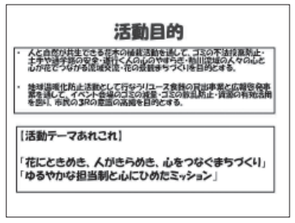
花緑とリユース食器で見える 美しいふるさと・美しい地球

群馬県 粕川フラワーロードの会
〒372-0022　群馬県伊勢崎市日乃出町285-1
☎0270-25-6334

①一級河川粕川堤防への年間を通した花緑の植栽・草刈り・川のゴミ拾いなどの環境美化活動。②コミュニティーガーデン・駅・公共施設への植花活動や、園芸教室などを通して、花と緑あふれるまちづくりと仲間づくり活動。 ③リユース食器の貸出しを通した地球温暖化防止活動。④環境フォーラム、行政への提言などエコイベントの啓発と3Rの推進活動。

1

2

3


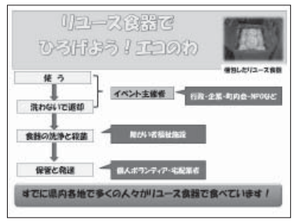
4

5

6

7

8

9


10

11

12

優秀賞

技術の力で竹林被害を 食い止めよう！

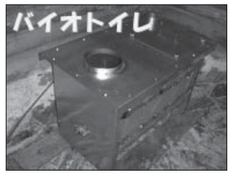
大阪府 大阪府立佐野工科高等学校 自動車部
〒598-0012　大阪府泉佐野市高松東1-3-50
☎072-462-2772
http://www.osaka-c.ed.jp/sano-t/

①実用的な移動式炭化炉を製作し、実演することにより技術を普及させます。②製作した炭の有効利用法を提案します。空気や水の浄化や吸湿性を実験で示し、炭の利用を促進することにより竹林の間伐を進めます。③家庭から出る廃天ぷら油の積極的な利用法として、炭焼の燃料にします。これにより市民の意識を変え、廃油による汚染の防止につながります。

1

2

3

4


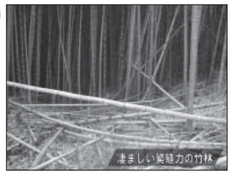
5

6

7

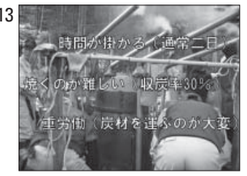
8

9

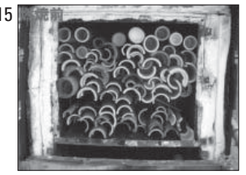
10


11

12

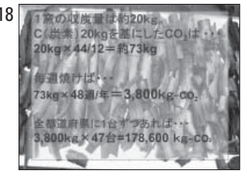
13


14

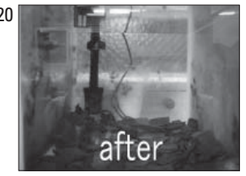
15


16

17

18


19

20


21

22

23

優秀賞

家庭から発信「寺・園児・地域社会へのエコ拡大」

宮城県 山﨑義幸
〒981-1524　宮城県角田市岡字駅前北8-9
【長泉寺】http://www1.odn.ne.jp/chosenji/
【ミネ幼稚園】http://www5.ocn.ne.jp/~mine/

自宅での取り組みのほか、長泉寺へのISO14001認証取得の手伝いがきっかけとなり、寺と幼稚園での環境活動が開始されました。市役所・JA・病院・養護施設・スーパー等徐々に拡大され７年目を迎えています。削減効果に加えて今は僧侶や幼稚園の教師など積極的な提案があり、現在は環境奉仕活動に取り組んでいます。

優秀賞

大学生が文具で広げるグリーン購入

滋賀県 滋賀県立大学
グリーンコンシューマーサークル
〒522-8533　滋賀県彦根市八坂町2500
http://guricon.web.fc2.com/

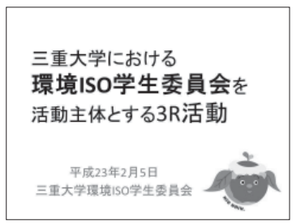
滋賀県立大学グリーンコンシューマーサークル（以下グリコン）は、グリーン購入（商品やサービスを購入する際に環境配慮されているものを優先的に選ぶこと）の普及・促進を目的としています。活動内容は大学生協店舗でのエコ文具の販売促進や京都・滋賀・奈良の大学生協店舗へ情報発信等を行っています。

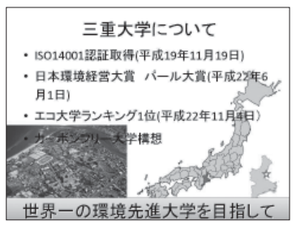
優秀賞

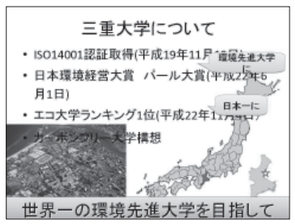
三重大学における環境ISO学生委員会を活動主体とする3R活動

三重県 三重大学 環境ISO学生委員会
〒514-8507　三重県津市栗真町屋町1577
059-231-9224
http://www.iso.mie-u.ac.jp/student/

私たちは学内で、Reduceとしてレジ袋の削減活動、Reuseとして学内の放置自転車や卒業生から提供された家電製品を新入生・留学生に譲渡、またRecycleとして古紙を回収し、トイレットペーパーに還元するシステムを構築するなどの3R活動を行っています。また、町屋海岸清掃や、近隣にある北立誠小学校で環境学習も行っています。

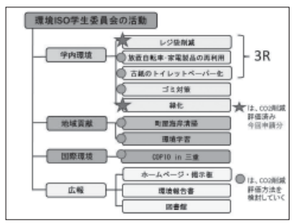
1


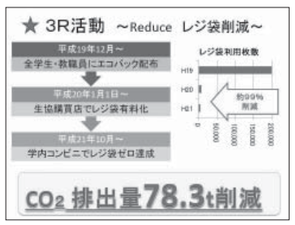
2


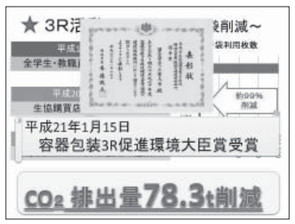
3


4

5

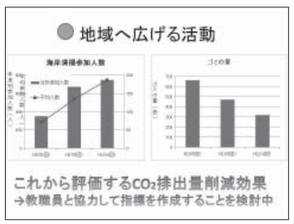
6


7


8


9

10

11


12

13

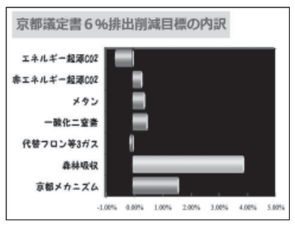
優秀賞

元気な森づくり
～京都発・森に囲まれた高校生たちのチャレンジ～

京都府 京都府立北桑田高等学校 森林リサーチ科
〒601-0534　京都府京都市右京区北下弓削町沢ノ奥15
0771-54-0022
http://www.kyoto-be.ne.jp/kitakuwada-hs/

- 松枯れ、ナラ枯れによる放置材の有効活用およびマツノザイセンチュウ耐性苗の植林。
- 北山杉磨き丸太等の新しい使い方を提案し地元産木材の需要拡大PR活動。
- 放置林の間伐作業および運び出した木材でログハウスの製作。

1

2


3

4

5

6

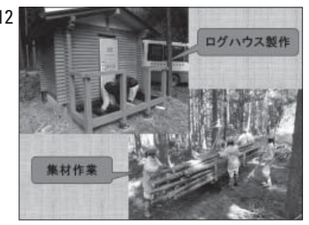
7

8

9

10

11

12


13

14

優秀賞

人に、地球にやさしい 脱・温暖化地域づくり

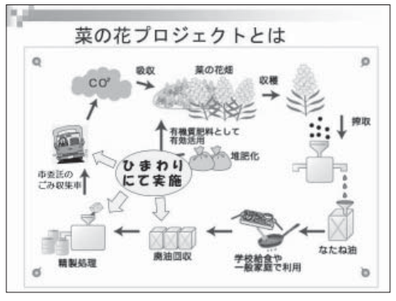
福島県 **株式会社ひまわり**

〒962-0001　福島県須賀川市森宿字道久19-13
☎0248-75-5133
http://www.himawari-fukushima.co.jp/

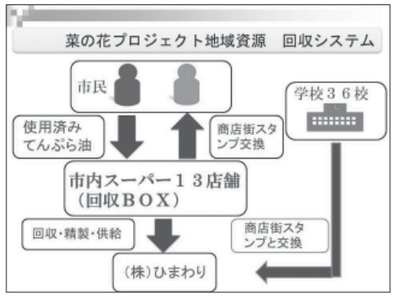
①平成16年、廃食用油の精製プラント設置、現在の生産量 7万リットル/年、自社所有車28台、県・市の公用車10台がBDFを使用。②須賀川市の「菜の花プロジェクト」事業への参画。③平成18年、太陽光発電システム（50kW）の導入、電力使用量の約6割を賄う。④雨水利用システムも導入し、高圧洗浄・洗車に利用。

1

2

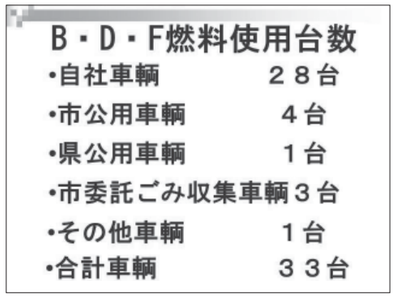


3



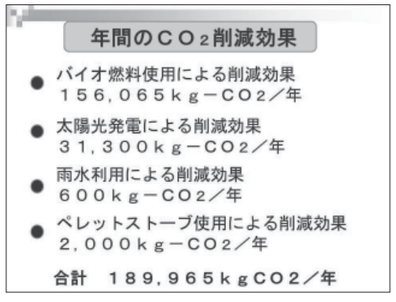
4

5



6

7



優秀賞

地産地消で110年 こだわりの駅弁めしあがれ

島根県 **合資会社一文字家**

〒690-0038　島根県松江市平成町182-19 クレアヒル松江
☎0852-22-3755
http://www.ichimonjiya.jp/

地域に生きる企業として、きれいごとより「できること」を発掘し、連携しています。①食品残渣を堆肥化し、生産された野菜を買い上げる循環システムの構築。②地元産おかずや県産間伐材容器で地産地消の弁当提供。③生産工場の廃棄物（電球や容器や廃食油）リサイクル、地域への恩返しに環境教育や地域産品PRも展開中。

1

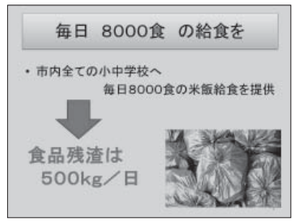
2

3

4

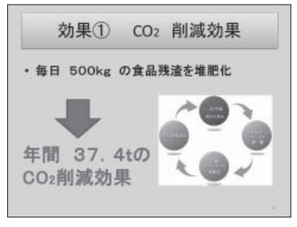
5

6



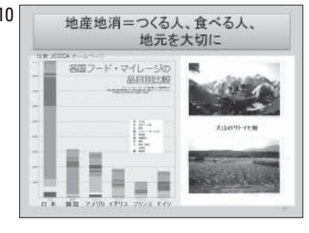
7

8



9

10



11

12

13

優秀賞

2009年度省エネ家電普及促進事業

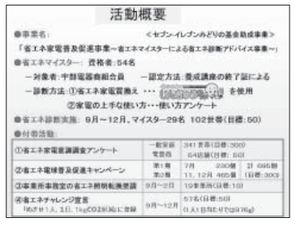
山口県 宇部市地球温暖化対策ネットワーク

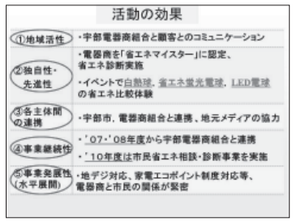
〒755-0032 山口県宇部市寿町2-11-28
050-1298-4065
http://ubeondanka.net/

宇部市および宇部電器商組合が連携して「うべ省エネマイスター」を養成し、一般家庭を対象に家電診断や省エネのアドバイスを行い、省エネ家電の普及促進を図りました。同時に、市民と宇部電器商組合への省エネアンケートと省エネ電球普及促進キャンペーン等を実施し、省エネ意識の啓発活動を行いました。

1

2

3


4


5

6

7

8

9

優秀賞

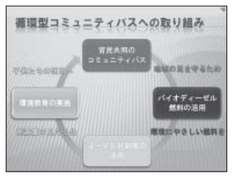
当別ふれあいバスとバイオディーゼル燃料による環境プロジェクト

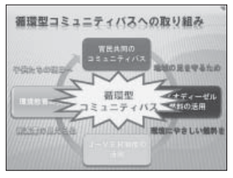
北海道 当別町

〒061-0292 北海道石狩郡当別町白樺町58-9
0133-23-3042
http://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/

路線バスと民間の送迎バスを統合した官民共同コミュニティバス「当別ふれあいバス」は、廃食用油由来のバイオディーゼル燃料を使用し、経費の節減とCO2削減を図っています。また、町内小中学校に対する交通と環境の授業実施や、削減したCO2をJ-VER化し、全日本空輸(株)と取り引きするなど、積極的に取り組んでいます。

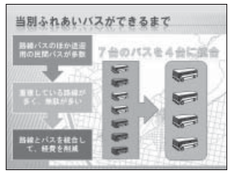
1

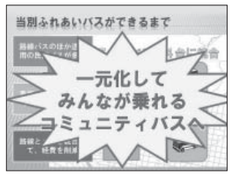
2


3


4

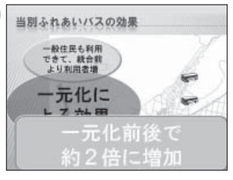
5

6


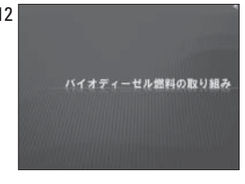
7


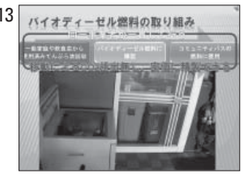
8

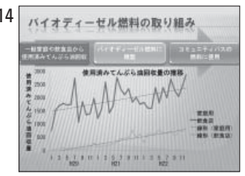
9

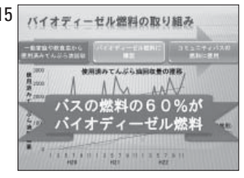
10


11

12


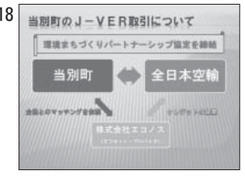
13


14


15


16

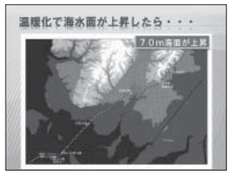
17

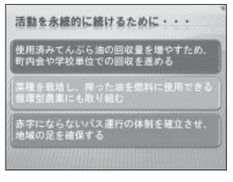
18


19

20

21

22


23


優秀賞

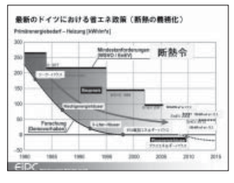
外断熱建物の新築、改修によるCO2削減

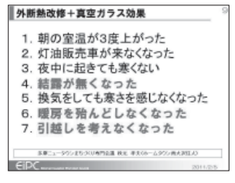
東京都 特定非営利活動法人 外断熱推進会議

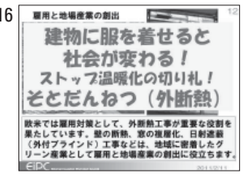
〒105-0011　東京都港区芝公園3-5-8
機械振興会館407号 メカトロ団体内
03-3436-4755
http://www.sotodan-npo.org/

RC建物の断熱仕様は圧倒的に内断熱が多くなっています。①部屋ごとの温度差を解消する。②建物の寿命を延長し資産価値を向上させる。③CO2削減に寄与する、「外断熱工法」を普及・促進することが活動のメインです。

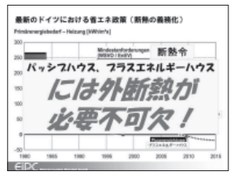
1

6


11


16


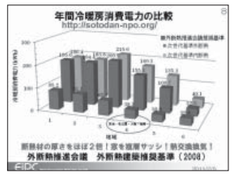
2

7


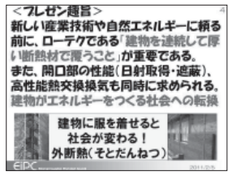
12

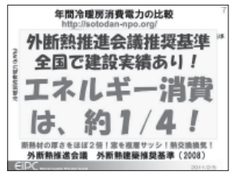
17

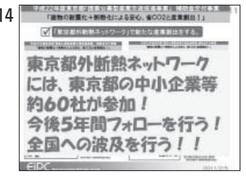
3

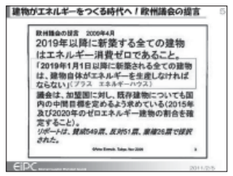
8


13

4


9


14


5


10

15

優秀賞

宇奈月が熱い！ 電気で元気!! でんき宇奈月プロジェクト発進

富山県 黒部・宇奈月温泉観光活性化協議会 でんき宇奈月プロジェクト実行委員会

〒938-0282　富山県黒部市宇奈月温泉633-1
0765-62-1106
http://www.denki-unazuki.net/

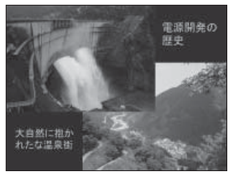
豊かな自然環境と共生し、先進的な温泉エコリゾートとしての発展を目指し、電気自動車の導入や温泉街の生活用水を活用した小水力発電による街なかの街灯、電気自動車の動力源への供給など、自然エネルギーによる公共交通システム形成等に向け、活動を展開しています。

1

6

11

16

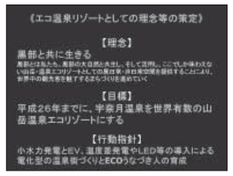
2


7

12

17

3

8


13

18

4

9

14

5

10

15

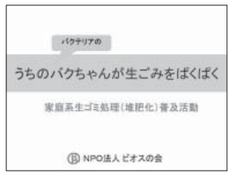
優秀賞

うちのバクちゃんが生ごみをパクパク
ー家庭系生ごみ処理普及活動

千葉県 **特定非営利活動法人 ビオスの会**

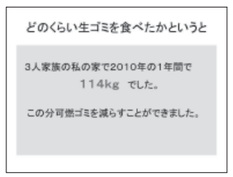
【団体所在地】〒263-0051　千葉県千葉市稲毛区園生町712-1（竹内様方）
【連絡先】〒261-0011　千葉県千葉市美浜区真砂3-12-9-404（津本純子）
☎043-279-0487

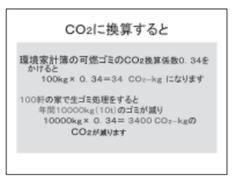
①家庭で生ごみを処理する方法の普及活動。②よりよい生ごみ処理方法（容器）の調査研究と開発。③農場を借りて堆肥多用無農薬野菜の栽培と会員への頒布。④小学校等における環境教育。

1


2

3

4


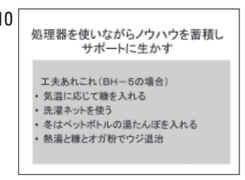
5


6

7

8

9

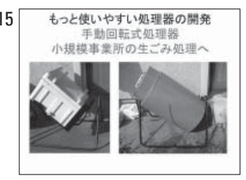
10


11

12

13

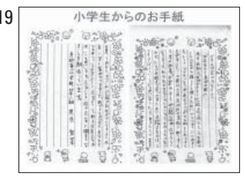
14

15


16

17

18

19


20

優秀賞

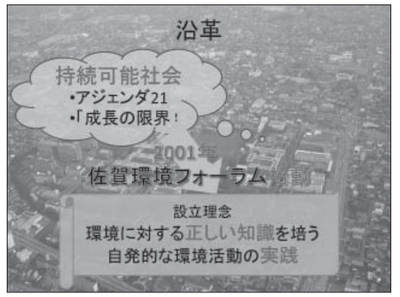
正しい環境認識を有し、環境配慮意識の高い人材の育成

佐賀県 **佐賀環境フォーラム**

〒840-8501　佐賀県佐賀市栄町1-1
☎0952-40-7202
http://www.city.saga.lg.jp/contents.jsp?id=18424

「佐賀環境フォーラム」は、環境に関する正しい認識を培い、理解を深めて行動に結び付けてほしいとの思いから、佐賀大学と佐賀市が連携して開催しています。『講義』、『現地視察』、『ワークショップ』で構成され、市民と大学生が同じ教室で学ぶという全国的にもあまり例のない形式で実施しています。

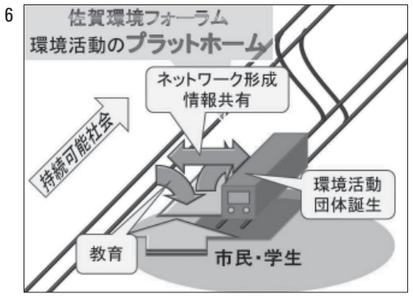
1

2


3

4

5

6


7

優秀賞

地域のRECO環境循環システム
（生ごみの堆肥化リサイクル）

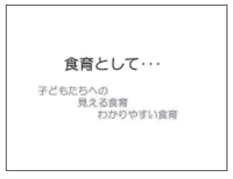
石川県 小松電子株式会社
〒923-8642　石川県小松市安宅町甲135
0761-21-2000
http://www.komatsu-ec.co.jp/reco/index.html

生ごみを「生ごみ処理機RECO」で一次処理、「堆肥センター」で二次処理すると、良質堆肥とバイオ母体ができます。良質堆肥は畑で野菜づくりに、バイオ母体はRECOに再び戻され使用される、全く廃棄物の出ない循環システムが完成しました。現在、RECO-30Gを導入した地域の保育園、小中学校、老人ホーム、企業と一緒に環境循環に取り組んでいます。

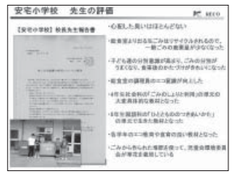
1

2

3

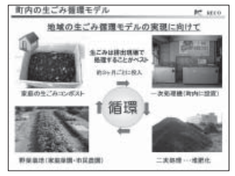
4


5

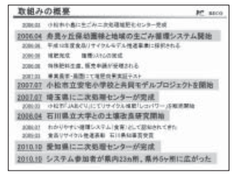
6


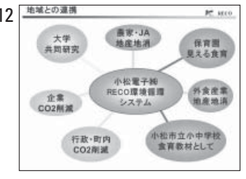
7

8

9


10

11


12


13

14

15

16

優秀賞

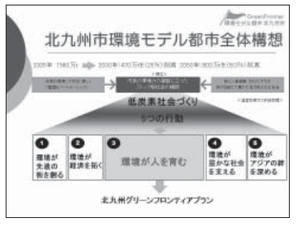
楽しく学べる環境教育ワークブック
『みどりのノート』

福岡県 北九州市 環境局環境政策部 環境学習課
〒803-8501　福岡県北九州市小倉北区城内1-1
093-582-2784
http://www.city.kitakyushu.jp/
→「みどりのノート」でサイト内検索

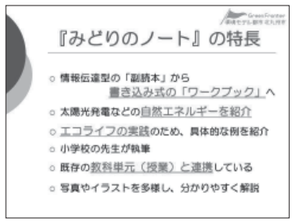
公害を克服し、環境国際協力や循環型社会への取り組みを経て、環境モデル都市に認定された北九州市オリジナルの環境教育ワークブック『みどりのノート』を作成。持続可能な低炭素社会をテーマに、小学校の教科学習カリキュラムに即して、低・中・高学年用の3段階に内容を分け、市内全小学校全児童に配布・活用しています。

1

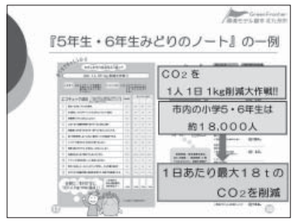
2

3


4

5


6

7


8

9

優秀賞

ー天ぷら油で車を走らせようー 地球温暖化防衛軍

岩手県 いわてバイオディーゼル燃料ネットワーク

〒020-0133　岩手県盛岡市青山4-9-1
社会福祉法人自立更生会 盛岡アビリティーセンター内
019-647-6996
http://iwate-eco.jp/

食用廃油を回収、再生してBDFを精製、軽油の代替燃料として使用しています。現在、県内の事業所をネットワーク化して、情報の共有化、BDFの安定供給・品質確保、副産物の利用に取り組んでいます。

1

2

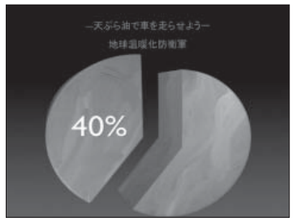
3

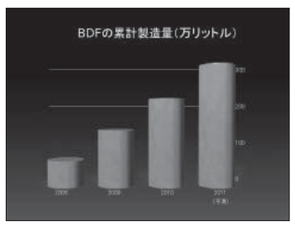
4

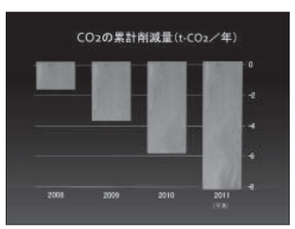
5

6

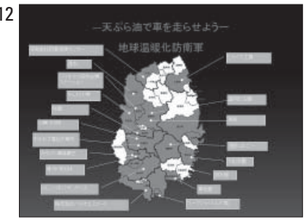
7

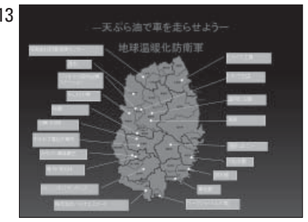
8


9


10


11

12


13


14

15

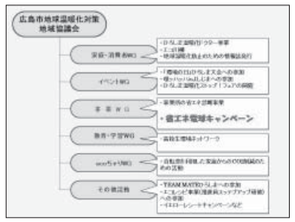
優秀賞

省エネ電球キャンペーン

広島県 広島市地球温暖化対策地域協議会

〒730-8586　広島県広島市中区国泰寺町1-6-34
082-504-2185
http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/0000000000000/1111453796281/index.html

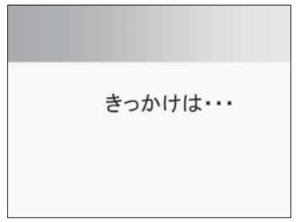
家庭における地球温暖化防止のための取り組みを推進するため、家庭での白熱電球から省エネ性能の優れた電球形蛍光ランプおよび電球型LEDランプへの取り換えを促進するキャンペーンを事業者と一体となって実施しています。

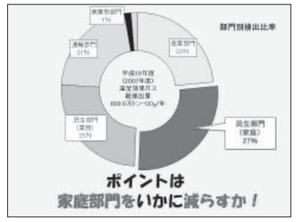
1


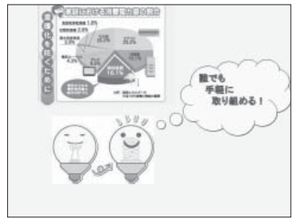
2

3

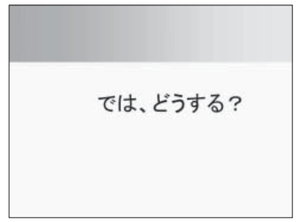
4

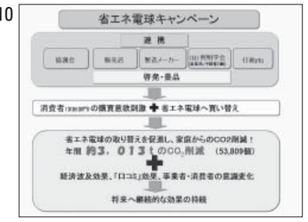
5


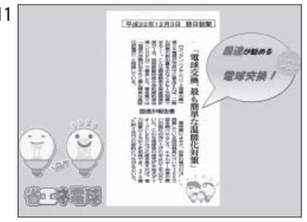
6


7


8

9


10


11


12

優秀賞

地域連携による「食育」が導いた地球温暖化防止活動

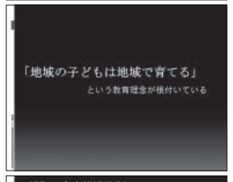
鳥取県 三朝町調理センター
〒682-0152　鳥取県東伯郡三朝町本泉430
0858-43-3510
http://www.torikyo.ed.jp/misasa-j/

「地域の子どもは地域で育てる」という教育理念に基づき、学校・家庭・地域が一体となった活動が、三朝町の「食育の推進」です。地球温暖化防止という目標を掲げる取り組みではないものの、地産地消を推進し、残食も削減され、なによりも子ども達のライフスタイルの変化に繋がった大切な地球温暖化防止活動です。

1

2

3

4


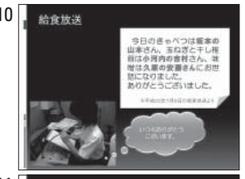
5

6

7

8

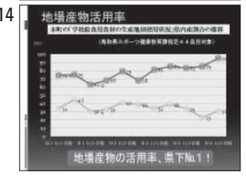
9

10


11

12

13

14


15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

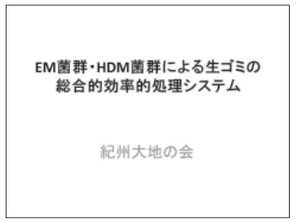
26

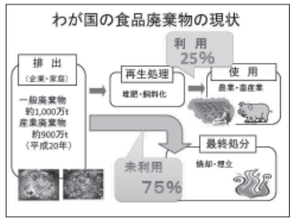
優秀賞

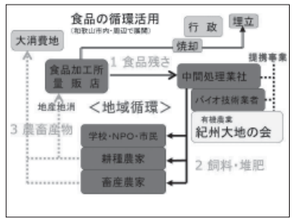
EM菌群・HDM菌群による生ゴミの総合的効率的処理システム！

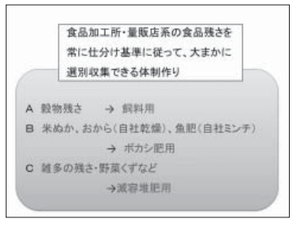
和歌山県 紀州大地の会
〒640-8225　和歌山県和歌山市久保丁3-20
073-423-5333
http://www.ecopure.info/special/2008/001/reportage03/index.html

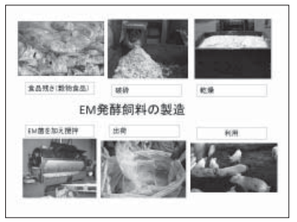
微生物による生ゴミ処理技術を活用した大規模処理ラインを開発し、①米ぬか・おから・魚の調理屑で高品質・廉価なボカシ肥を製造する一方、②食品残渣・野菜屑などを1日で90%以上減容し、残りを腐食型堆肥として活用。食品加工所・食品スーパー・中間処理業者・有機農業グループが連携して、地域の食品リサイクル・ループを構築しました。

1


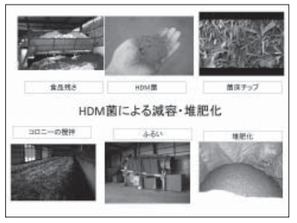
2


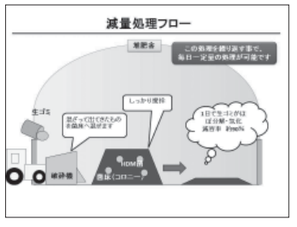
3


4


5


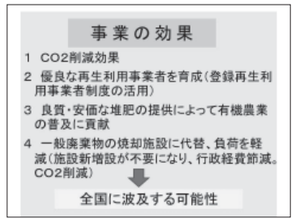
6

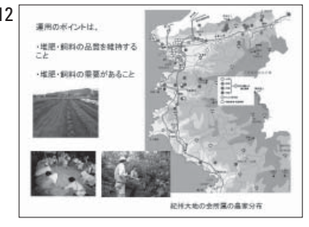
7


8


9

10

11


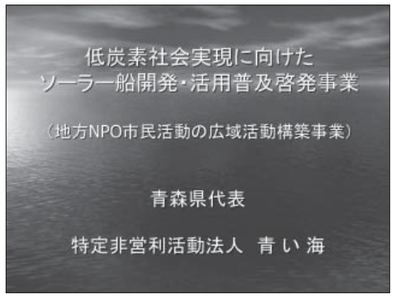
12


優秀賞

低炭素社会実現に向けた ソーラー船開発・活用普及啓発事業

青森県 特定非営利活動法人 青い海
〒031-0072　青森県八戸市城下3-15-33
☎0178-47-1705

低炭素社会実現に向けた取り組みとして、太陽光を100%動力源としたCO2を排出しない環境にやさしいソーラー小型船を、当NPOが主体となり八戸工業大学や八戸市内の民間企業等と連携し、全国に先駆けて開発・実用化した船を活用し、普及啓発活動を実施しています。

1


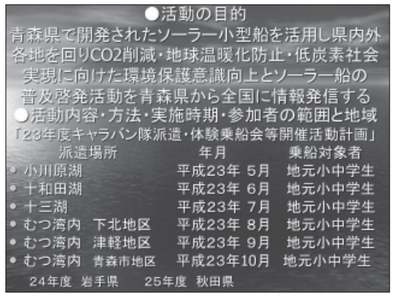
2

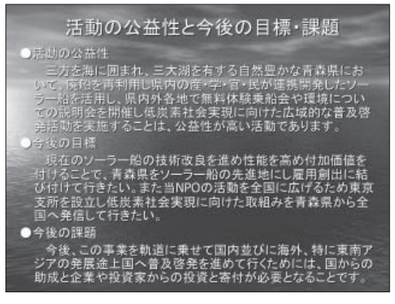
3

4

5

6

7


8


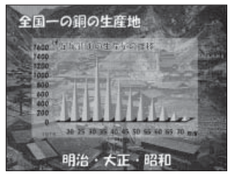
優秀賞

ヨシの恵みで、とりもどせ農村の ヨシズ産業・よみがえれ足尾の森

栃木県 栃木県立栃木農業高等学校 地域おこしプロジェクト班
〒328-0054　栃木県栃木市平井町911
☎0282-22-0326
http://www.tochigi-edu.ed.jp/tochiginogyo/nc/

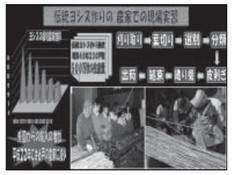
環境公害で荒れた足尾銅山を、渡良瀬遊水地のヨシの恵みで緑豊かな山に復活させる環境交流活動に取り組んでいます。農業高校生の視点から故郷の自然を見つめ、ヨシの湿原保全とともに、伝統ヨシズ作りなど地域資源を再生する活動に努めています。さらに、くずヨシの堆肥化に挑戦し地域農業や足尾銅山緑化にも活用しています。

1

2


3

4

5


6

7

8

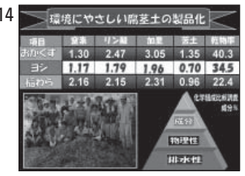
9

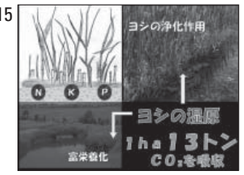
10

11

12

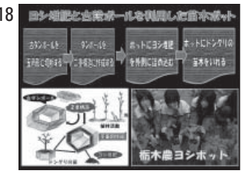
13

14


15


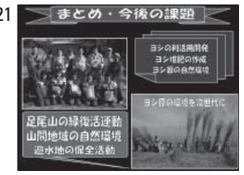
16

17

18


19

20

21


22

23

優秀賞

丸の内朝大学
～出勤前のジブン磨き～

東京都 **丸の内朝大学企画委員会**

☎03-6266-9400

http://www.ecozzeria.jp/asadaigaku/

丸の内朝大学は、大手町・丸の内・有楽町地区の既存施設をキャンパスとした地区内就業者・来街者らに向けた市民大学です。出勤前の貴重な時間に環境・食・健康等、多岐にわたる学びの時間を提案し、環境配慮型行動（省エネルギー型ライフスタイル）の定常化を目指します。

1

2

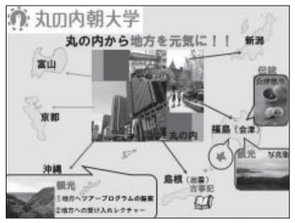
3

4

5

6

7



8

9

10

優秀賞

小グループ活動による省燃料活動

福岡県 **菱化ロジテック株式会社**
九州支店 二島物流センター

〒808-0109 福岡県北九州市若松区南二島4-10-1

☎093-701-3781

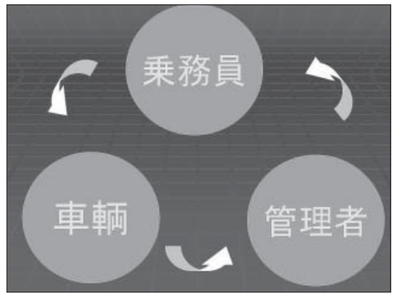
http://www.mclc.co.jp/safety/environment/ground.html

菱化ロジテック株式会社 九州支店 二島物流センターでは、80名の乗務員により、化学製品を中心とした製品を、中部・関西地方および九州圏内へトラック輸送を行っています。業務部門別に80名の乗務員を10班に分け、グループごとに、視点を変えた特色のあるアイデアで事故防止活動はもちろん、エコドライブ活動や省燃費運転を行っています。

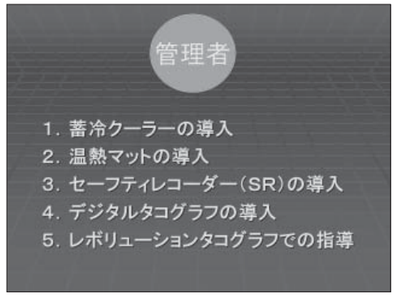
1

2

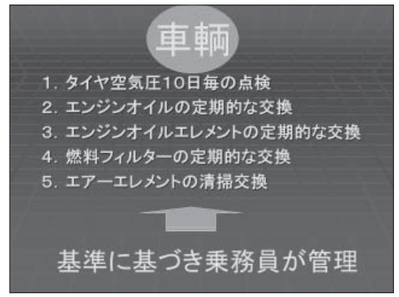
3



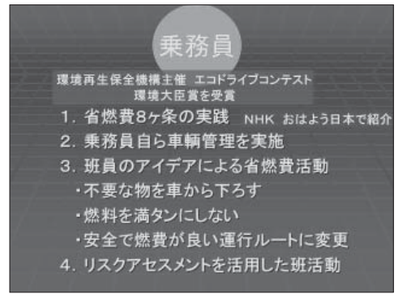
4



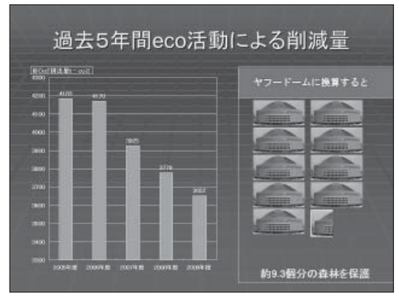
5



6



7



8

優秀賞

古新聞でガソリン割引
〜古紙回収を通じての環境保護活動〜

山形県 **港屋商事株式会社**

〒999-3511　山形県西村山郡河北町谷地字月山堂644
0237-73-4321
http://yamagata-ecozukan.eny.jp/

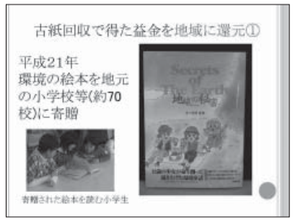
古紙回収を通じての環境保護活動として、ガソリンスタンドに顧客が古新聞・古雑誌などの古紙をまとめて持ち込むとガソリンを値引きする取り組みを平成20年から実施。古紙の買取で得た益金を活用し、平成21年には小学校へ環境に関する絵本を寄贈しました。さらに、平成22年には河北町に電動スクーターを2台寄贈しました。

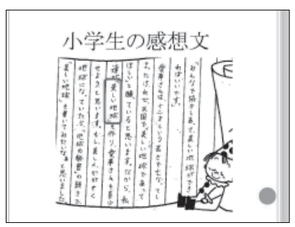
1

2

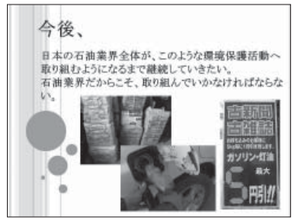
3

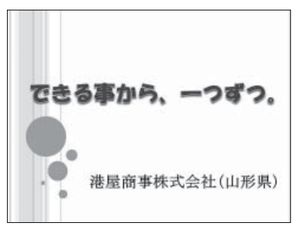
4

5


6


7

8


9


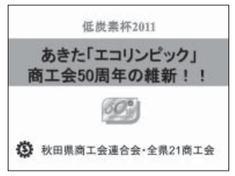
優秀賞

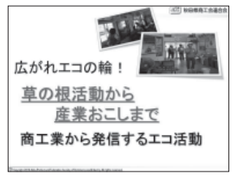
あきた「エコリンピック」商工会50年目の維新!!

秋田県 **秋田県商工会連合会**

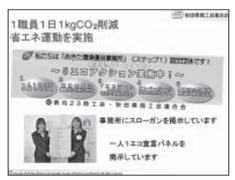
〒010-0923　秋田県秋田市旭北錦町1-47　秋田県商工会館4階
018-863-8492
http://www.skr-akita.or.jp/

商工会は、昨年度、全県21商工会と県連合会が取得した「あきた環境優良事業所認定」の実績をもとに、地球温暖化防止をはじめ地域の環境保全に配慮した身近なエコ活動を実践しながら、県内1万5千会員、さらにはその従業員・家族、そして地域へとエコの輪を広げます。

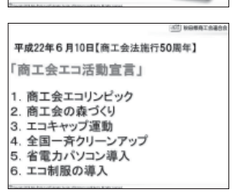
1


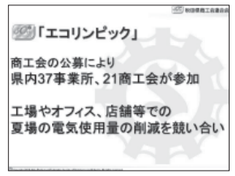
2


3

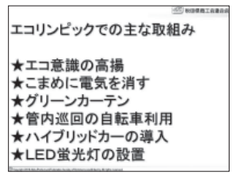
4


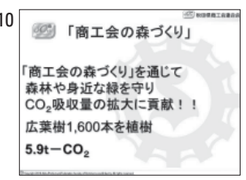
5

6


7


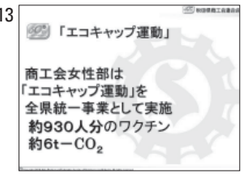
8

9


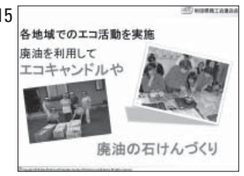
10


11

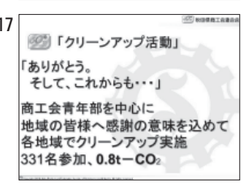
12

13


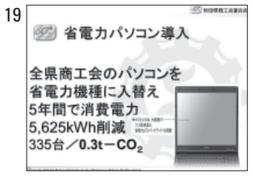
14

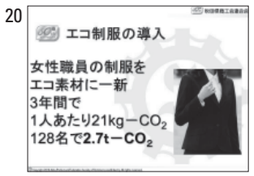
15


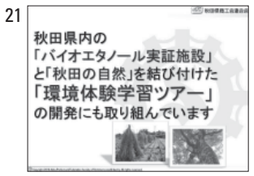
16

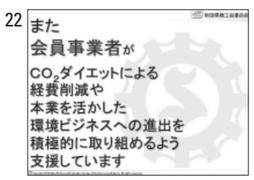
17


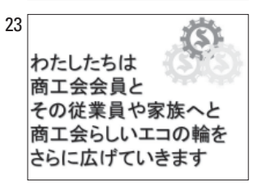
18

19


20


21


22


23


24

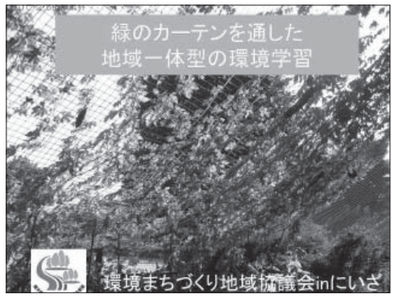
優秀賞

緑のカーテンを通した地域一体型の環境学習

埼玉県 環境まちづくり地域協議会 in にいざ
〒352-0011　埼玉県新座市野火止5-29-12
☎048-479-6225

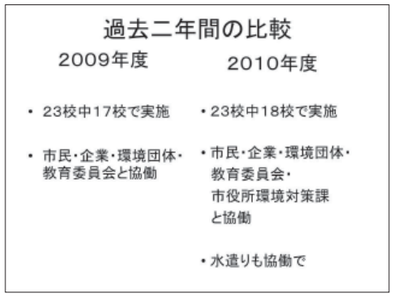
環境まちづくり地域協議会 in にいざでは、新座市内の小中学校において、市民・教育委員会・学校・行政等と協働し、「緑のカーテン」を広げる事業を展開しています。様々な主体が協働で事業を推進することを重視しながら、ゴーヤを通じ子どもたちにCO_2削減の活動を伝えています。

1



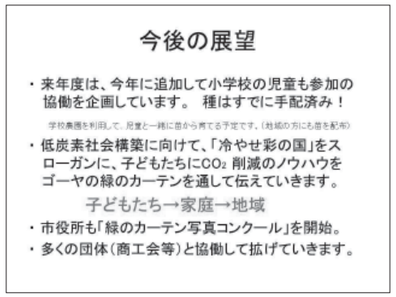
2

3

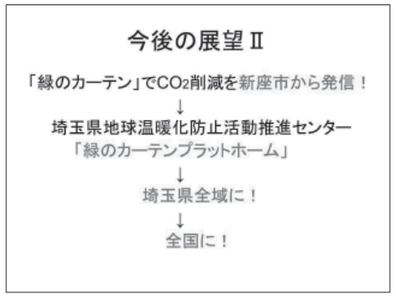


4

5



6



7

8

魅力いっぱい！低炭素杯

司会 櫻田 彩子

感動の涙あり笑いありハプニングありの二日間、学生の皆さんの知力と行動力に驚き、おじいちゃんおばあちゃんに有り余る元気をもらい、二酸化炭素削減のための緻密な活動に感激し、多くのドラマと共に今回の低炭素杯が終わりました。火山の噴火や大雪の被害などがあった地域から来てくださる皆さんはご無事だろうか、各交通機関は大丈夫だろうか、そんなスタッフ側の心配など必要なかったかのように、当日は全国各地からの出場者の皆さんの笑顔に出会えてとても嬉しかったです。

私たちスタッフが一番心がけていることは、会場を訪れる皆さんと地域で活動を続けている皆さんが主役である、ということです。当日、代表してプレゼンテーションを行う皆さんが、限られた時間の中でいかに緊張せずに思いを伝えられるか。私たちがその一助となれれば……と心がけています。自分たちの親戚や友人を迎えるようにお迎えしたいと思っています。

私はご縁があって、低炭素杯の前身である三年間の「一村一品大作戦全国大会」と、出身地である宮城の県大会三年間の司会も担当させていただきました。

私の地域の皆さんへの敬愛の気持ちの原点は2007年の最初の宮城県大会にあります。「エコdeスマイルコンテスト」という宮城県大会のタイトルには「私たちに笑顔をくれるあなたを応援したい」という気持ちが込められていました。コツコツと続ける省エネ、一人ひとりに伝える努力、活動を立ち上げる勇気、現状を変えたいという使命感……そこから始まったであろう皆さんの行動に拍手を送りたい。そして、こんなに面白くて目からウロコの考え方があるよ、地域の活性化につながっているよ、こんなに素敵な人たちがいるよ！と声を大にして日本中に知らせたい、そんな気持ちにさせられました。そして皆さんの気持ちに寄り添いたい、この気持ちは年々強くなるばかりです。何やら熱烈ラブコールみたいですが（笑）。全国の皆さんの一つひとつの行動を知ったら誰もがそう思うのではないでしょうか。

今やその行動は点から線になり輪になり、相乗効果を生む立体的な活動となっていることを強く感じます。そんな皆さんの応援団として大会に携わることができ、とても誇りに思っています。

毎日を丁寧に暮らすことや人と人がつながることの積み重ねが地域を変え、日本中に伝える説得力を持ち、さらに世界へ発信できる力となることを教えてくれるこの大会は魅力いっぱい！です。

6 分科会の開催

メインテーマ　：『地域づくりと『コミュニケーション』
第一会場テーマ：「伝える力、広げる力【コミュニケーション】」

第一会場

日時／ 2011年2月6日（日） 10:00 ～ 12:00
会場／東京大学 山上会館
ファシリテーター　庄嶋 孝広 氏［市民社会パートナーズ代表］
コメンテーター　　坂西 元 氏［構想博物館主任研究員］
参加人数：約55名

報告者：北海道地球温暖化防止活動推進センター　松本 真司

10:00 ～　開会、趣旨説明（庄嶋氏）

本日は、低炭素杯発表者、一般の参加者と一緒にワークショップ形式で議論を進めていきたい。まず、本日のテーマである「伝える力、広げる力」の捉え方を説明したい。ひとつは「仲間を得る」、もうひとつは「参加者を増やす」ということと考えてほしい。今日の参加者の多くは、低炭素社会づくりに向けて活動をつくる人の立場の方が多いと思うが、活動をつくる人には「バカ」、「カバ」、「チンドン屋」の3つの役割があり（わかりやすくしているため言葉遣いが悪い）、各役割の人が力を合わせて進めていくとうまくいく。「バカ」とは、これをやるべきというものを示し突き進む人、「カバ」とは、文書づくり、会計、事務的な部分をカバーする人、「チンドン屋」とは、外部へPR、協力者を引き込む人を指す。活動をつくる人から始まった活動に、恒常的に、または臨時的に活動に関わる人などの仲間を得て、活動の目的とする参加者を引き込み、伝わり、広がっていくということになる。

10:15 ～　情報提供「地域に伝える、広げるためのヒント」（坂西氏）

個人や組織が成長していくためには、そのひとつにコミュニケーション力を使いアプローチしていく方法があるが、どういうことか次の5つに分けて説明する。

1）業界の定義はなくなった（異業種との可能性）

東レ（繊維メーカー）がダイムラー（自動車会社）と合併した事例。車の部品を鉄よりも軽い炭素繊維素材で置き換えることにより、燃費も向上し、その結果、車もよりエコになる。エコをやるためにまっく違う業種同士がつながることで課題解決ができ、組織が成長する可能性を秘める時代になっている。

2）コネクタ・ワールド（世界はつながっている）

これからは「人」と「人」がつながっていく。ツイッターやFaceBookなどの利用で個々人がつながっていくコミュニケーションの時代。

3）なぜ今コミュニケーションなのか（ロボット検索から人間集団知能の時代）

コミュニケーションがこれから大事になる理由は、次が考えられる。①組織の能力を最大限発揮するためのアプローチ方法となっている。②個人の検索で集団が教えてくれる（ex.Facebookなど）。③集団知は将来価値が評価されている。Facebook利用者は、全世界で6億人ともいわれ、一つの国家ともいえる状況である。上場後の時価総額も4.2兆円ともいわれ、日本の大手製造企業を超える額で、コミュニケーション産業が大きくなっている証でもある。

4）「エコ」から「E-CO」へ（3つのE-COとはなにか）

私がつくった造語だがE-communicationとはなにか。①E（電子）…Facebook、②East（アジア）、③Energy（情熱）を指している。板橋区の緑のカーテン事業を例にとるが、この活動の報告書はアジア（英語版）でも発行されている。事務局の2人は、情熱をもって講演活動などを繰り返し、どんどん海外の人ともつながり、活動が広がっていった。

5）新しい組織のカタチ（湯河原モデルの紹介）

湯河原の事例を紹介したい。訪問介護をしているある会社が、地域の空き店舗を利用してコンシェルジュホームをつくった。この地域ではコンシェルジュホームが不足しており、地域の地主さんからは不景気で空き店舗の活用方法を相談されていたことがきっかけとなった。その後、この取り組みを聞きつけた自治体などの支援もあり、取り組みがさらに広がった。この他、不景気で閉鎖されていた温泉旅館と介護事業を結びつけるサービスを始めるなど、地域で課題となっていた事に耳を傾け、事業を展開している。さらには、余剰生産となったキャベツの問題を抱える農家とペットフード高騰で困っているペット食品屋をつなぐ事業に取り組む等、多くの事例を生み出している。このように介護を生業としている会社が、まったく関係のない他業種とつながり、広がっている。

この事例の最大のポイントは、自分たちの事業だけを伝える、広げることに熱心になったのではなく、地域にある課題に耳を傾け、行動を起こしたことにある。社会問題を解決しようとすることは、地域づくりや組織を広げていくことになる。

10:45 ～　ワーク1「伝えた！ 広げた！ ノウハウ紹介」（庄嶋氏）

ここまでの話を参考にもしながら、グループワークを行っていくことにする。（グループ分けのため、互いにコミュニケーションを取り、北海道から沖縄までの位置を考えながら会場内で人間日本地図をつくった。北の人から順番に番号を付け、7つのグループをつくった。）

ここからの時間は「仲間を得る、参加者を増やす」ためのノウハウ事例をグループで共有する。まずA4用紙に名前、所属を書き、1事例に絞って「どんなケースで」「どんなターゲットに」「どんなふうに」「成果は」を書き出してもらう。（8分）

6 分科会の開催

メインテーマ　：『地域づくりと『コミュニケーション』
第一会場テーマ：「伝える力、広げる力【コミュニケーション】」

10:55 ～　グループ共有の時間

書き出した事例をグループ内で共有する。（ひとり2分）

11:10 ～　ワーク2「上手に伝える、広げるポイントは？」

仲間を得た、参加者が増えた成功事例には、必ずポイントがあるはずなのでそれをグループ内で共有してもらう。そして、グループで話し合ったポイントをA3用紙に書き出してまとめてもらいたい。また全体で共有したいノウハウ事例（成功談、失敗談どちらでも可）もひとつ選んで発表してもらうので、その準備もしてもらう。

11:38 ～　ワーク3「全体発表」～事例とポイント～

グループごとにまとめられた「伝える、広げる」ポイントと事例を紹介してもらう。

	ポイント	ノウハウ事例
グループ①	・環境だけで人を集めるのは大変なので、ターゲットを明確にして楽しくやること。	・若い女性を引き込むために、美容や食べ物の話題を通して環境のことを伝えた。
グループ②	・若い人が頑張ること。若い人は、参加してくれるが、活動の中心にはなっていない。次の世代に頑張ってもらうために楽しさや達成感を共有することが必要。	・若い人やこれから就職活動をする人には、地域のボランティア活動の実績も必要ではないかと思う。そうしたことで参加する人もいるので、若者向けの企画もどんどんつくっていきたい。
グループ③	・目標の明確さが大切。 ・わかりやすく、口コミと情熱を持ってやること。	・子供に対してやっていくのは大切で、例えば、地域のお寺をひとつの場に園児を対象に活動している。子どもから大人に広がり、地域の活動に広がっていく。
グループ④	・すべての人がwin-winになるような仕組みが必要。 ・ひとりでも、ひとつの企業でも地道に伝えていくこと。	・わかりやすいPR、やわらかく、楽しい、得するなどの活動が大切。エコを全面にしても広がらず、気づいたらエコになっているという感覚が必要。
グループ⑤	・広報活動。 ・内容を充実させること。	・環境フォーラムを10年来開催しているが、地道に広報してきた。事後はアンケートを取り、次回の内容を充実させようと努力している。
グループ⑥	・目的意識が大切。 ・活動のきっかけづくりが大事（この分科会もそのひとつとなる）。 ・行政の理解、支持が大事（市民が安心、信頼性が増す）。	・大学で放置自転車の問題を解決するために活動している中で、新入生へも活動を広げるのが課題。そのために関わりやすいイベントを通じて、自転車の大切さを知ってもらった。
グループ⑦	・伝えるための組織をつくる（個人では無理がある）。 ・ターゲットを明確にし、分析した上でわかりやすいものを発信する。 ・知識豊富な人を集め、ネットワーク化する。 ・影響力のある人への働きかけ。	・幼稚園で「遊び」を通じた活動を展開している。子供たちに伝えることで大人への波及を期待している。

11:57 ～　全体総括（坂西氏）

- 可能性をどう広げていくかという意見が多かった。つまり、定義を見直す必要があるということ。環境と美容の接点を使う、堅苦しいイメージを持たせるのではなく、やわらかく伝えていくなどの意見があげられた。
- 目標設定が大切だというのも共通した意見だった。ひとつ事例だが、ある自治体がコンテストに出るために準備することになった。目標に対して住民、企業、役場の間で結束力が生まれ準備に没頭し、達成感も共有できたと聞いている。こうした目標の設定は、活動を継続していくためのモチベーションにもなる。
- 皆さんのお話をお聞きして思いついたことだが、自身の団体で「できることリスト」、地域にある「困ったことリスト」をつくるとよい。「できることリスト」は皆さんの活動の強みの確認ができるし、「困ったことリスト」を使って地域社会の課題を整理することで、皆さんの組織で解決できることが見つかるかもしれない、是非取り組んでみてほしい。

最後に、分科会に参加いただいた方は、個々の意識がとても高いと感じた。私も地域に戻り、皆さんの活動を伝え、広げていきたいと思う。

12:05　終了

6 分科会の開催

メインテーマ　：『地域づくりと『コミュニケーション』
第一会場テーマ：「伝える力、広げる力【コミュニケーション】」

■議事スライド①–庄嶋 孝広氏

1

最初は、席は自由です。

後で、あらためてグループ分けをします。

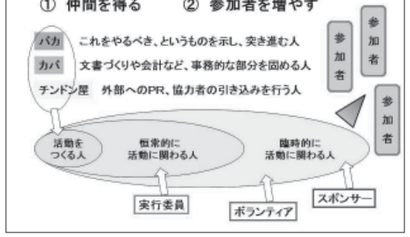
※　お荷物は、隣の部屋に置くことができます。

2

分科会を始めるにあたって

「伝える、広げる」とは？

① 仲間を得る　② 参加者を増やす



3

ワーク1　伝えた！　広げた！　ノウハウ紹介

「仲間を得る、参加者を増やすためのノウハウ事例」を紹介し合う

① 各自で、マーカーを使って、A4用紙に「ノウハウ事例」を書きます。

② グループごとに、1人2分で紹介します。

名前
所属
どんなケースで
どんなターゲットに
どんなふうに
成果は

4

ワーク2　上手に伝える、広げるポイントは？

「仲間を得る、参加者を増やすためのポイント」を話し合う

① グループで話し合った「ポイント」を、書記がマーカーでA3用紙に書きとります。
（最初は、「下書き」的にドンドン意見を書きとり、最後にまとめて「清書」してください。）

グループ番号
（メンバー全員の名前）
・○○○○○　・○○○○
・○○○○　・○○○○○
・○○○○○　・○○○○

② 紹介された「事例」のうち、全体で紹介したいものを1つ選びます（上記の「ポイント」の裏付けになるようなもの）。

■議事スライド②–坂西 元氏

1

低炭素杯2011　分科会

～「伝える力、広げる力【コミュニケーション力】～

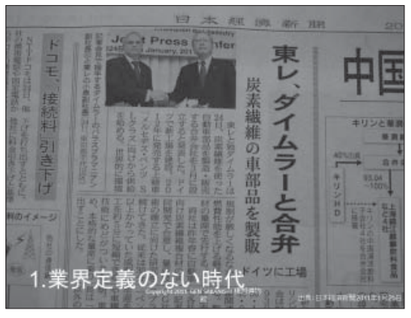
2011年2月6日
練馬博物館
坂西　元

2

目次

1.業界定義のない時代
2.コネクタ・ワールド
3.なぜ今コミュニケーション力なのか
4.「エコ」から「E-CO」へ
5.湯河原モデル

3



4

第2章　コネクタ・ワールド

5

第3章　なぜ今コミュニケーション力なのか

1.組織の能力を最大限発揮するためのアプローチ方法のひとつになっている

2.個人の検索 → 集団知（コミュニケーション）

3.集団知は将来価値が評価されている

6

7

世界は個人検索→集団知

米国のサイト訪問者数シェアのランキング

	2008年	2009年	2010年
1	グーグル	グーグル	フェイスブック
2	ヤフーメール	ヤフーメール	グーグル
3	マイスペース	フェイスブック	ヤフーメール
4	ヤフー	ヤフー	ヤフー
5	ホットメール	マイスペース	ユーチューブ

（注）米エクスペリアンヒットワイズまとめ

出典：日本経済新聞2011年2月1日

8

3.集団知は将来価値が評価されている

6億人国家の誕生

a)推定時価総額：4兆円

（ゴールドマンサックス予測2011）

b)参加人数：6億人

（産経新聞2011.2.3）

9

4.「エコ」から「E-CO」へ

E-communication

a) E（電子）

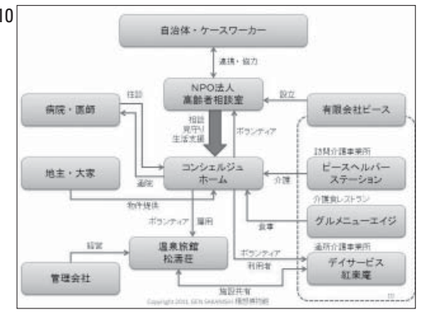
b) East（アジア）

c) Energy（情熱）

・講演会
・ハンドブック

緑のカーテン応援団

10



6 分科会の開催

メインテーマ ：『地域づくりと『コミュニケーション』
第二会場テーマ：「地域おこしと企業【地域活性化】」

第二会場

日時／ 2011年2月6日（日）10:00 ～ 12:00
会場／東京大学 安田講堂
コメンテーター　　関 正雄 氏［株式会社損害保険ジャパン理事 CSR統括部長］
ファシリテーター　川北 秀人［低炭素杯実行委員（IIHOE代表者）］
参加人数：58名（全国フォーラム出場者／一般参加者）

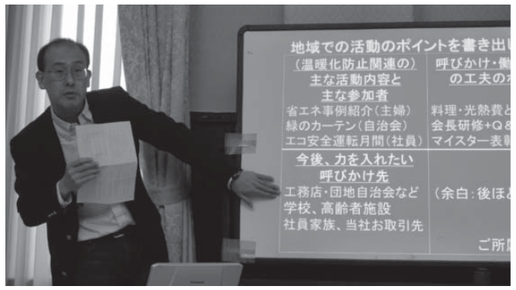
報告者：静岡県地球温暖化防止活動推進センター　佐藤 摩子

分科会の構成

・ファシリテーターによる導入説明（分科会の目的）
・活動ポイントの共有（グループごとに意見を出し合い、話し合いまとめる）
・グループの発表
・コメンテーターによるコメント
・まとめ

ファシリテーターによる導入説明 〜今回の分科会の目的〜

地域に素晴らしい取り組みがあるのに、現状では活用されていない。この分科会では、お互いに技を見せたり・見たりしながら、それぞれの地域・現場での取り組みを話し合い、交流し、連携してほしい。



活動のポイントを共有するグループワーク

【全国フォーラム出場者／一般参加者が、9つのグループに分かれて約60分間】
各自が下記3点の活動のポイントを書き出し、グループで話し合った。
・地球温暖化防止関連の主な活動内容と参加者
・呼びかけ、働きかけの工夫やポイント
・今後力を入れたい呼びかけ先

グループの発表【全国フォーラム出場者／一般参加者：9グループ】

	課題・目標等	対策等
グループ①	・人々の活動をうまくコーディネートしてくれるものがない（例えば菜の花プロジェクト。当初BDFの混入率が20％だったものが5%に減少。現在6000キロリットルの廃食油が余っている状態。せっかく活動が広がりみんなにエコの意識が広がったのに、とても残念な状態）。	・地域の抱えている課題をよく知っている人間が解決に取り組んでいき、もっとみんなの意識を盛り上げていくような支援の仕方、仕組みを構築していく。
グループ②	・人を育て、お金も育てたい。	・行政やメディアに活動を取り上げてもらい、信用を得る。
グループ③	・熊本県のESDキッズクラブのような活動を全国展開する。まずは秋田県、石川県、東京都、新潟県、埼玉県から。	1. プログラムの見える化。 2. スポンサーの開拓（スポンサーの立場に立って考える。プログラムに参加することで何が起こり，どのようなメリットが生まれるのか、スポンサーがイメージしやすいようにする）。 3. 打診する（例：サンリオ、ミキハウス）。 4. 保育園などへアプローチする。
グループ④	・ボーダレス地球温暖化。	・いろいろな方面から地球を助ける住民を育てる（ガソリン割引、癒しの追求、生ごみ堆肥化、菜の花プロジェクト、ノー残業DAYの推進、My箸、自然エネルギーによる地球への還元 etc.など、生活、労働、消費、癒しなど、いろいろな活動方面から人を育て、地球を助ける住民になる）。
グループ⑤	・意識付けを広げていく。	・地道な継続・活動に対するご褒美（例えばグッズのプレゼントなど。税金を投入するなどのやり方については、本当にそれでいいのか検討する必要あり）。 ・競争意識を活用(例えばエコドライブなど)ボトムアップでの推進（なぜその活動が必要なのか、理解してもらうこと。例えば会社で推進グループや勉強会などを立ち上げ、社員にボトムアップ形式で広げていくなど）。 ・技術の導入（だまっていても二酸化炭素が減っていくような技術）。
グループ⑥	・参加者集めや参加者に趣旨を理解してもらうことが時として難しい。また、初期投資費用の負担や開始時期のタイミングなどにも課題あり。	・見える化し、共有化していく（魚町一丁目太陽光パネルを活用した商店街のにぎわいづくりを例に）。
グループ⑦	・活動予算が足りない。PR不足。	・地域連携が大切。エコに関心がない人をどうひきつけるか考え、企業と連携していく。
グループ⑧	・BDFの廃油の回収。市場で有償取引しているところが多く、それは良いことではあるが、地域の活動は企業には勝てない。	・子供たちを通して回収していく。 ・行政も関わり、学校でBDFについての授業を行ったり、学校単位で家庭も巻き込み廃油を回収する。町内会も参加（福島県では、夏休みに子供を対象にBDFツアーを行い、家庭も巻き込んで取り組みをしている）。

6 分科会の開催

メインテーマ ：『地域づくりと『コミュニケーション』
第二会場テーマ：「地域おこしと企業【地域活性化】」

関氏からのコメント

これからは、社会全体、すべての組織が共に問題を解決していく時代。藤森克彦さんの本『単身急増社会の衝撃』によると、日本では今後4人に1人がひとり暮らしになる計算になっている。

その結果、貧困、介護などの社会保障、また孤立化などさまざまな問題が起こってくるであろう。OECDアンケートの中で日本人が一番「家族以外に相談できる相手がいない」と答えた人数が多かった。その頼みの家族の支え合いが急速に失われつつある。

グローバルな地球温暖化問題も、こうした日本社会固有の課題も、いずれも社会全体で考え、解決していくべき問題である。そこで、近時「ISO26000社会的責任（SR）規格」検討されてきて、2010年11月に発行された。これまでのCSRに対してSRは、CSRのC（＝企業）を取った状態、つまり、企業だけでなく、社会全体のすべての組織が社会的責任を果たし、社会全体で解決していくという考え方である。

では、社会の構成員が活動に多く参加していくためにはどのような仕組みをつくっていったらいいのか、いくつか例示する。

～企業・団体の活動例～

例1）ユニリーバの例について

ユニリーバは、1000品目に関してLCAを考慮し二酸化炭素削減を行っているが、調査の結果、68%の環境負荷は、家庭での使用段階で発生していることが判明。

⇒つまり、いかに消費者を巻き込んで二酸化炭素を削減していくかが大切。消費者の権利を守るだけでなく、消費者側も社会を変えていく役割があるので、消費行動を通して二酸化炭素削減（持続可能な消費）に関与していくことが必要。

例2）経団連の企業の社会貢献活動実績調査について

NPOやNGOと協働の実績があるかについて企業に調査した結果、2002年26%、2005年32%、2008年44%、と協働実績が年々上がっている。企業もNPO、NGOとの協働は大きな関心事。さまざまな形のパートナーシップが生まれている。

例3）滋賀銀行の取り組みについて

環境金融の役割は重要だし注目されている。しかし環境金融の商品があっても実際に世の中に活用されていないケースが多い。

⇒滋賀銀行の成功例のように、取り組みの力を発揮するためには、地域でいろいろな人々とうまく力をかみ合わせていく必要がある。

例4）損保ジャパンの取り組みについて

・カーボンオフセットガソリン（鈴与（株）との協働。静岡支店の社有車のガソリンから排出されるCO_2を、排出権を用いてオフセットするもの）
・校庭芝生化（清水エスパルス、行政、NPOと共に取り組んでいる。日本平スタジアムの芝生を幼稚園や保育園に移植して芝生化する）
・エコ安全ドライブ（講習会開催。平均8%の二酸化炭素削減効果ももちろんあるが、安全運転になり事故も半減する）
・リサイクルパーツの活用（保険金支払い時に、ご契約者に事故車の修理でリサイクル部品活用をお勧めし、協力依頼している）

まとめ

～センターへのお願い～

・地球温暖化対策推進法には、センターの役割のひとつとして「情報提供」が明記されている。各地域の取り組みの記録、集計、分析、発信の担当をおいて、情報提供していくことが大切。（可視化が大切。）
・特に重要な対象者を絞り込んで支援することを考える。例えば、農業、林業、自治会、学校、高齢者など。今後、中小企業や農家を支援する機会も増えていくため、対象者を絞り、そこに必要な情報を提供し、支援していける仕組みを構築することが必要。
・対象者ができそうなことを考え、提案することも大切。取り組む人たちの目線に立って考える。
・それぞれの気候や風土に適した活動を考え行う。（東京のビルは、目標を決めて二酸化炭素削減に取り組んでいるが、ビルの中にいろいろな業種のテナントが入っており、必要な電力なども異なるので、業種ごとの省エネ指導ができるようにビルのオーナーの研修をすることが必要。）

ファシリテーター ～二酸化炭素削減、2020年に90年比25%削減、2050年に90年比60 ～ 80%削減を実現するために～

・環境でもどんな分野でも、協働は大切。
・気候も風土も違う地域だからこそ、そこに住む人々や社会のニーズに即した専門性が必要。
・万能な団体、企業、自治体がすべてを担うのではなく、それぞれが個々に動くのでもなく、お互いの専門性を生かして責任を持って連携することが不可欠。

6 分科会の開催

メインテーマ ：『地域づくりと『コミュニケーション』
第二会場テーマ：「地域おこしと企業【地域活性化】」

■**議事スライド** –川北 秀人

1

「地域おこしと企業」分科会にようこそ！
会場が狭くて、申し訳ありません！
お席に着かれたら、
(1)名札に「ご所属」「お名前」ご記入の上、
左胸など、目立つところに貼ってください。
(2)お荷物は、大きなテーブルの下などに
入れ、場内の移動しやすさの確保に
ご協力ください。
(3)開始時刻(10時)まで、
名刺交換・自己紹介などで、お待ちください

2

地域おこしと企業(10:00−12:00)
ゲスト:損害保険ジャパン 関 正雄さん
- 現在の取り組み・工夫を紙にまとめる(5分)
- 班で共有する(各自の発表は3分程度)
- 「今後力を入れたい呼びかけ先」と
  「一緒に取り組みたい内容」を、
  各班でまとめる(発表する係も！)
- 各班から2分以内でご発表(11:10から)
- 損保ジャパン・関さんからコメント
- 企業からのご参加者のコメント

3

地域での活動のポイントを書き出しましょう

(温暖化防止関連の)主な活動内容と主な参加者	呼びかけ・働きかけ上の工夫のポイント
省エネ事例紹介(主婦) 緑のカーテン(自治会) エコ安全運転月間(社員)	料理・光熱費と結びつけ 会長研修+Q&A集作成 マイスター表彰&教習
今後、力を入れたい呼びかけ先 工務店・団地自治会など 学校、高齢者施設 社員家族、当社お取引先	(余白:後ほどのメモに) ご所属・おなまえ

4

各班のご発表から

・ここに集まる人は目的・手段共有 →コーディネート機能の不在 ・地域課題を知る者が実践！ ・BDF混入率下げると廃食油余る！ ・リーダー！→人もお金も育てたい →行政、メディア ・子ども教育:ESDプログラム全国 →口伝から見える化、資金基盤 →物語の創作→打診:子ども系企業 →保育園へ ・ボーダーレス！:ガソリン割引、生ごみ、菜の花、ノーマイカー、マイ箸 →生活・働く・癒される住民→温暖化に取り組む住民 ・意識:地道に言い続ける&ご褒美 ・競争:企業の比較 ・必要性・意義の理解:企業内自主勉強会→トップダウン<ボトムアップ	・技術の導入←行政 ・再生可能エネルギー、市民学習など →初期投資費用の負担・タイミング、意義の共有→可視化・発信・共有！ ・地域連携:予算・広報→企業と！ ・無関心層をどうひきつける？ ・BDF:回収大変(有償取引も！) →子どもに働きかけ→学校回収！ (体験ツアーを子ども会にも) ・

5

関さんから
- 企業との協働は、まだこれから→今後もっと！
- 高齢化＆単身急増→家族以外に相談できない！
- ISO26000(社会責任国際ガイダンス)昨年11月発効
  - 企業だけじゃなく、すべての組織の社会責任が問われる！
  - ユニリーバ:1000品目のLCA→環境負荷は使用段階が6割
- 企業も市民も互いに相手を巻き込む(エンゲージメント)
  - 消費者:権利を守るだけでなく、参画する責任:持続可能な消費
  - 2/22 文科省＆全セクター共催の「消費者教育」シンポジウム
- 日本経団連(社会貢献委)調査「協働実績」44%
- 金融機関「責任原則」:今後どんな貸し方・開発する？
- 静岡:カーボンオフセットガソリン(鈴与)＆校庭芝生化＆エコ安全運転講習会(事故減！)
- 業界全体として、リサイクルパーツ活用の呼びかけも

6

(民主主義の当事者としての)市民による社会運営

⑥ 社会制度化(民・官ともに担い手)
⑤ 代替案の試行or救済策の実施
(やってみたら、こうなりました)
④ 代替案or救済策の提示
(こうしたらいいんじゃないか？)
③ 原因と背景の把握
(なぜだろう、このままだとどうなるんだろう？)
② 課題の指摘
(「こんなことが起きてますよ！」)
→告発・糾弾(けしからん！)
① 課題の発見
(こんなことが起きてる！こんな状態！)

7 記念シンポジウムの開催

テーマ

エコで快適な住まいで 低炭素社会を実現しよう！

日時／2011年2月6日(日) 13:00 ～ 14:15
会場／東京大学 安田講堂

コーディネーター 赤池 学 氏
株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所所長

1958年東京都生まれ。1980年筑波大学第二学群生物学類卒業。社会システムデザインを行うシンクタンクを経営し、ユニバーサルデザイン、エコデザインに基づく製品・施設開発を手掛ける。「生命地域主義」「千年持続学」を積極的に提唱し、地域ならではの産業技術、人材、地域資源による「ものづくり」プロジェクトの運営にも数多く参画する。

パネリスト 小宮山 宏 氏
三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問

栃木県生まれ。1967年東京大学工学部化学工学科卒業。1972年同大学大学院工学系研究科博士課程修了。1988年東京大学工学部教授、2000年工学部長、大学院工学系研究科長、2003年副学長などを経て、2005年4月第28代総長に就任。2009年3月に総長退任後、同年4月に三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問に就任。

パネリスト 大竹 俊夫 氏
トステム株式会社取締役社長

東京都生まれ。東洋サッシ(トーヨーサッシを経て現 トステム)へ入社し、トステム取締役 営業統轄本部リビング建材統轄部長、同社執行役員、トステム住宅研究所取締役社長、トステム取締役副社長執行役員などを経て、2010年トステム取締役社長 社長執行役員に就任。住生活グループ金属製建材事業セグメントCOOに就任。

パネリスト 菊川 怜 さん
女優

埼玉県生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。1998年デビュー以降、2004年NHK大河ドラマ「新撰組！」レギュラー出演、2009、2010年日本テレビ「全国高等学校クイズ選手権」メインパーソナリティを務めるなど、ドラマ、映画、バラエティ、司会など幅広く活躍。

赤池　それでは早速、シンポジウムを始めたいと思います。3人のパネリストの方を簡単にご紹介させていただきます。

小宮山先生については今さらご紹介するまでもないですが、まさに日本の環境対応、あるいは持続可能な社会づくりのための科学技術政策を牽引してこられました。また、そういう考え方を社会のために見える化していく、社会化していくために、現在も三菱総研の理事長としてさまざまなご活動をされておられます。また、後ほどお話をしていただきますが、ご自宅をエコハウス化しておられます。そんなお話も詳しくお伺いしたいと思っています。

トステムの大竹社長。トステムさんは、INAXさん、サンウエーブさんを含めた環境対応を重視した家づくりのためのネットワークを牽引しておられます。2年前には、環境対応の商品住宅がグランプリを受賞されました。これからの家づくりにおいて、企業はどのような役割が展開できるのか、そんなお話も含めて後ほど伺いたいと思います。

菊川さんは、ご自身で海外のさまざまな環境関連の視察に行かれたり、東京大学で建築も学ばれたということで、是非シンポジウムの中でも、小宮山先生のエコハウスやトステムさんの環境住宅について、厳しいご批評をいただければと思います。

それではまず、シンポジウムの口火は小宮山先生に切っていただきたいと思います。低炭素社会づくりはどのような意義があるのか、そのポイントは何なのか、そしてご自宅のエコハウスについてもご紹介いただければと思います。先生よろしくお願いします。

◆◆◆

小宮山　ご紹介いただきました小宮山です。皆さん、「日本は乾いた雑巾であって、CO_2削減をするということは大きな負担になるんだ」という議論をよく聞いたことがあるんではないでしょうか？

これは誤りです。なぜかと言うと、どういうところでCO_2を発生しているか、これはどれだけエネルギーを使っているかということにほとんど等しいわけです。日本が最終的に使っているエネルギー、それでどれだけCO_2を発生しているかというのを計算してみるとこうなります。

鉄をつくったり、プラスチックをつくったり、食料をつくったり、衣服をつくったりという「ものづくり」、これが43%です。残りは私たちの家庭、それからオフィス、ここ（東京大学）はオフィスに入っております。それから輸送です。この3つで全体の57%のCO_2を出しています。

ものづくりというのは確かに、かなり理論的限界に近いところまでCO_2を絞ってきています。しかも日本というのはもともと石油がありませんから、他の国に比べてもエネルギー費用が高いんです。ですから、産業がエネルギーを節約するための、いわば技術開発を一生懸命してきたわけです。従って他の国と比べて、日本が非常にCO_2を減らしにくい状況であるというのは、ものづくりに関してはこれは確かです。

正しい言い方をすれば、「日本の“ものづくり”は乾いた雑巾」であって、これはかなり正しい表現です。だけど、日々の暮らしはどうでしょうか？ということになるわけです。ここで、小宮山エコハウスの話が登場するわけです。

私は10年くらい前に、いろいろ考えて家をつくりました。実際につくったのは8年か9年前で、家を建て替えるチャンスがあったのです。そのときに、省エネとエネルギー消費というのは私の専門ですので、よく考えてエネルギーを減らしました。そうしたら81%減りました。ですから今は、前の家の5分の1弱しかエネルギーを使っていません。それで快適です。前の家が悪かったというのもあるのですが、前よりも快適です。そんなにお金もかかっておりません。この家は逆に12年経つと、すべて余計にかかった分が取り返せます。しかも快適。こういうやり方があるのだということを言いたいのが、私のオープニングです。

赤池　小宮山先生、どうもありがとうございました。今、環境研究者がデザインされたエコハウスのお話で口火を切っていただいたのですが、逆にビジネスのプロがつくるエコハウスというのはどうかなということを、大竹社長からお聞きしたいと思います。

家庭でのCO_2の削減、これが一番重要だというお話を小宮山先生から聞かせていただいたわけですが、その器である家の果たす役割は非常に大きいと思います。具体的な事例、あるいはこれからのエコハウスの考え方を含めて、大竹さんのほうからお話いただければと思います。

◆◆◆

大竹　トステムの大竹でございます。今、小宮山先生から全体の構造を少しお話いただきましたが、低炭素社会に向けてということになりますと、一番大きな部分というのは、家庭で消費するエネルギーが、現状で大幅に増加しているということです。

これはエネルギー使用量を比較したグラフですが、1990年と2008年を比べています。家庭で消費するエネルギー量というのは、約34%増えているというのが現状です。産業界については、今一生懸命やっているのですが、電気など家庭の使用量が増えているというのが実態です。

このグラフは家庭から排出されるCO_2の内訳です。冷暖房と水回り関係で約3分の1。照明、家電などで約3分の1。自家用車等々で3分の1と、3割ずつみんなまとまっている状態になっています。それで家庭からのCO_2というのを、どうやって削減すればいいかということになるわけですが、私どもは家という環境を担って事業をさせていただいています。そういう意味で、家を変えることによって、大部分がある面では解決できるという自信を持っています。

住生活グループのトステム住宅研究所で、ひとつのコンセプトホームをつくり上げました。これは2008年、2010年、2011年、そしてまた今年2012年と続けて、進化論的な部分の中でやっているわけですけれども、このコンセプトホームの3つのテーマは、「窓で少エネ」、「3つの創エネ」、「スマイルエコな省エネ」ということです。それについて3つの観点からご説明したいと思います。

まず、「窓で少エネ」。先ほど小宮山先生から家を建て替えて消費エネルギーが80%減ったという話がありました。「少エネ」というのは、そういう意味で、小さいエネルギーで生活をやっていくということです。

基本的に家というのは、窓から一生懸命暖めた空気を逃がしている。あるいは一生懸命冷やした空気を逃がしている。こういう観点です。

家というのは窓がなければ一番暖かい。涼しい。小さいエネルギーで暖かさ、涼しさを確保できる。しかし、なかなかそうはいかないということです。基本的には窓の断熱性を高めようというのが私どもの動きです。従って、いかに壁と同じ断熱性を持つか、というのが窓のテーマになります。

そしてもうひとつ、風を取り込んで室内のクールダウンをしようということも考えて前に進めています。窓の断熱とクールダウンという相反する効用を追及した、簡単に言えば「計画配置」ということについて、もう少しご説明させていただきたいと思います。

窓の断熱性能は、急速に進化しております。例えば私どもが昨年10月に一部地域で先行発売した「次世代スタンダードウィンドウ」、商品名で言いますと「サーモス」。これは高断熱の複層ガラスを採用したこともあって、このサーモグラフの通り、

断熱性能の高い部分が従来の窓よりも広がり、簡単に言うと熱の伝わりにくさを表す性能値が33%向上しました。このように窓が壁の断熱性能に近づくことで、1990年当時の家に比べて、40%以上のCO_2の排出量を削減できたというのが実態です。

さらに日本の住宅には一般的な「引違い窓」というのがあります。それを突き出す「縦すべり出し窓」に替えれば、通風量が約10倍になります。夏場に夜間の比較的涼しい風を取り込んで、年間の冷却エネルギー約49%が削減できるという実験データも持っています。

加えて年間のCO_2排出量になりますと、約210kg、杉の木に換算しますと約14本分くらいのCO_2が減ってくるということになります。自然の風をそのまま利用することによって、大幅なCO_2を削減できるということです。

次は「3つの創エネ」です。家庭からのCO_2量の削減には、太陽光発電による創エネが広く普及しています。このコンセプトホームでは、太陽の光だけではなく、熱も利用した太陽熱利用エコキュート、あるいはさらにバイオマスを利用した、昔から使われているペレット暖炉などにより、さらに効果的な創エネに取り組んでいます。またLEDを使って、あるいはそれを越える有機ELなどの照明、発光する蓄光磁器等々も含めて必要な電力量を徹底的に減らしたうえで、使う電力は自分たちでつくる、使う以上につくるという全体の図式をつくっています。

これまでに説明した活動は、仕組みを導入することで可能となる省エネ行動です。当社では昨年から「スマイルエコ」というテーマを掲げて活動を進めています。省エネ活動は継続することが大事という発想から、楽しく、無理せず続けていきたいという提案です。頑張った成果が手に取るようにわかれば、また明日も頑張れるということと、我々の次の代につなぐ、子供たちにも省エネという物事の考え方をつなげていくという意味で、「見えるエコ」を進めています。

そしてそうした活動の前提となるのが、最近「スマートハウス」と呼ばれている、情報技術を利用した家の可能性を追求するということになります。また、そのカギを握るのが、電気自動車の登場ということになると私自身は考えています。そういう意味で、この電気自動車をいかに利用するかという部分も、このコンセプトハウスの中に入っています。

電気自動車は、今後は単に自動車の駆動システムがモーターに替わるということではなくて、家の蓄電池としての役割を果たすこともあるのではないかという捉え方です。昼間につくった電気を車の蓄電池でいったん蓄えて、夜間、家で必要な電力をまかなう。こうして電気エネルギーの“入り”と“出”を最も効率的にマネジメントするということになります。

よく世間でゼロエミッションのハウスという言葉を見聞きすることがあります。先ほど小宮山ハウスのお話がありましたが、もう建ててから時間が経っていますので、こちらのほうがもっといいという状態を、今つくっているということになります。

再生可能エネルギーでつくるエネルギーによって家庭のCO_2排出量を削減して、年間での正味いわゆるネットでCO_2の排出量がゼロになる、あるいはもっと稼げるという住宅をつくったということになります。

実はこれまでご紹介してきたコンセプトホームでは、ゼロエミッションを実現しているということになると思います。こうした家による統合的な組み立ては、家庭から排出されるCO_2問題を大幅に解決できると思っています。

以上、簡単ではございますけれど、低炭素社会に向けた家の可能性について話させていただきました。

赤池　大竹社長、ありがとうございました。風を取り込むパッシブ・エコロジーの重要性、あるいはスマイルエコというキーワードに象徴される環境対応の見える化が重要である、そして3点目に家と自動車、住宅単体だけでは考えない低炭素社会、コミュニティづくり、そういうお話をいただいたのですが、その途中でトステム住宅研究所のエコハウスのほうが最先端だというお話をされたわけですが、小宮山先生、エコハウスをつくられたのは、全然小宮山先生のほうが早いですよね。

小宮山　これはプロのハウスメーカーが、今私よりいい家をつくるのは当たり前です。それと、モノもよくなってきています。逆に言うと、今皆さんがおやりになるのは、私のときよりずっと楽だということです。

窓の断熱なんか、もう私の家と今一番いいものとを比べると、断熱性が倍以上違うんじゃないかな。ですからトステムさんは私に勝ったということを誇らないで、もっともっとその先を目指していただきたいと思います（笑）。

◆◆◆

赤池　会場の皆さんの中には、小宮山ハウスの実態がまだわからない方もいらっしゃると思いますので、小宮山先生から具体的に冷暖房とか給湯とか、エコ家電とか、どんな技術を入れていらっしゃるのか教えていただけませんでしょうか。

小宮山　先ほど大竹さんが、家で使うエネルギーの量は3分の1ずつ、とおっしゃっていました。エネルギー消費の大きいのを順番に減らしたということです。具体的に言うと、お湯づくりと冷暖房、残りの照明とか、冷蔵庫、テレビのエネルギー消費量を順番に減らしたということです。

給湯は、今日本にはエコキュート、エネファームという世界でも非常に優れた2つの給湯器がある。これを入れました。そして冷暖房にかかるエネルギーを減らすために、二重ガラスを入れました。今のトステムのものほどよくはないけれども、8年前には性能がまあまあよかった二重ガラスを入れて、あと屋根をだいぶ気にしました。屋根から熱が入ってくるというのは大きいです。それからひさしを長くしました。

そういう意味で言うと、当たり前のことを当たり前にやってきた。冷暖房を減らして、照明はむしろ最近替えたんです。蛍光灯型の電球というのがありますが、あれを最近LEDに替えました。そうしたら22ワットだったのが、6ワットに減りました。ということは4分の1から3分の1ぐらいに減っている。

それから冷蔵庫は、13年間使っていた冷蔵庫を3年前に買い替えました。その冷蔵庫はエコナビというのを使うと、どれくらい電気を使っているか計れます。やっぱり電気の消費量が大きいから、新しいのを買うと相当減るはずなので、買い替えました。結果は、電気の使用量が3分の1になりました。お金に換算すると、冷蔵庫を買い替えたことで1年に2万円の電気代が減ったわけです。私の冷蔵庫は14万円しました。ですから7年で元が取り返せるということです。

冷蔵庫の分が3分の1、お湯をつくること、それからその下の高断熱とエアコンというのが冷暖房のことで、それから照明を取り替えて冷蔵庫を買い替えた。これが家です。あと家で私が個人で使うのは自家用車が大きいということで、これを買い替えるときにハイブリッドカーにしました。やっぱり3分の1に減っています。

こうしたことで、私の家ではエネルギーを使う量が58%減りました。それで太陽電池で23%を供給している。足すと81% CO_2が減りましたということです。

お金に換算すると、それまで電気・ガスで1年にだいたい30万円ぐらいかかっていました。日本の一軒家だと標準的な電気とガス代ですけれども、それが去年は3万5千円になりました。だから26万5千円減ったわけです。そうすると一重ガラスと二重ガラスの差とか、そういう省エネのために使ったすべてのお金を何年で取り返せるかというと、12年で取り返せるということです。

私がこの家を建ててもう9年経っていますから、あと3年。3年では死なないと思っています（笑）。ですから、まず確実に投資も取り返せると思っています。

赤池　ありがとうございました。

◆◆◆

赤池　それでは大変お待たせしました、菊川さんのお話をお聞きしたいと思います。東京大学時代に建築の勉強もされて、小宮山先生、大竹社長の

エコハウス自慢をお聞きになられて、どんな感想をもたれたのか、お話をお願いします。

菊川　いいなあと思いますよ。1年間で30万円が3万円って具体的な数字を聞くと、すごいなと思います。正直、そんなにすごくないってイメージでした。まだ技術が始まったばかりで、そこまで結果が見えているというイメージがなかったので、実際に伺って、30万円から3万円というのはすごいです。

それからこの葛飾区のモデルハウスでゼロエミッションが実現しているという話を聞いてびっくりしました。私も建築学科でしたが、ちょうど皆さんの環境に意識を向け始めている時期で、確かにそういうエネルギーがうまく循環するような家の見学が授業の中に組み込まれていました。壁面を緑化したり、太陽光だったり、太陽熱を利用したものっていうのがありましたが、ここまで実現していてびっくりしました。もうここまでできているんだから、技術とさらにデザインで、もっともっと家をつくる人たちが広まると思います。誰が見てもすてきだなって思えるものを、もっともっと建築科の授業に取り入れたらいいのになと思いました。

私はマンションなので、まず家で何ができるかということですけれど。よく皆さん省エネと言われますが、本当にできることは、電気をこまめに消すとか、冷暖房の設定温度を高くしすぎない、低くしすぎないとか、そのくらいなので、私たちにできることは何だろうな、まずどこから始めたらいいのかというところが知りたいと思いました。

赤池　ありがとうございました。

◆

赤井　小宮山先生と大竹社長、これからのエコハウスには3つくらいの論点がありそうだなと思ったので、それを一つひとつ掘り下げていきたいと思います。

エコハウスというとどうしてもスマートグリッドとかスマートメーターとか技術でマネジメントという話に行きがちですが、例えば風を取り込むというように、何か地域性をコストをかけずに取り込んでいく、この考え方というのは非常に重要だと思うんです。

小宮山先生、やっぱり家の断熱が重要だということもわかりましたけれども、自然の恵みをもっと取り込んでいく、それを通じたCO_2削減みたいなことについては、いかが考えられておられますか？

小宮山　昔でいうと「風道」ですよね。風がスーッと通るようにすると、それだけでずっと過ごしやすくなる。トステムの考え方は、私は素晴らしいと思いましたね。横に開けるんじゃなくて、縦に開けると風が当たって入るということですよね。ああいうのは本当に素晴らしいと思う。ただ、どれくらいの地域に適用できるかなということです。菊川さんはマンションです。マンションだとかえって使えるのかな？　私の住んでいるところは一軒家が密集して建っているところなんです。そうすると、最近の東京だと周りも暑い。だから例えば5月、6月といったときに使えるのか、8月でも窓を開けて過ごせるのか、都心だとちょっと無理なんじゃないかなという気がしなくもないです。

だから郊外、東京大学も本郷、駒場、柏とありますけれども、本郷はどうなんだろう、目黒はどうなんだろう、柏ぐらいまで行くとどうなんだろう、さらにもう少し筑波辺りまで行くとどうなんだろう、やっぱり地域性が非常に出ることだと思います。

赤池　地域性もそうですし、今の菊川さんがお住まいのマンションを直すわけにはいかないんですが、たぶん窓もそうですけれども、例えばバルコニーに通気口をつけるとか、金網のクレーチング化するとか圧力差をつくったりするとマンションでも風をうまく取り込めるはずですよね。

大竹社長、たぶんポイントは窓なんじゃないかと思うんです。窓の重要性も含めて、具体的な取り組みやお考えをお聞かせ願えますか。

大竹　パッシブということで風を取り込むというのは、当然のことながら地域地域における、先ほど小宮山先生もおっしゃられた「風の道」です。この部分を考えたうえで家を建てるというのは大前提になってくると思います。

また、建った後はどうするんだということになるんですが、ひとつの物事の考え方ですね、いかに直射日光にあたらないようにするとか、風とは違った部分での改善改革というのが必要になってくるのではないかなと思います。

風と、簡単に言えば光、光の部分の熱をどういう風に逃がしていくかという部分が、ある面では風を通すのと同じような意味になってくるんじゃないかなという感じがします。

方法論としてはいろいろあると思いますが、具体的に簡単に言うと、昔からあるヨシズとかスダレとか。あるいは緑化の部分でいいますと、いかに水が含まれる状態をつくってやるか。これらのことをひとつずつやっていけば、大きな力になっていくんじゃないかなと思います。

赤池　僕はサービス精神旺盛なファシリテーターなので、菊川さんがお住まいのマンションでも、後づけで窓をエコにできるんですが、大竹社長、今実際にヒットしているインプラスのPRも含めて、後づけできるということを教えていただけますか。

菊川　後づけでもできるんですね。すごいですね。是非教えてください。

大竹　一番最初に実績といいますか効果を出していただいたのが、小宮山先生です。後ほど効果のほうはお聞かせいただけると思いますが、当然のことながら暑さ寒さというのは窓でいいますと、空気層をいかにとるかということになってきます。

私どもでは今、堤真一がテレビ宣伝をやっております。内窓をつけると、サッシ自体というか窓を二重にしてしまうということも、これ非常に大きな省エネといいますか、断熱になってくると認識しています。

現状テレビ宣伝でやっているのは、だいたい1時間くらいで工事が終わってしまう。さらにプラスしてエコポイントでお金が返ってくる。こんな捉え方で窓関係というのを一生懸命宣伝して、みんながやってくれたら、これはすごく大きな力になってきます。

約5800万戸くらいあるストックの中で、それを半分やると、だいたい全体の4%くらいのCO_2の削減になるという試算も出ています。そういう意味で内窓をつける、そしてCO_2の削減もしくは燃料も削減できる、そしてお金も返ってくる。こんな風な捉え方をしてもらったらいいんじゃないかなと思います。

菊川　そのエコポイントはいつごろまで大丈夫なんですか？

大竹　政府に聞いてください（笑）。

◆

小宮山　今日本では8割以上、9割近いお宅が冬に結露する家です。結露するって、全部熱が逃げているってことです。例えば暖房っていうと、みんなはここが寒いから暖房していると思っているわけです。でもそうじゃないんです。ここはもう暖かくなってるわけですから、熱が逃げなければ暖房を切ればいいんです。だけど結局、今も暖房を続けていますけれども、これは逃げている分だけ補っている。だから断熱をどれだけよくするかというのが、暖房機の節約で大事な点です。一枚ガラスというのは風をさえぎるだけだから、熱はスカスカなんです。だから結露して熱が逃げてしまうし、カビも生えるということになるわけです。

今の私の家とトステムさんが使っているよりも古い二重ガラスでは、間に空気が入っているんです。だけれども最近のものはどんどんよくなって、間にアルゴンというガスが入っていて、このガスはもっと熱伝導率が低いわけです。最近出たのが真空。だからどんどん魔法瓶になっているんです。

先ほども風を入れるのがいいかどうかっていう議論がありましたが、風を入れるときは、暖房をしないときです。逆に風を入れるときは、冷房をしないときです。だから縦に開く窓は、あれが二重ガラスじゃないといけない。閉めたときには冷暖房をする。そのときはエネルギー消費が少ない。だけれどもまだそんなに冷房をしなくても済むときに、まあ先ほどの6月というのはそういう意味で言ったんですが、窓を縦に開くと風が入ってきて涼しくなる。まあそんな感じなんじゃないですかね。

今8割から9割の日本の一枚ガラス、これはもう冬にセーターを着ないで吹きさらしにいるようなものだから、風だけさえぎっても暖かくはないわけ。間にセーターを着るから暖かい。セーターなしでいる家ですから、問題はそこにどうやって二重ガラスをつけるか。ここが難しいところです。新築はどんどんよくなっていきますが、新築だけがよくなっていくのでは間に合わない。だから既築のところをどうやってつけ替えていくか、この知恵が今必要なんじゃないでしょうか。

赤池　窓がものすごく重要だという話を再確認したわけですけれども、私の家もけっこう古い家なので、リフォームを考えなきゃいけないなと思っています。大竹社長、壁の方というのは何か知恵はないんですか。

大竹　ウォール（壁）の熱貫流率というのは現状の住宅でいうと、コンマ3からコンマ5。昔でいうと約1、下手をすると3ぐらいの古い家もあります。今、新築の家は断熱材を入れたり、あるいは外断熱をしたりいろいろな方法がありますので、コンマ3からコンマ5になっていますね。そういうところへもっていくと全然問題ないのですが、昔の2とか3とかいう熱貫流率、サッシは先ほど小宮山先生がおっしゃったあの方法をやりますと1.5とか1.8とかいう熱貫流率になっていますので、その部分だけはまともに断熱という部分での省エネ効果が出てくると思いますが、壁についてはどうなんでしょうか？やらなくてはいけないのですが、外壁のやり直しの可能性とか諸々の話が出てきますので……。

赤池　外壁に穴を開けて、エコの発泡体か何かで断熱性がきゅっと上がっちゃうようなものができないでしょうか。

小宮山　きれいでないといけないというのはひとつありますよね。断熱がよければ工場みたいなところに住んでいてもいいというわけではありません。気持ちよくなければいけないですよね。そういうのは、昨日の発表を見ていても結構ありました。新しくて本当にきれいな竹の何かをつくるとかが必要かと。それから断熱は、僕は真空断熱材だと思います。

先ほど冷蔵庫を買い替えたっていう話をしましたが、昔の冷蔵庫と今の冷蔵庫を同じところに置いています。前の冷蔵庫は330Lでしたが、今の冷蔵庫は405Lくらいです。外の大きさは同じなのに内容量がものすごく増えている。なぜかっていうと、昔の冷蔵庫は断熱材がものすごく厚いからです。何が言いたいかというと、日本は真空断熱材、例えばドイツはね、建築基準法で家の断熱も20cmにしたんです。今日本は10cmというのが新築の基準ですが、もし日本に20cmの断熱材を入れたら、もう家が狭くなってしまいます。昔の冷蔵庫と同じですよ。だから日本では真空の断熱材。大量生産すれば計算すると必ず安くなる。だから断熱は真空の壁でやって、窓もガラス真空です。魔法瓶になります。それで両側は本当にきれいなものでつくっていく。

さらに言うと、それをやると、このあと中国とかアジアの途上国が日本と同じ問題を抱えますから、もっといい家をつくりたいってなります。そのときにドイツのエコハウスと日本のエコハウスの競争になるわけです。日本が勝つに決まっています。だって20cmの断熱材のドイツハウスと、日本のスマートな内容量が非常に大きな家と比較してみると勝算は見えています。アジアは狭いんです。

日本は自分に適するものっていうのをつくっていけば、世界のエコハウスをリードできます。というのが、私の意見。だから壁は真空材です。

◆◆◆

赤池　菊川さん、今の話を聞いてどうですか？

菊川　そうですね。絹ってあるじゃないですか。素材の絹というのは放湿性と吸湿性があり逆のことを両方できると聞いています。日本には四季があって、蒸し暑いときもあれば寒いときもあります。先ほどのトステムさんの窓のように二重になっていて断熱するときもあれば、開いて風通しをよくする、絹のように両方の機能を兼ね備えているというのはすごく強みだと思います。そういうものが理想じゃないかと思います。

壁と窓を、そもそも別のものとして考えていますけれども、要は外側を囲っているものです。壁は構造体で、力を支えるという役目がありますが、そういう部分がちゃんと計算されたら、窓とか壁とかいう概念を取り払って考えてみるのも面白いかもしれません。全般的に家を囲むものであると考えて、例えばスリットのように壁だか窓だかわからないような、季節によって開き加減が変わったり、断熱の具合も調節できるようなものができたらすごくいいのではと、勝手に考えていました。

赤池　今、両面の機能をもっている絹のお話がありましたが、大竹社長、土もそうですよね。コンセプトホームでは調湿性と蓄熱性をあわせ持った壁とか、土のリビングとかいろいろ挑戦されていますよね。

大竹　家自体という考え方じゃなくて、家の周りという捉え方も、どうしても必要になってきます。そしてやはり昔の先人たちの知恵を使うというのは、このパッシブ・エコに関しては本当に必要だなという感じがものすごくしています。土の暖かさ寒さ、あるいは風の涼しさ暖かさというのをどうやってつくり上げていくかという問題、これが住まいの中にすごく影響してくると、こんな感じがしています。

ですから、先ほど小宮山先生がおっしゃった「魔法瓶的な家」を狙いながら、それにプラスして住まい方をよくする。簡単に言えば、住んでいる方々がいい暮らしができるという状態をいかにつくり上げていくかというのが、我々の最終的な、あるいは永久的なテーマだと思っています。

◆◆◆

赤池　それでは2つめの論点にいきたんですけれども、これからの低炭素社会を考えたときに、住宅は重要であると、でもやはり家族が乗る自動車とあわせて考えるべきだということで、小宮山さんはハイブリッドカーに替えられました。大竹社長のエコハウスは、不安定な太陽光発電を車載のバッテリーに溜めちゃえばいいというお考えで、たぶん安い深夜電力も溜められますよね。そこで、電気自動車時代の住宅づくりについて、こういうフロントランナーモデルをおつくりになっている大竹社長からお話しを伺いたいと思います。

大竹　冒頭にご説明しました通り、トステム住宅研究所というのは、2008年に電気自動車対応住宅という言い方で発表させていただきました。2008年当時には車から家に電気をもっていくという技術がなかったものですから、その考え方を概念として全体に発表させていただきました。

電気自動車というのは、そういう意味も含めて幅広く考えていきますと、多くの利点もありますし、課題もあります。「バッテリーを蓄電池に」というのはどうしてこんな考え方をしたのかと申しますと、蓄電池が非常に高いからです。ですから共用してしまおうと。共用して使えば、もっと安くできるんじゃないか、こんな考え方のもとに、住宅の電池として車を使う。あるいは安い電力を住宅のためにバッテリーに充電しておく、この双方の考え方をプレゼンテーションしたわけです。

どちらにしても、家にはどうしても蓄電池というものが必要になってくるだろうという認識は持っています。普及のための方法論という風に認識してもいいかと思っています。

太陽光で省エネ、小さいエネルギーでやって、余ったエネルギーは車の蓄電池に充電していく。あるいは深夜に安い電気、低炭素でつくった電気を充電しておく。こんな繰り返しの生活になってくるという前提の中で、今やった部分の話ということになってきます。

赤池　ご紹介いただいたエコなスマートハウスですが、そういう取り組みというのは、ちゃんと見える化できていますか。

大竹　当然ながら見えるような形でやっていきます。その部分についてはいろいろな仲間がございまして、三菱自動車さん、東工大さん、三菱商事さん等々いろいろな方が集まってプロジェクトを動かしています。

赤池　菊川さん、いかがですか。家だけじゃなくて、自動車と考えようとか、あるいは家の中でさまざまなエコ活動が見える化してくるとか、そのあたりお考えをお聞かせいただけますか。

菊川　そういうのが大好きです。日々自分の生活の中で、何かポイントを貯めているようで、それが返ってくるという意味ですごく楽しそうだと思います。

やはり見える化はモチベーションが上がると思います。今は明細を見て、今月はいくらかな?というすごく幅の少ない動きの中で見ているだけなので、ライフスタイル自体を楽しんでエコ活動ができるのは、すごくいいと思いました。

私は今ひとりですが、家族がいらっしゃる皆さんだったら、お子さんとかとそういう話ができて科学に対する知的好奇心もすごく促進されるし、小さいころからそういう意識で楽しんでできるというのは、これから未来を担っていく子供たちにとっても、すごくすてきではないかなと思います。

赤池　実際に楽しい省エネ生活とかやられているんですか?

菊川　私、本当にもう電気を消すとか、冷暖房の温度設定ぐらいで、まだ自分が何かしようっていう段階に至っていないんです。私みたいな立場の人が本当にたくさんいると思うので、初めの一歩が踏み出しやすくなるような社会環境、仕組み、誘導みたいなものがあるとうれしいと思います。

赤池　国の施策の話に行く前に、是非小宮山先生にお聞きしたいんですが、例えばHEMSとか現在高いじゃないですか。ああいう技術開発、スマートメーターなんかも含めてどうなっているんでしょうか。

小宮山　私も見える化というのはものすごく重要だと思います。自分の経験でいうとハイブリッドカーですが、今どれだけガソリンを使っているか、刻々と見えるんですよ。それで今はガソリンが切れて電気で走っているとかがわかる。実は私は世田谷に住んでいて、余り長い時間車に乗りません。それで混んでいるところで乗りますと、燃費が悪いんです。前の車は1Lで7kmくらいだったんですが、ハイブリッドカーに替えた直後はよくなったとはいっても、12、3kmでした。ところが、見える化であんまり急加速をするとダメだとかだんだんわかってくるんです。それでだんだんよくなってきて、今は1リッター 22kmです。もし、あのメーターがまったくなかったら、リッター 13、4kmです。それが見える化で22kmまでになってくる。だから、それくらい効果があります。

それから今、赤池さんがHEMSが高いっておっしゃっていたけれど、高いです。HEMS っていうのは、ホーム・エナジー ・マネジメント・システムという、自動車のダッシュボードの見える化メーターみたいなものを、家につけようということです。北九州でこの間つくっていましたが300万円です。誰がたかだか1年30万円の電気・ガス代のために300万円のメーターを入れますかということです。

これは大量生産して2、3万円になると、面白いから入れてみようかというふうに動きます。大量生産というのはそれぐらい大きなことで、そういう意味でも市民が賢くなって、みんなで初期のまだないマーケットというのを、日本の中でつくっていくという運動が必要なんじゃないかなと、最近思っています。

大竹　冒頭に、子供の教育のためにということをお話しました。あそこで、スマートクロックというのを取り入れています。これは現状で家の中がどうなっているのか、どこでどのくらいのエネルギーを使っているのかというのを見える化するものです。これは今、子供の教育ということです。1ヵ月千円くらいで貸しています。そういったことは、現状でできているということを少し加えさせていただきます。

赤池　アイフルホームさんのテレビCMを見ると、僕が審査委員をやっているキッズデザインのマークがありますが、キッズデザインに基づく家づくりとか、そういったソフト面からの発想も大事ですよね。

◆◆◆

赤池　そういえば小宮山先生、今子供目線の住宅の話が出ましたが、一方で小宮山先生は高齢社会総合研究機構の横断的な研究活動をずっと支援されてきています。高齢化と環境とかサスティナブルな家とか自動車みたいなものについて、ご提言も含めてお考えを伺いたいんですが。

小宮山　高齢社会のための産業と、エコのグリーンというのは非常になじみがいい問題だと思います。例えば先ほど電気自動車の事例が出ましたが、電気自動車というのは非常に制御性がいいんです。ですから、ぶつからない自動車とか、安全性の高い自動車をつくるというのにも非常にいいと思います。

だんだん20世紀型の重いものをつくるということから、人間の考え方が非常に多様な嗜好に対応するという方向に向かっていきますよね。そうすると、極論すると例えば京都の碁盤の目の中は、みんな早く電気自動車にすればいいわけです。たぶん21世紀のそんなに遠くない時期に、あと2、30年もすれば自動車は全部電気自動車か、燃料電池車が走ると思っています。長期的にはどちらかになると思っています。もうそれを早く日本がやる。そうすると非常に制御性がいいし、クリーンな社会になってきます。これは高齢者にとっても住みやすい社会になるということです。

まあ、全貌を話すには時間が足りないですが、両者は非常になじみがいいと確信しています。

◆◆◆

赤池　それでは残り時間もだんだん迫ってきましたが、今までいろんな話を菊川さんも聞かれたと思いますが、ご自身もアイスランドに行かれたり、ベニスに行かれたり、いわゆる環境問題を知るために海外を見ていらっしゃいます。思われたこと、感じられたことはありますか。

菊川　お仕事でアイスランドとかベニスに行ったんですが、アイスランドは国自体が環境問題に積極的に取り組んでいて、私が行ったのは5年くらい前でしたが、当時でCO_2 50%削減という目標を掲げていて、10年か20年後に半減するという目標でした。

アイスランドは地熱を利用して料理をしたりしていて、そういう自分の国や環境に合わせたやり方で、自然のエネルギーを利用して生活をしているのを見させていただきました。

また違ったモデルなんですが、先ほどお話にあったゼロエミッションハウスのように、家自体でエネルギーがうまく循環するようにするモデルを高校生が考えて、賞をもらっていました。とても意識が高くて、小さいころから環境について勉強している人たちが多いので、すごく驚いて、ああすてきだなと思いました。

あとベニスに昨年の11月に行ってきましたが、私が最初にベニスに行ったのは11年前なんです。そのときは全然そんな話題はなかったんです。でも今回行ったら、サンマルコ広場が水没するんですよ。まさかと思ったんですが、行ってる間に本当に水没して、ヒザぐらいの高さまで水が来ていました。その頻度がすごく多くなってきているということで、本当に地球温暖化問題を目の当たりにして、私たちの生活が脅かされているんだなということを感じました。

赤池　今2つの都市の話がありましが、環境対応というのは、やっぱり地域特性に合わせたデザインというものを一方で考えないといけない。

大竹社長、4月にLIXILが誕生して、今企業グループとしても、例えばソーラー特性のいいところはメガソーラーを構想されるとか、植林とか、あるいは地域ごとの植生を生かした庭をシステム化した住宅とか、いろいろな取り組みをされています。企業として、LIXILのPRも含めていただいて結構ですので、環境対応でできることについてお話ください。

大竹　今現状でトステムというのは単体でして、本業では窓やドアやキッチンなどの商品開発をしています。スマイルエコというキーワードのもと、できる限り環境にやさしい商品を普及してまいりました。来月皆さんに向け発表があると思いますが、現状で熊本と茨城にメガソーラーをつくっています。3.75メガワットのを2つ、来月3月にお披露目ということで、現状1件の発電をやっているという状況です。だいたい年間3000世帯くらい、電気量では3.75メガワットというのが提供できるという規模です。

また命の森づくりということで、地場で育った木、地場で生きている木を選んで各工場やその近辺に植えるという運動もしています。これはそこ

に育った木は絶対に枯れないそうです。

こういったことを代表例としてトステムで取り組んできました。4月1日になりますと、ご案内の通り、トステムとINAXと東洋エクステリア、サンウエーブ、新日軽、これがひとつの会社になります。トップブランドを3つも4つも持った会社が生まれ、家の中のことをひとつの会社が全部やるということになります。より一層エコの問題、CO_2削減の問題を大きな規模の中で考えられる。もっともっと協力し、また推進という部分でのお手伝いもできるんじゃないかと思っています。新しい会社の名前は「LIXIL（リクシル）」といいます。

今回、低炭素杯に協力させていただいたというのは本当にうれしい限りであります。私どもの企業の中心になる考え方をここで表現させていただいたということは、感謝の念に耐えません。皆さん素晴らしい取り組みをされています。昨日、発表をされた方々、本当にありがとうございます。一緒になって、低炭素社会に向けての活動、考えではなくて活動をどんどん進めていって、点から線、線から面へと低炭素社会の実現に向けて話を進めていきたいと思っております。本日はどうもありがとございました。

◆

赤池　こうなると是非、小宮山先生にプラチナ構想ネットワークの話を踏まえてまとめていただきたいと思います。できればそこに低炭素杯の審査委員長としてのメッセージも込めてお話いただければと思います。

小宮山　今プラチナ構想という話をいただいたので、話をさせていただきますが、今どこの国も先進国というのは難しい問題を抱えています。日本も抱えています。日本のひとつの難しい点というのは、先ほど菊川さんからアイスランドの話が出ました。アイスランドって人口30万人くらいですよね。だから日本の感覚でアイスランドを国と捉えない方がいいと思います。ひとつの地方都市です。そういう意味でいうと、例えばスイス。スイスぐらいでも、まあ長野県くらいと考えたほうがいいと思います。シンガポールに相当するのはどこですかね、大阪か名古屋市くらいに相当します。

だから日本って巨大な国なんです。北から南まで長い。国土面積はそんなに大きくない。長くて真ん中に山脈があるから、非常に多様です。ですからスマートシティをつくろうとか、エコライフをつくろうとか言っても、それぞれ特徴を持ったものをつくっていく必要があるわけです。それをあまりに国、国って言い過ぎるんじゃないのか。今、あまり日本の政治の状況はよくないですが、でも日本は間違いなく先進国です。環境だのエネルギーの問題で、世界の誰が見たって世界のトップを走っているわけです。これは紛れもない事実です。このことに自信を持って、じゃあこの先どこに行こうということを考えるわけです。それを僕が決めたんじゃなくて、みんなで議論して「プラチナ社会」と定義したんです。

それはひとつはエコロジーだろうと。まあ低炭素というのはエコロジーのひとつの要素、海もキレイだ、空もキレイだ、できれば東京湾で泳げるようにしたいという、エコロジーです。もうひとつは高齢社会。高齢社会というのは日本だけの問題ではありません。日本の65歳以上が22%になったといっても、イタリアでも19.8%です。ドイツだってほとんど日本を追いかけている。なぜ高齢社会になったかっていうと、医療が発達して、僕らが長生きできるようになったからです。それから教育が普及して、特に女性の教育が普及して、子だくさんというのが少なくなった。だからどの国でも、高齢社会を迎えるんです。いきいきとした高齢社会をつくろうと。それから人生100年時代だから、人がずっと成長していける社会をつくろうと。それからもうひとつが雇用。やっぱり雇用が経済の活力ですね、これがないとだめです。

だからなぜプラチナなんだっていうと、それをやるためにはグリーンイノベーション、シルバーイノベーション、ゴールドイノベーション、ゴールドというのは人づくりとかそんな意味なんですけれども、こういういろんな社会を変えていく、それによって新しい雇用も生まれるし、快適な社会が生まれるだろう。その快適な社会というのはたぶん東京でもさまざまです。下町の快適な社会と多摩川の近くの快適な社会というのは全部違うだろうと思うんです。だからそれぞれの地域で、それぞれの人たちが、自治体を場とした運動をつくろうということに自然となってきたわけです。場は自治体で、主体は市民です。つまりプラチナ社会に向かうとはどういうことかというと、暮らしをよくしようということです。それが先進国です。

先進国というのは、歴史を見ても常に暮らしをよくしようと思ってやってきたわけです。フランス革命だってそうです。別にフランス革命は世界のためにやってくれたわけじゃない。自分たちが食えないからやったんです。そしてそこに歴史的な合理性があったわけですね。民主主義とか自由とか、そういった合理性があったから普及していったというわけです。

やっぱり先進国というのは、いわば坂の上の雲がない状態です。坂の上の雲というのは先進国のモデルということです。もう日本は坂の上の雲の中に入っています。その先に行こうとするから、先進国というのは常に問題を抱えるわけです。そうすると必然的に、自治体の連合で前に進むという結論に、僕は達しました。それでプラチナ構想ネットワークをスタートしました。

そうしたら主旨に賛同される方がたくさんおられて、自治体の数が100を超えました。人口のカバー率は65%に達しました。8000万人の人々、これはどう数えるのかというと、秋田県の知事が参加すると、秋田県100万人の人が参加した、そういう数え方ですけどね、でもまあ8000万人を超える背景の人がいるということはとても大きなことです。

先ほどHEMSが高くてしょうがないという話がありましたが、たくさんの人が買えば、いいものがあっという間に安くなる。そこで新しい産業も生まれていくわけです。私たちで、自分で新しい産業をつくりましょうと、その中の重要な要素がグリーンイノベーション、今日議論しているような低炭素社会という問題になってきます。それがビジョン。プラチナ社会です。それからビジョンに向かう運動論としての、プラチナ構想ネットワークです。

赤池　ありがとうございました。

◆

赤池　本当はこれから1時間くらいしゃべりたいところなのですが、表彰式があるので延ばせられません。僕の総括の時間を是非菊川さんにプレゼントしたいと思います。会場の皆様にラストメッセージをお願いします。

菊川　私、今の小宮山先生のお話でハッと気づいたんですが、そもそも何で低炭素社会を目指すのかということです。その最大の目的は、私たち自身が楽しく快適でいきいきとした質の高い生活をするために、ということなんですね。

そういう意味では今は、自分たちがより喜びのある楽しい生活をしていくための、価値観の転換の時期なのかもしれません。

先ほどのLIXILさんの例もそうですが、それぞれの専門分野の人たちが縦じゃなく横につながるというのは、ひとつの価値観の転換です。自治体も縦軸にあるものを横につなげて、仲良く手を取り合っていくことが、すごく原動力になるし、推進力にもなるのではないかと思いました。

私も今日、お話を伺ってとても勉強になったので、自分のために、明日からもう少し考えたり、行動できるようにしてきたいと思います。

赤池　菊川さん、どうもありがとうございました。今日は限られた時間ですが、パネリストの皆さんからいろんな視座とか論点を提起していただけたと思います。この後の表彰式では、上位の受賞の発表があろうかと思いますが、そこにどんな意味があるのかということも是非お考えいただきながら、この後の表彰式を迎えていただければと思います。

言い足りなかった部分はたくさんあるかと思いますが、3人のパネリストの皆さん、本当にどうもありがとうございました。ご清聴いただきました会場の皆さん、どうもありがとうございました。

8 事業評価アンケートの結果について

事業評価委員　松本 安生（神奈川大学人間科学部人間科学科教授）

1.調査の概要

（ア）調査目的：低炭素杯2011（低炭素地域づくり全国フォーラム）の目的である、「全国各地で展開されている地球温暖化防止に関する地域活動を報告し、学びあい、連携の輪を広げる場を提供すること」に対する参加者の主観的な評価を把握し、今後の企画・運営の参考とする。

（イ）調査方法：

・アンケート調査票（1日目及び2日目の2枚）を当日に団体代表者に配布。

・受付の回収ボックスにて1日目及び2日目の各当日に回収。

・未回収団体に対しては電話にて督促を行い、郵送、メール、FAXにて回収。

（ウ）調査対象：フォーラム参加団体（47団体）

・回収数：1日目47団体（回収率100%）、2日目42団体（回収率89%）

（エ）実施時期：2011年2月5日～ 3月2日

2.調査項目

（ア）当日のフォーラムに対する満足度［問1］

（イ）現在の活動の継続や推進に対する効果［問2］

（ウ）現在の活動以外の新たな活動の開始に対する効果［問3］

（エ）他の団体との情報交換・交流に対する効果［問4］

（オ）他の団体と協力した活動の開始に対する効果［問5］

（カ）自由回答［問6］

3.調査結果（1日目）

（ア）当日のフォーラムに対する満足度［問1］

問1　本日のフォーラム（各団体によるプレゼンテーション）の内容は、あなたにとってどれくらい満足できるものでしたか。

【結果】

- 1日目の内容に対して、参加団体の半数近くの47%の団体が「非常に満足」と回答している。
- 「やや満足」とあわせると約90%の参加団体が満足と回答し、高い満足度となっている。

【主な理由】

- 北海道から鹿児島まで、さまざまな人の環境団体の活動を知ることができた。
- テンポよく進行されていたので、どのプレゼンも興味を持って聞くことができた。
- 他の団体の長所・短所がよくわかり、これからのプレゼンテーションの参考になった。

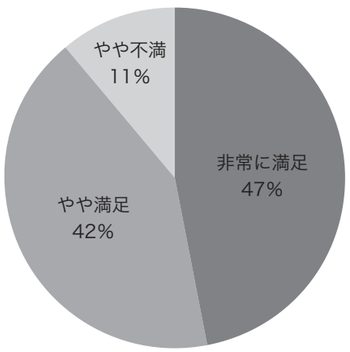


図 1　フォーラムへの満足度

（イ）現在の活動の継続や推進に対する効果［問2］

問2　あなたの団体が今後、『現在の活動を継続し、さらに広げていく』ために、本日のフォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 1日目の内容に対して、参加団体の半数近くの45%が、活動の継続や推進に「非常に役に立つ」と回答としている。
- 「やや役に立つ」とあわせると92%の参加団体が「役に立つ」と回答し、高い評価となっている。

【主な理由】

- 継続することの重要性と良き理解者であるパートナーを得ることを学ぶことができた。
- フォーラム（プレゼンを聞く）だけではなく、その後のつながりネットワークをつくっていかないと広げていけない。

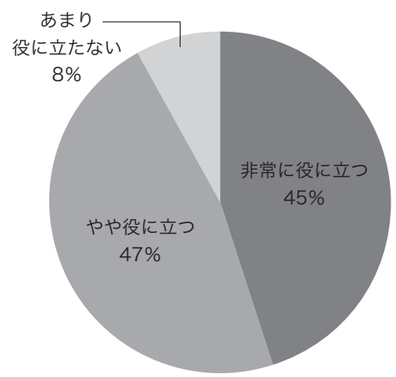


図 2　活動の継続や推進への効果

（ウ）現在の活動以外の新たな活動の開始に対する効果［問3］

問3　あなたの団体が今後、『現在の活動に加えて、新たな活動を始める』ために、本日のフォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 1日目の内容に対して、参加団体の43%が、新しい活動の開始に「非常に役に立つ」と回答している。
- 「やや役に立つ」とあわせると92%の参加団体が「役に立つ」と回答し、高い評価となっている。

【主な理由】

- いろいろな団体のやり方を見て、周りを巻き込む方法を学んだ。
- 地域・家族で行っているエコが取り入れられるものがいくつもあり、今後の活動活性化に役立ちました。
- 企業と地域とに分けてターゲットごとに提案してほしい。

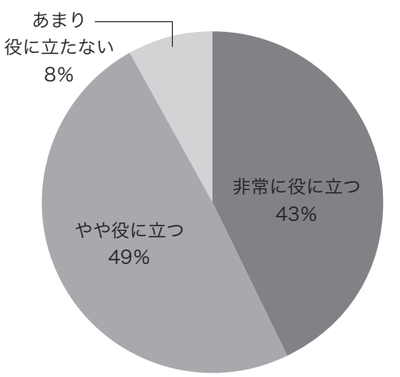


図 3　新しい活動の開始への効果

8 事業評価アンケートの結果について

事業評価委員　松本 安生（神奈川大学人間科学部人間科学科教授）

（エ）他の団体との情報交換・交流に対する効果［問4］

問4 あなたの団体が今後、『地域で活動を行う他の団体と継続的に情報交換や交流を行う』ために、本日のフォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 1日目の内容に対して、参加団体の37%が、他の団体との継続的な情報交換や交流に「非常に役に立つ」と回答している。
- 「あまり役に立たない」とする回答も20%あり、他団体との交流に対する評価はやや低くなっている。

【主な理由】

- 5団体と交流が持て、情報交換を相互で行う約束ができた。
- 今回の内容を広く公開することで情報交換に役立つと思いました。
- 直接、質問や話し合いができなかったからです。

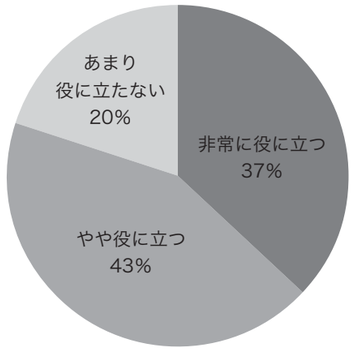


図 4　他の団体との交流への効果

（オ）他の団体と協力した活動の開始に対する効果［問5］

問5 あなたの団体が今後、『地域で活動を行う他の団体と協力して活動を行う』ために、フォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 1日目の内容が、他の団体との協力に「非常に役に立つ」と回答した団体は29%と3分の1程度にとどまる。
- 「あまり役に立たない」との回答も20%近くあり、他団体との協力に対する評価はやや低くなっている。

【主な理由】

- 地理的に近い近県の団体と積極的に相互協力の足がかりができた。
- 他県ということで少し離れているので簡単ではないと思うが、できるだけ一緒に活動したいと思います。
- 参加層がバラバラなので全ターゲットごとに集めてほしい。

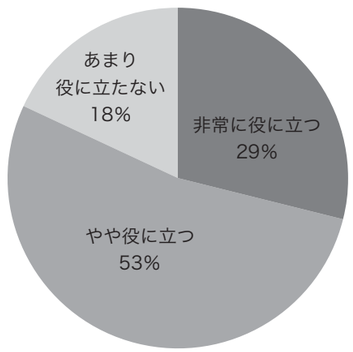


図 5　他の団体との協力への効果

4．調査結果（2日目）

（ア）当日のフォーラムに対する満足度［問1］

問1 本日のフォーラム（2日目）の内容は、あなたにとってどれくらい満足できるものでしたか。

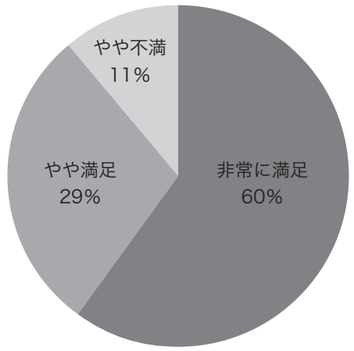


図 6　テーマ別分科会への満足度

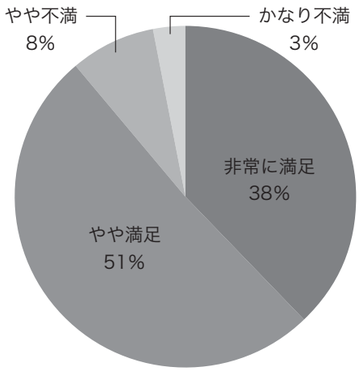


図 7　シンポジウムの満足度

【結果】

（1）テーマ別分科会

- 2日目のテーマ別分科会の内容に対して、参加団体の60%が「非常に満足」と回答している。これは、今回のフォーラムの内容で最も高い満足度となっている。
- 2日目のシンポジウムの内容に対して、「非常に満足」と回答した参加団体は38%にとどまる。これは、シンポジウムが一般参加者向けだったためと考えられる。
- 2日目の表彰式の内容に対して、参加団体の半数は「非常に満足」と回答している。

【主な理由】

- 分科会ではさまざまな立場の人と一緒に話をしたり、さまざまな取り組みを聞くことができたため。お互いが抱える問題の解決法もわかった。
- シンポジウムは時間が短いので、この程度の討論しかできないと思った。
- 表彰式の雰囲気が非常に和やかで、フォーラムの最後にふさわしい空間でした。
- 審査に参加者全員の点数投票を入れてほしかった。みんなに選ばれることで入賞の喜びが増すと思われる。

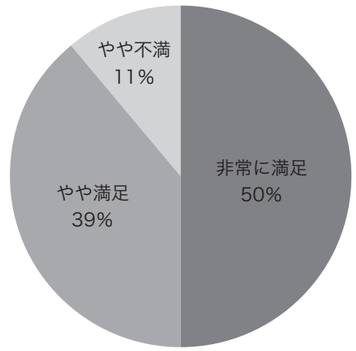


図 8　表彰式の満足度

8 事業評価アンケートの結果について

事業評価委員　松本 安生（神奈川大学人間科学部人間科学科教授）

（イ）現在の活動の継続や推進に対する効果［問2］

問2 あなたの団体が今後、『現在の活動を継続し、さらに広げていく』ために、本日のフォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 2日目の内容に対して、参加団体の半数が、活動の継続や推進に「非常に役に立つ」と回答し、1日目より高い評価となっている。
- 「やや役に立つ」とあわせると90%以上の参加団体が「役に立つ」と回答し、高い評価となっている。

【主な理由】

- 啓発等住民へのアピール方法など、具体的によかった。（テーマ別分科会）
- 各団体のニーズを聞け、自分の団体がどんな活動をすればよいかわかった。
- 他の活動グループが抱えている問題とこちらが抱える問題を討議することで、ある程度これからの方向性が互いに見出せたように思える。

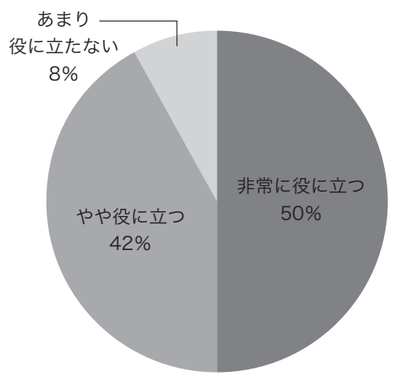


図 9　活動の継続や推進への効果

（ウ）現在の活動以外の新たな活動の開始に対する効果［問3］

問3 あなたの団体が今後、『現在の活動に加えて、新たな活動を始める』ために、本日（2日目）のフォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 2日目の内容が、新しい活動の開始に「非常に役に立つ」と回答した団体は31%にとどまり、1日目よりもかなり低くなっている。
- 「あまり役に立たない」とする回答も13%（5団体）あり、2日目の内容が新しい活動を開始することに対する評価はやや低くなっている。

【主な理由】

- 新たな活動テーマの参考になることは薄かった。
- もう少し時間をかけてお互いの各地の活動団体と話し合いたかった。
- 地域性や諸条件が異なるので、その場にあった方法で行っていくので、参考程度です。
- 現在の活動を広げることが現状課題です。活動の自立がまず優先課題としてあります。

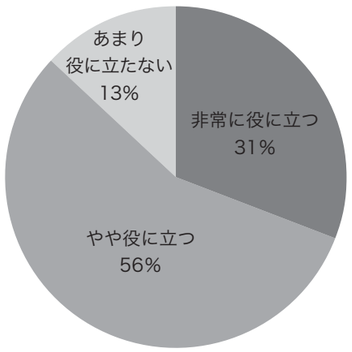


図 10　新たな活動の開始への効果

（エ）他の団体との情報交換・交流に対する効果［問4］

問4 あなたの団体が今後、『地域で活動を行う他の団体と継続的に情報交換や交流を行う』ために、本日（2日目）のフォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 2日目の内容が、他の団体との交流に「非常に役に立つ」と回答した団体は41%にとどまっている。ただし、1日目よりはやや高くなっている。
- 「あまり役に立たない」の回答が18%（7団体）あり、他団体との交流に対する評価はやや分かれる。

【主な理由】

- 同じ目的を持つ団体・企業に今回のフォーラムの話をし、交流を深めていけると思ったから。
- パイプをつなぐことがかなりの確率で可能である。
- 自分たちの活動に具体的にアドバイスをいただけた。たくさんの人と交流できてよかった。
- なかなか我々が抱える問題を、解決する糸口が見つかるほどの活動が見受けられなかった。
- 交流は今後の課題である。

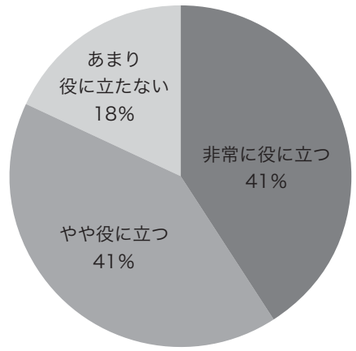


図 11　他の団体との交流への効果

（オ）他の団体と協力した活動の開始に対する効果［問5］

問5 あなたの団体が今後、『地域で活動を行う他の団体と新たに協力して活動を行う』ために、本日（2日目）のフォーラムはどのくらい役に立つものだったと思いますか。

【結果】

- 2日目の内容が、他の団体との協力に「非常に役に立つ」と回答した団体は31%にとどまる。
- 「あまり役に立たない」の回答が24%（9団体）あり、他団体との交流に対する評価は低くなっている。また、1日目より「あまり役に立たない」とする回答はやや多くなっている。

【主な理由】

- 地域の団体と上手く協力して活動しているさまざまな先進的な事例を知ることができた。
- 地域の範囲を、近県まで拡げた場合には簡単に相談できる足がかりとなりました。
- 具体的に、今取り組んでいる技術を求められた。
- 他団体の交流に関する話は聞けなかったので。
- 新たに協力とまでは交流できなかったため。

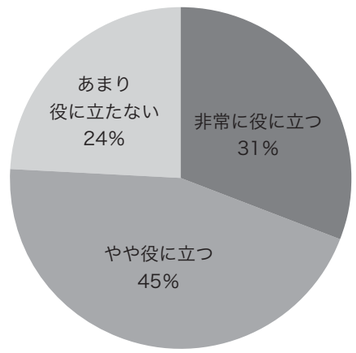


図 12　他の団体との協力への効果

低炭素杯のこれまでと、これからの道程（みちのり）

実行副委員長　川北 秀人

みなさま、昨日から本日にかけて長い時間ご参加いただき、本当にありがとうございます。また、これ以前にも、各地域で熱心に取り組みをしてくださっていることにも、心から敬意を表します。

私からは、これまでの経緯をご紹介させていただきます。冒頭にもお話がありましたが、3年前から、年度で言いますと4年前から、「一村一品 知恵の輪事業」というのを行ってきました。

みなさんもご経験がおありかと思いますが、CO_2の削減や地域の環境の保全というのは、活動に取り組んでいらっしゃる方は熱心なのですが、お互いにあまり仲がよくなかったり、連携ができていなかったり、ということがよくあります。

つまり、自分の現場の地域づくり・活動づくりには熱心なのですが、よそでどういうことが起きているのかが、なかなか共有できていませんでした。ですから、他の地域の方々と共有する機会をつくれないかということは、地域でも願っていましたし、国でも考えていました。

そこで、全国各都道府県にある地域の温暖化防止活動センターが、こうした取り組みを始めました。いろいろな方々と一緒に活動して、地域発のCO_2削減や温暖化への取り組みついて、共有する機会をつくれないかということです。それを各地域の中でやっているだけではなくて、全国で共有しようじゃないかというねらいで、この一村一品の取り組みが始まりました。

今までに3600くらいの取り組みが、ご参加くださいました。これまでも、今回と同じように、グランプリなどを選定してきましたが、どこが一等賞になったかが大切ではなく、みなさん方同士が、お互いから学べるかどうかを最大の目的にしています。

このあと表彰式がありますが、檀上に上がられる方、そして檀上に上がった人たちを拍手でお祝いしてくださる方に、関係上わかれてしまいますが、大切なことは、何度も言いますが、みなさんがお互いから学べるかどうか。これがこの事業の最大の意義であると、お考えいただければと思います。

ところがこの活動は、2009年秋にありました行政刷新会議による仕分けで、見事に仕分けられてしまいました。そこで何と言われたかといいますと、「個別提案を品評する方式の役割は終わっている」、「各団体の自主的な活動に委ねるべき」、「アイデアの水平展開を目指すべき」だと。それから「CO_2削減に寄与できているのかどうかが疑問」だとも言われました。だいたいこういうことをおっしゃるのは、自分ではやっていない人ですよね。

残念ながら、この事業は「3年で終われ」ということになってしまい、今年は「同じ形式で続けてはいけません」ということになりました。

続けてはいけませんと言われて、ふつう役所は「そうですか」と引き下がります。

ところが、我々のこの取り組みは、みなさんが地域で取り組んでくださっていることを、どうにかして横でつないでいく、お互いの力を借り合うという関係がやっとできるかな、というところだったので、「これで仕分けられて負けてなるものか」と思っていました。

今回、東京電力さんとトステムさんが資金的にご協力くださり、また、いろいろな方々に地域でも全国的にも支えていただいて、国の予算としては仕分けられてしまったんですが、民間の力で生き残ることができました。

そして今回、一村一品のDNAを引き継いだ形で、「低炭素杯」という形で開催することができました。正式な名称は「低炭素地域づくり全国フォーラム」といいます。もう少し短くしたほうが覚えやすいということで、ちょうどワールドカップの時期でもあったので、カップと名称を冠しました。「低炭素杯」と最初言い始めたときには、「何か気の抜けたチューハイみたいだ」という人が何名かいたんですが（笑）、覚えやすければいいと思います。

実行委員会を新たに結成しました。先ほどから檀上に上がってくださっている小宮山先生に委員長をお務めいただき、前回から引き続きご協力くださっている方々、そして全国でこうした活動に取り組んでいらっしゃるセンターの方々にもお力をお借りして、実行委員会をつくりました。これは国の予算で事業だからという形ではなくて、民間の力、総力を挙げて取り組もうという形で構成されています。

今年の大会は、全国の地域センターからエントリーしていただいたもの（これはある意味で選抜高校野球と同じで、「この地域はこの方を代表に」という方をご推薦いただいたパターン）と、全国でみなさん方が自らエントリーしていただいて、その中で審査委員会を経て選ばれた方々が昨日集まっていただいた47の代表の方々です。

私は、審査結果を聞いていません。みなさんがどういう結果になったのかを、私は聞いていないのですが、ある審査員の方に伺ったところ、「事前の結果とは大きく違った」ということでした。審査委員会になぜ時間がかかったかというと、みなさんの発表を見たり、詳しく伺うことで、大きな変化があったということでしょう。

この2日間、みなさんには昨日プレゼンテーションをしていただき、今朝は「地域おこし」と「コミュニケーション」という2つのテーマで分科会を開きました。その目的は、コンペ（審査）のためだけではなくて、お互いから学んでいただくためです。その会場の中でも、グループをつくっていただいて、きっと名刺交換もしてくださったことだと思います。昨日の発表の内容や、今日の分科会でのやり取りなどをきっかけにして、お互いに連携をしてくださることを願っています。

気候変動がもたらす社会・経済・くらしへの影響の大きさ。今年、日本海側や中山間地のみなさんは本当に雪で大変だったと思いますし、去年の夏の暑さも大変でした。気候の振れ幅が大きいことによる、我々の生活への影響の大きさを、思い知らされる段階に来たと思います。

今まで「チームマイナス6%」の時代というのは、家庭や地域や会社の中での省エネの時代でした。つまり、どちらかというと節約しようということ。しかし、先ほどの記念シンポジウムの話を聞いてもおわかりの通り、もう次の段階に行かないといけない。「マイナス25%」に国を挙げて取り組んでいくとき、これは投資も必要になる。今は経済的な負担があるかもしれないけれども、何年かかけて取り返していくというタイプ、10年といった時間が経つとプラスが生まれるかもしれない。つまり、自分たちでもある程度のリスクやコストをとって、CO_2の削減につなげていくというような、節約型だけではなくて、投資型のCO_2削減というのにも挑んでいきたいと思います。

最後に、みなさんに重ねてお願いしたいのは、「今日はどうだった？」と地域で聞かれたら、どんな賞がもらえたか、点数が何点だったかではなく、「こういうのが参考になった」とか、「こういう人たちとつながりができた」ということを持ち帰っていただきたいのです。この場を開催させていただいた我々から申し上げると、みなさまがそれぞれの地域で、また近隣の方々や同じ業界の方々などと連携をして、次の段階に進んでいただけることを、強く願っております。

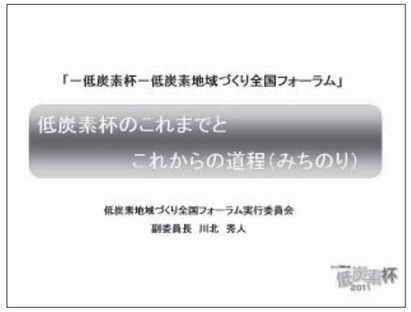
ぜひ、表彰の結果に一喜一憂することなく、しかし選ばれた方はとことん喜んでいただき、選ばれなかった方々はとことんお祝いしてあげて、その人たちからいいものを盗んで帰っていただくという発想で臨んでいただきたいと思います。

以上が、この会のねらいとみなさまへの期待・お願いでございます。

開催にご協力くださいました地域のセンターのみなさま、東京電力、トステム、協賛事業者のみなさま、ならびにさまざまな形で運営にご尽力くださいましたみなさま方に、心からお礼を申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

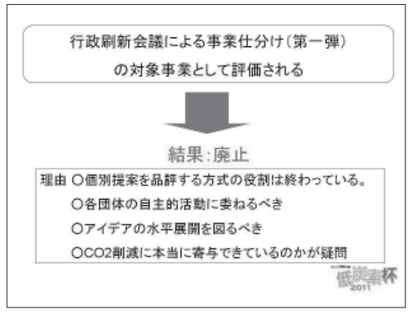
9 全体総括

1

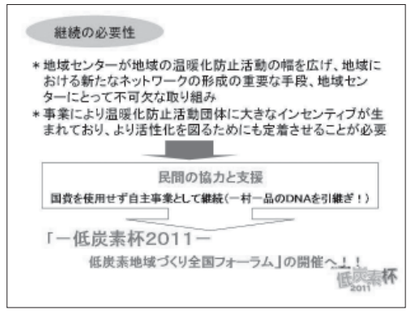


2

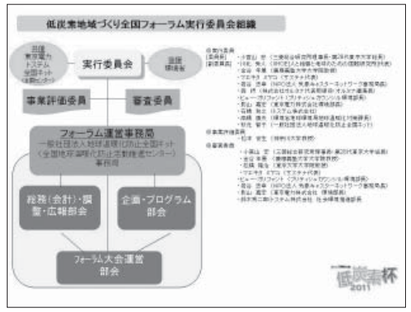
3



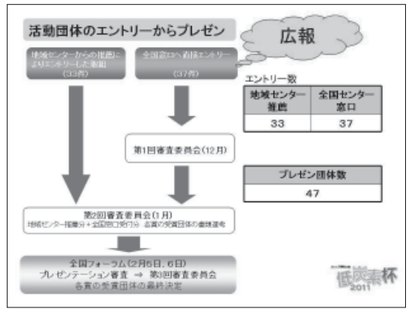
4



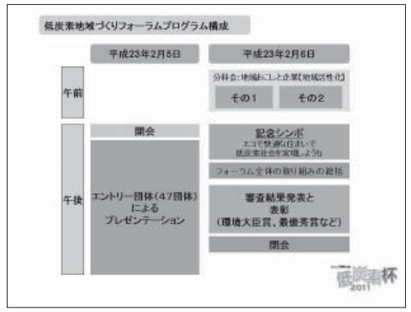
5



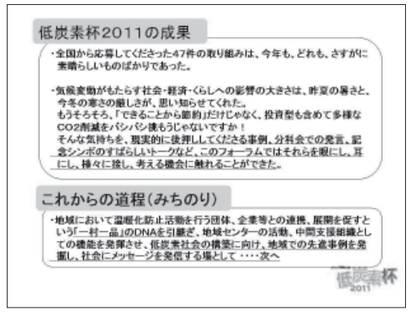
6



7



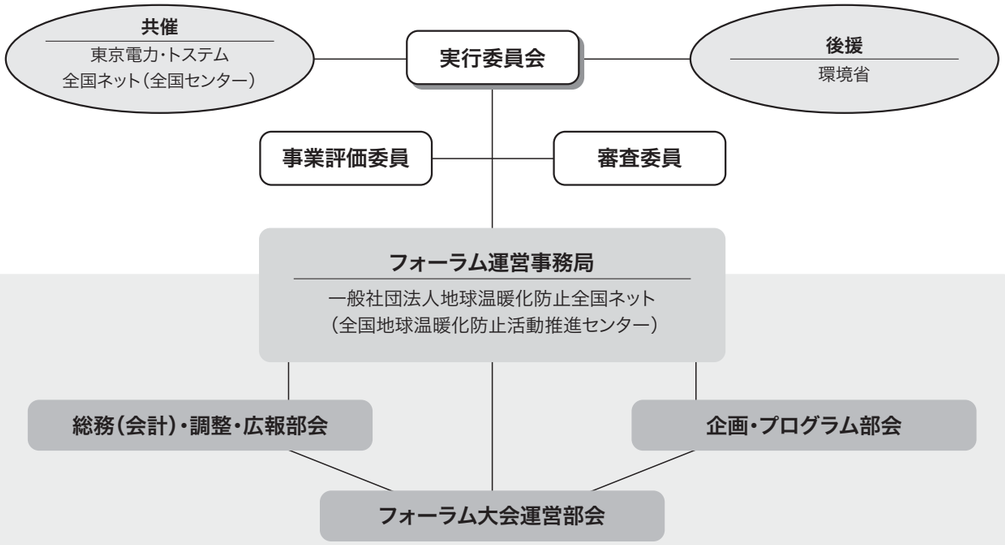
8



資料編

1 実行委員会組織と事務局運営体制

低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会組織



■実行委員

委員長

小宮山 宏（三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問）

副委員長

川北 秀人（IIHOE［人と組織と地球のための国際研究所］代表）

実行委員

秋元 智子（一般社団法人地球温暖化防止全国ネット理事
［埼玉県地球温暖化防止活動推進センター事務局長］）

石橋 和之（トステム株式会社広報宣伝部長）

岩谷 忠幸（NPO法人 気象キャスターネットワーク事務局長）

影山 嘉宏（東京電力株式会社執行役員環境部長）

金谷 年展（慶應義塾大学大学院教授）

高橋 康夫（環境省地球環境局地球温暖化対策課長）

ヒュー・オリファント（ブリティッシュ・カウンシル 科学・環境部長）

マエキタ ミヤコ（サステナ代表）

森 摂（株式会社オルタナ代表取締役・オルタナ編集長）

■事業評価委員

松本 安生（神奈川大学人間科学部人間科学科教授）

■審査委員

委員長

小宮山 宏（三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問）

副委員長

金谷 年展（慶應義塾大学大学院教授）

審査委員

岩谷 忠幸（NPO法人 気象キャスターネットワーク事務局長）

影山 嘉宏（東京電力株式会社執行役員環境部長）

鈴木 秀二郎（トステム株式会社執行役員社会環境推進部長）

ヒュー・オリファント（ブリティッシュ・カウンシル 科学・環境部長）

マエキタ ミヤコ（サステナ代表）

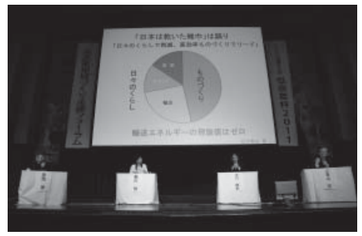
松橋 隆治（東京大学大学院教授）

森 摂（株式会社オルタナ代表取締役・オルタナ編集長）

2 参加者

低炭素杯2011 参加者人数

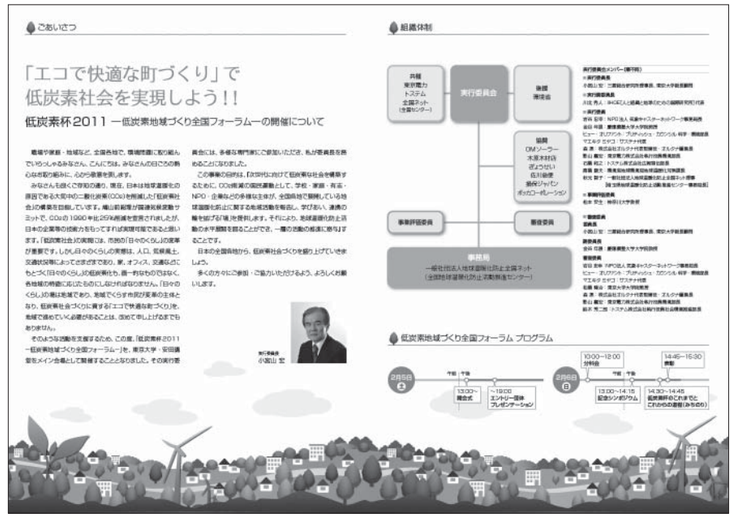
区分	人数	備考
参加団体	300	
一般参加	500	当日参加を含む
地域センター関係	80	
大会関係者	120	主催、共催、協賛団体等
合計	1000	



(1)ホームページ、パンフレット、プログラム

■ホームページ

■パンフレット



■プログラム

(2)報道発表資料

環境省

HOME | トピックス | 新着情報 | 報道発表 | 窓口案内 |

環境省＞報道発表資料＞

報道発表資料 Press Release

この記事を印刷する

平成22年11月12日

「一低炭素杯一低炭素地域づくり全国フォーラム」のエントリー募集について(お知らせ)

次世代に向けた低炭素な社会を構築するため、学校・家庭・有志・NPO・企業などの多様な主体が全国各地で展開している地球温暖化防止に関する地域活動を報告し、学びあい、連携の輪を拡げる「場」を提供する「一低炭素杯一低炭素地域づくり全国フォーラム」が、「低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会」の主催により、平成23年2月に開催されます。
この全国フォーラムの開催に向けて、全国からエントリーしていただく、多様な温暖化防止に向けた活動や取り組みの募集が行われることとなりましたのでお知らせします。

■「一低炭素杯一低炭素地域づくり全国フォーラム」へのエントリー募集

【募集期間】
11月15日(月)～12月15日(水)

【応募方法】
所定のエントリーシートを事務局「低炭素杯」担当まで郵送してください。
[1] エントリーシートのダウンロード方法
以下のURLからエントリーシートをダウンロードしてください。
URL: http://teitansohai.jp/index.html
※ ダウンロードができない場合は、事務局までご連絡ください。
[2] 事務局住所
〒101-0053 東京都千代田区神田美土代町9-17 神田第三中央ビル5階
一般社団法人地球温暖化防止全国ネット(全国地球温暖化防止活動推進センター)
TEL 03-6273-7785 / FAX 03-5280-8100

【選考方法】
[1] 主催者において、12月下旬、ご応募いただいた取り組みが審査され、低炭素杯の全国大会に出場していただく団体等が選考されます。
[2] 2月に開催される低炭素杯の全国大会において、取組の発表をしていただき、出場団体等の中からグランプリ(環境大臣賞)等を選ぶ最終審査が行われます。

■「一低炭素杯一低炭素地域づくり全国フォーラム」の開催概要

【日程】
2月5日(土)13:00～19:00(12:00開場)
2月6日(日)9:30～15:30(9:00開場)

【会場】
東京大学 安田講堂及び山上会館
(東京都文京区本郷7-3-1)

【内容】
1日目: 出場団体によるプレゼンテーション
2日目: 分科会、記念イベント、表彰式 他

【入場料】
無料

【主催】
低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会
[委員長] 小宮山 宏:三菱総合研究所理事長・第28代東京大学総長
[副委員長] 川北 秀人:IIHOE[人と組織と地球のための国際研究所]代表
[実行委員] 岩谷 忠幸:NPO法人 気象キャスターネットワーク事務局長
金谷 年展:慶應義塾大学大学院教授
ヒュー・オリファント:ブリティシュカウンシル科学・環境部長
マエキタ ミヤコ:サステナ代表
森 摂:株式会社オルタナ代表取締役・オルタナ編集長
影山 嘉宏:東京電力株式会社執行役員環境部長
石橋 和之:トステム株式会社広報室伝部長
高橋 康夫:環境省地球環境局地球温暖化対策課長
秋元 智子:一般社団法人地球温暖化防止全国ネット理事
[事業評価委員] 松本安生:神奈川大学人間科学部人間科学科教授

【共催】
東京電力株式会社、トステム株式会社、一般社団法人地球温暖化防止全国ネット

【後援】
環境省

【事務局】(問い合わせ先)
一般社団法人地球温暖化防止全国ネット(全国地球温暖化防止活動推進センター)
TEL 03-6273-7785 / FAX 03-5280-8100

■取材について

全国大会に出場される団体や全国大会当日の取材要領については、1月下旬頃、別途リリース(第2報)する予定です。
全国大会はもちろん、各地での取組に関する取材をお待ちしています。
(御質問等ありましたら、事務局(一般社団法人地球温暖化防止全国ネット)までお願いします。)

連絡先
環境省地球環境局地球温暖化対策課
(代表:03-3581-3351)
(直通:03-5521-8249)
課長:高橋 康夫(内:6770)
課長補佐:佐藤 邦雄(内:6758)

環境省

HOME | トピックス | 新着情報 | 報道発表 | 窓口案内 |

環境省＞報道発表資料＞

報道発表資料 Press Release

この記事を印刷する

平成23年1月11日

「一低炭素杯2011一低炭素地域づくり全国フォーラム」の参加者募集について(お知らせ)

次世代に向けた低炭素な社会を構築するため、学校・家庭・有志・NPO・企業などの多様な主体が全国各地で展開している地球温暖化防止に関する地域活動を報告し、学びあい、連携の輪を拡げる「場」を提供する「一低炭素杯2011一低炭素地域づくり全国フォーラム」が、「低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会」の主催により、平成23年2月に開催されます。
このたび、厳正な審査を経て出場団体を決定し、2月5日(土)、6日(日)、東京大学安田講堂(東京都文京区本郷)の全国フォーラムで、発表していただくこととなりました。
全国フォーラムでは、37都道府県から47の出場団体(別紙1参照)によるプレゼンテーションが行われ、環境大臣賞その他が決定されます。
全国各地域の温暖化防止の先進的な取り組みを知っていただき、また交流していただけるまたとない機会ですので、ぜひ皆さまの参加をお待ちしています。

■「低炭素杯2011－低炭素地域づくり全国フォーラム」の開催について
【日程】 2月5日(土)13:00～19:00(12:00開場)
2月6日(日)10:00～15:30(9:30開場)
【会場】 東京大学 安田講堂及び山上会館
(東京都文京区本郷3－7－1)
【入場料】 無料
【主催】 低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会(委員長 小宮山 宏)
【共催】 東京電力株式会社、トステム株式会社、一般社団法人地球温暖化防止全国ネット
【協賛】 OMソーラー株式会社、木原木材店、株式会社ぎょうせい、佐川急便株式会社、株式会社損害保険ジャパン、株式会社ポッカコーポレーション
【後援】 環境省
【事務局】 一般社団地球温暖化防止全国ネット
(全国地球温暖化防止活動推進センター)
TEL 03-6273-7785 / FAX 03-5280-8100 / E-mail teitanso-hai@jcoca.org
【URL】http://teitansohai.jp/index.html

■参加申込方法【申込締切日:2月3日(木)17:00】
[1]「低炭素杯のホームページからチラシをダウンロードし、チラシ裏面の参加申込書に所定の事項を記入して事務局までFAXしてください。【FAX:03－5280－8100】
[2]「低炭素杯参加希望」とお書きいただき、お名前、住所、会社名及び団体名、電話番号、FAX、参加されるイベント(プレゼンテーション、分科会、記念シンポジウム、表彰式)をメールにて事務局までお送りください。(E-mail teitanso-hai@jcoca.org)

■取材について
大会当日の取材を希望される方は、別紙2「取材申込書」にて2月1日(火)17時までに「低炭素地域づくり全国フォーラム」事務局までFAXでお申し込みください。
【 TEL 03-6273-7785 / FAX 03-5280-8100 】

■開催概要
○2月5日(土)
12:00～ 開場
13:00～19:00 開会式、出場団体プレゼンテーション審査(別紙1参照)

○2月6日(日)
10:00～12:00 分科会「地域づくりとコミュニケーション」
コメンテーター: 関 正雄氏((株)損害保険ジャパン理事CSR統括部長)
13:00～14:15 低炭素杯2011～ストップ温暖化大賞～記念シンポジウム
「エコで快適な住まいで低炭素社会を実現しよう!」
コーディネーター: 赤池 学氏((株)ユニバーサルデザイン総合研究所所長)
パネリスト: 小宮山 宏氏(三菱総合研究所理事長・東京大学総長顧問)
大竹 俊夫氏(トステム(株) 取締役社長)
菊川 怜さん(タレント、女優)
14:30～15:45 フォーラムの総括、審査結果発表、表彰式、フォトセッション

【審査方法】
審査委員会が申請書類による事前審査と大会初日に行われるプレゼンテーション審査を実施し、環境大臣賞(4点)、地域でECO賞、家庭でECO賞、グローバル賞、コミュニケーション賞、WEB投票賞(以上各1点)、優秀賞を決定します。

【審査委員会】
[委員長] 小宮山 宏:三菱総合研究所理事長・東京大学総長顧問
[副委員長] 金谷 年展:慶應義塾大学大学院教授
[審査委員] 岩谷 忠幸:NPO法人 気象キャスターネットワーク事務局長
ヒュー・オリファント:ブリティシュカウンシル科学・環境部長
マエキタ ミヤコ:サステナ代表
松橋 隆治:東京大学大学院教授
森 摂:株式会社オルタナ代表取締役・オルタナ編集長
影山 嘉宏:東京電力株式会社執行役員環境部長
鈴木秀二郎:トステム株式会社執行役員社会環境推進部長

【WEB投票】
1月31日(月)まで下記URLの投票ページで受付。
なお、WEB投票の結果は、審査の参考とさせていただきます。
【URL】http://teitansohai.jp/index.html

添付資料
- 低炭素杯2011出場団体一覧[PDF 109KB]
- ストップ温暖化大賞「低炭素杯2011」取材のお願い[PDF 189KB]
- ストップ温暖化大賞(低炭素杯2011(表面)[PDF 1,338KB]
- ストップ温暖化大賞(低炭素杯2011(裏面)[PDF 342KB]

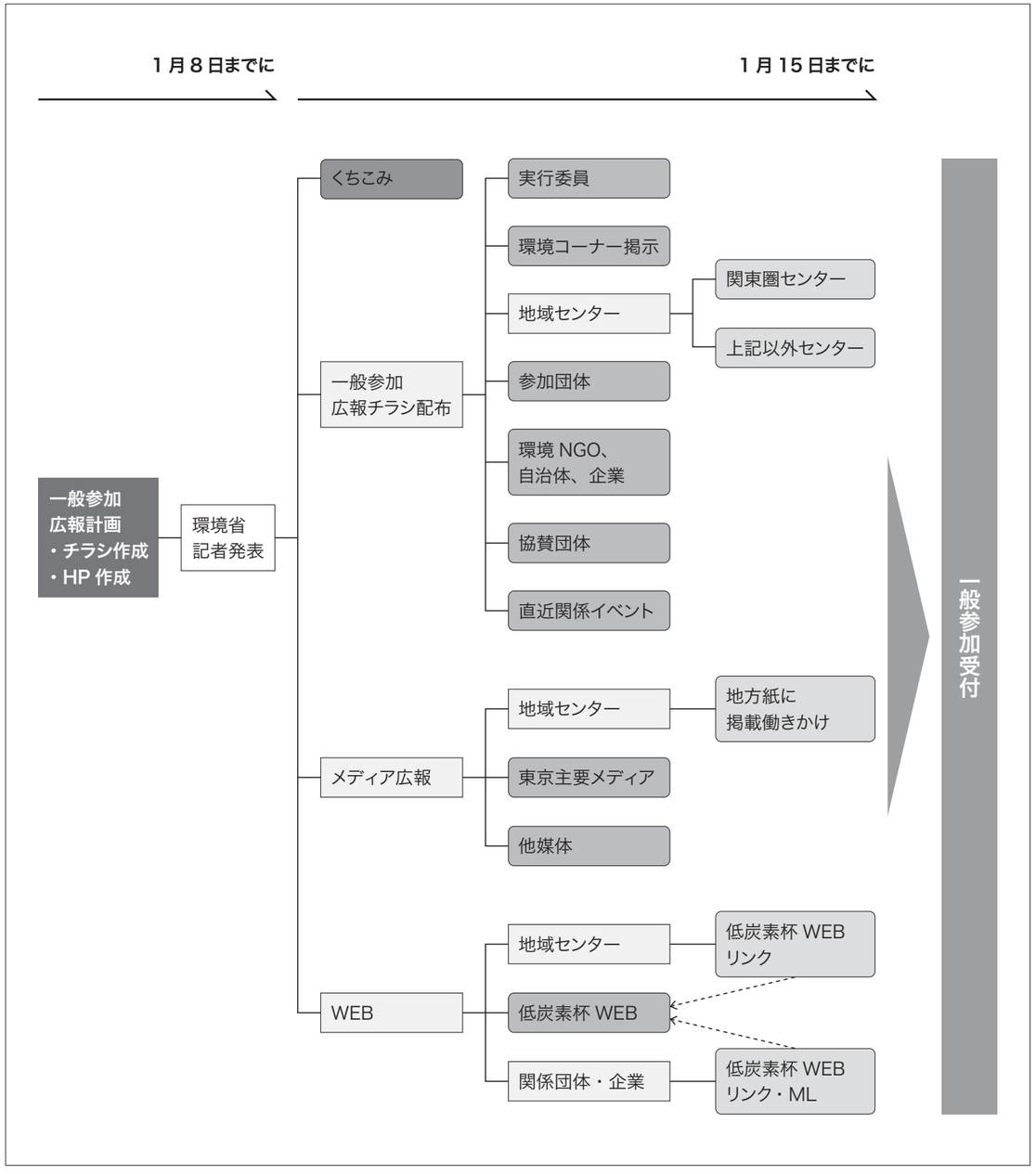
連絡先
環境省地球環境局地球温暖化対策課
(代表:03-3581-3351)
(直通:03-5521-8249)
課長:高橋 康夫(内:6770)
課長補佐:佐藤 邦雄(内:6758)

(3)その他の広報等実績

①エントリー募集にかかる広報

平成22年　10月　1日	「低炭素杯」ホームページ　立ち上げ
平成22年　11月　5日	全国の地域センターに推薦依頼
平成22年　11月 12日	環境省記者発表 全国の地域センターにHPアップを通知
平成22年　11月 18日	日本生協連のMLを通じて紹介
平成22年　11月 19日	関係団体、関係NPO、NGO、自治体等へエントリー募集のDM約800を発送
平成22年　11月 22日	環境カウンセラーへエントリー募集の情報提供依頼
平成22年　11月 22日	日本環境協会へ広報協力を依頼
平成22年　11月 24日	科学技術振興機構運営の科学技術ポータルサイトで紹介
平成22年　11月 25日	トステムが共催をプレスリリース
平成22年　11月 25日	環境gooにエントリー募集記事掲載
平成22年　11月 28日	神奈川県センター主催うちエコ診断イベントで広報
平成22年　12月中	全国ネットが開催する温暖化防止月間行事で広報
平成22年　12月1日～9日	全国6ヵ所で開催する地域センターブロック会議で推薦エントリーを直接依頼
平成22年　12月　3日	栃木県センター主催うちエコ診断イベントにおいて広報
平成22年　12月　3日	エコピープル支援協議会より【eco-peopleメールマガジン11月増刊号】に情報掲載
平成22年　12月　9日	エコプロダクツ2010において低炭素杯広報
平成22年　12月 15日	エントリーの締め切り

②一般参加募集(広報実施プラン)



(4)メディア等の掲載

■新聞

低炭素社会実現へ 6日東大でシンポ
トステム

トステムは2月6日、東京都文京区の東大安田講堂でシンポジウム「エコで快適な住まいで低炭素社会を実現しよう!」を開く。

小宮山宏三菱総合研究所理事長らをパネリストに、低炭素コミュニティーの方向性を探る。

同シンポジウムは、「低炭素地域づくり全国フォーラム」に合わせて開くもので、低炭素杯2011・ストップ温暖化大賞記念シンポとなる。

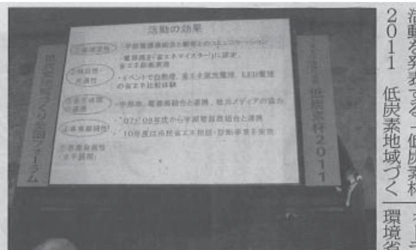
小宮山氏のほか、大竹俊夫社長、女優の菊川怜さんがパネリストとして参加。赤池学ユニバーサルデザイン総合研究所所長がコーディネーターを務める。

参加無料。申し込みは2月3日まで受け付けている。

低炭素杯のホームページ(http://teitansohai.jp/)から申込書がダウンロードできる。

問い合わせは、事務局・電話03—6273—7785。

宇部の省エネ促進紹介
東京で低炭素地域フォーラム



各地域の地球温暖化防止活動を発表する「低炭素杯2011 低炭素地域づくり全国フォーラム」(同フォーラム実行委員会主催、環境省後援)が5日、東京都文京区の東京大学安田講堂で開かれ、宇部市の宇部市地球温暖化対策ネットワーク(中西弘代表)が参加した。

同フォーラムは、事業仕分けにより昨年で廃止となった温暖化対策「一村一品・知恵の環づくり」事業を民間の支援で継承、全国各地の地球温暖化防止活動の輪を広げる目的として開催。37都道府県から47の地域団体や学校、企業が参加し、それぞれ4分間で温暖化防止に向けた活動内容を発表した。

省エネ啓発の取り組みを発表する宇部市地球温暖化対策ネットワークの名越久美さん

宇部市地球温暖化対策ネットワークは、仰木則康事務局長と名越久美さんが登壇し、一昨年度に実施した「省エネ家電普及促進事業」を発表。宇部市、宇部電器商組合と連携して養成した「うべ省エネマイスター」が、一般家庭に家電診断や省エネのアドバイスを実施。省エネ家電の普及促進を図るとともに、省エネアンケートなど意識啓発に向けた取り組みを紹介した。

6日は、「エコで快適な住まいで低炭素社会を実現しよう!」と題したパネルディスカッションを開催。環境大臣賞をはじめ参加団体の各賞を発表し、表彰式が行われる。

NPO外断熱推進会議 ストップ温暖化大賞「低炭素杯」出場

外断熱推進会議(東京都港区)は低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会が主催する『低酸素杯2011』に出場する。

低酸素杯は地球温暖化防止に関する地域活動を全国各地で実践している学校、NPO、企業、自治体など37都道府県から47の代表が集合し、プレゼンテーションやシンポジウムを行うもの。2月5、6日に東京大学・安田講堂および山上会館で開催される。

2月5日は参加団体によるプレゼンテーション。各地域のNPO団体をはじめ、高校などそれぞれの地域の特色を生かした地球温暖化防止活動が集結。地下水熱ヒートポンプを利用した例やバイオディーゼル燃料による環境プロジェクトなど、CO_2削減の取り組みを紹介する。外断熱推進会議は「外断熱建物の新築、改修によるCO_2削減」で出展する。

6日は分科会「地域づくりとコミュニケーション」、低炭素杯2011〜ストップ温暖化大賞〜記念シンポジウム「エコで快適な住まいで低炭素社会を実現しよう」、また、各取り組みへの表彰式が行われる。なお参加費は無料。

▲低炭素化への取り組みが集結

温暖化㊙対策 全国発信
三島高生徒会 来月「低炭素杯」に出場
天ぷら油回収 地域とタッグ

使用済みの天ぷら油の回収に取り組んでいる三島高生

三島高校(四国中央市三島中央5丁目)の生徒会は2月、全国各地の団体・個人が温暖化防止策を報告する「低炭素杯2011」(地球温暖化防止全国ネットなど主催)に出場、使用済みの天ぷら油を回収する取り組みを発表する。2年伊藤麻衣さん(17)は「見方を変えると、捨てている物がエネルギーになることを伝えたい」と話していた。

生徒会の12人は昨年9月から月3回、各家庭から出た廃油を学校で集めている。このほか、市内の幼稚園や飲食店など8カ所に回収を依頼したり、イベント時に住民らに呼び掛けたりして、1月6日時点で775ℓを集めた。随時、油をバイオディーゼル燃料にする松山市の業者に提供している。

低炭素杯には一般公募と全国各地の地域センター推薦がある。県地球温暖化防止活動推進センターの推薦枠には、県内で同校が唯一応募。活動の幅広さなどが評価され、出場が決まった。2月5日に東京で47団体・個人が取り組みを発表し、グランプリが決まる。

伊藤さんは活動を通じて「高校生の呼び掛けにいろんな世代が応えてくれてありがたい」と話している。

同ネットでは、1月末まで低炭素杯のweb投票も実施中。(丸岡裕美)

低炭素化の活動を紹介
黒部・宇奈月温泉

低炭素地域への取り組みを紹介した全国フォーラム=東大安田講堂

黒部・宇奈月温泉観光活性化協議会でんき宇奈月プロジェクト実行委員会は5日、東大安田講堂で開かれた「低炭素地域づくり全国フォーラム」で、自然エネルギーを利用した公共交通システムなどを紹介した。

同実行委員会の大橋聡司委員長が、温泉エコリゾートを目指し、電気自動車のレンタル事業や温泉を活用した温度差発電によるLED照明の点灯などを行っていることを説明。電気バスの導入を計画していることも明かし「先進的なモデルとして全国に普及させたい」と述べた。

◆地域の温暖化防止策を議論

地域に根ざした地球温暖化防止の取り組みについて議論する「低炭素地域づくり全国フォーラム」が2月5、6日、東京大安田講堂(東京都文京区)などで開かれる。

5日午後1時からは、学校やNPOなど37都道府県の47団体が、実践している独自の温室効果ガス削減策を報告する。6日午後1時からは、省エネ住宅などをテーマにした記念シンポジウムが予定され、小宮山宏・三菱総合研究所理事長、女優の菊川怜さんらが参加する。

入場無料。ファクス(03・5280・8100)かメール(teitanso-hai@jccca.org)で3日午後5時必着で申し込む。申し込み方法はホームページ(http://teitansohai.jp/)。問い合わせは事務局(☎03・6273・7785)。

今、話題の人に聞く サンデートーク
「わがやの省エネコンテスト」事務局を務める 大樹町企画課長 布目 幹雄さん(56)
今回を第一歩に町全体へ高めたい

大樹町在住者を対象に二酸化炭素(CO_2)の削減量を競う「わがやの省エネコンテスト」がこのほど、始まった。同町と一般財団法人生産環境研究センター(東京)でつくる実行委員会が主催し、総事業費は5000万円。町民の環境への意識向上を図るとともに、同コンテストで取得したデータは学術研究に生かす。事務局を務める布目幹雄さん(大樹町企画課長)に、開催状況や今後の方向性などを聞いた。(文・写真、佐藤圭史)

—コンテストの概要は。

創意工夫、リフォーム、モニターの3部門があり、町内から計80世帯が参加しています。創意工夫部門は日常生活の中で電力や水道、灯油などを節約、リフォーム部門は創意工夫部門の内容に加え、内窓サッシを取り付けます。いずれもCO_2削減量や節約方法を評価し、5月に表彰を行います。モニター部門は学術研究のため、太陽光発電かエコキュートを設置し、データを1年間取り続けます。

▽東大研が支援▲

—研究機関との連携は。

東京大学生産技術研究所(野城智也所長)から技術支援を受けています。リフォーム、モニター両部門の各家庭では、室温や電力量などのデータを自動で取得するシステムを構築しており、同研究所の研究に生かします。大樹のような冬の厳しい寒さでのデータは貴重なようで、研究者の方も期待しています。

—10日からコンテストが始まりました。

創意工夫とリフォームの両部門では2月6日までの4週間、通常の生活をしてもらい、比較するデータを取ります。続いて同14日から4週間、参加世帯にはそれぞれの工夫でCO_2削減に挑んでもらいます。快適な暮らしの中で節約につながるようなアイデアを期待しています。

節約する期間は実質4週間ですが、1年当たりでは80世帯合わせて31・6トン(全体の6・5%)のCO_2削減を見込んでいます。得たデータは町民にもフィードバックしたい。電力量などのデータを互いに見えるシステムがもうすぐできるので、参加世帯にはそれを励みにさらに頑張ってもらえれば。

▼低炭素杯出場へ△

—環境問題に対する町の方向性は。

今回を第一歩と捉え、町全体の取り組みに高めたい。2月5、6日には東京都で開かれる「低炭素杯」(実行委員会主催)に出場します。全国各地から、地球温暖化防止の活動に取り組む企業やNPO法人などが参加する中、小さな町ながらも、環境をテーマに活動していることをPRしてきたいですね。

ぬのめ・みきお 1954年、音更町生まれ。帯広農業高校を卒業後、大樹町役場入り。水道課で技術職として30年ほど務め、2007年に総務企画課。09年から現職。釣りやそば打ちを趣味とし、ボウリングでは、パーフェクトを達成した経験を持つ。

環境活動に取り組む各地の団体が集合「低炭素杯2011」
「ストップ温暖化大賞 記念シンポジウム」参加者募集

次世代に向けた低炭素社会構築へ連携の輪を広げる

次世代に向けた低炭素な社会を構築するため、現在、各地の学校や自治体などの団体により、多様な地球温暖化防止活動が行われています。そこで、37都道府県から選ばれた47の代表が、それぞれの地域での環境活動を報告し、学び合い、連携の輪を広げる「低炭素杯2011」が開催されることになりました。

多彩なゲストによるイベントが満載 プレゼントも

2月5日(土)は、参加団体による、地域の特色を生かした取り組みのプレゼンテーション。2月6日(日)は、分科会やディスカッションを開催。午後には女優の菊川怜さんらをゲストに招いた記念シンポジウムを開催。シンポジウム参加者(先着500名)には共催会社からQUOカードをプレゼント。

QUOカードをプレゼント

楽しみながら低炭素社会の実現へ向けた知識や情報が得られるこの催しにぜひ参加してください。

〈日時〉2月5日(土)13時〜19時、2月6日(日)10時〜15時30分

〈会場〉東京大学・安田講堂

〈入場料〉無料

〈お申し込み〉公式サイトhttp://teitansohai.jp/index.htmlから申込書を入手し、必要事項を明記の上、メールまたはFAXでお申し込みください。

●お問い合わせ 一般社団法人地球温暖化防止全国ネット(全国地球温暖化防止活動推進センター) 電話03・6273・7785 FAX03・5280・8100 メール teitanso-hai@jccca.org

地球と暮らす ●132
地球温暖化防止全国ネット
家庭のCO_2削減支える

日本の二酸化炭素(CO_2)排出量の14%(09年度速報値)は家庭に由来している。家電の多様化などによって京都議定書の基準年(90年度)から3割近く増えた。議定書で日本が義務づけられた12年までの6%減の達成には、家庭での大幅削減も欠かせない。

地球温暖化防止全国ネットは昨年8月、非営利組織(NPO)など全国の環境団体のメンバーや研究者らが設立した。全国地球温暖化防止活動推進センター(東京都千代田区)の運営▽各地の温暖化対策事業の支援——などを行っている。同センターは地球温暖化対策推進法に基づいて99年に設置され、昨年9月までは別の団体が運営してきた。だが環境省OBが役員を務めていたことなどの理由で、09年の事業仕分けで事業の一部が廃止された。

「低炭素杯」では、全国47団体が、寸劇などを交えながら地域、家庭での温暖化対策の事例を披露した=東京都文京区で5日

行政主導ではなく、家庭や地域での削減を進める拠点にしようと、関係者が立ち上がり、翌10月から実質的な活動を始めた。

北海道環境財団から参加し、運営委員長を務める久保田学さんは「以前のセンターは啓発や教育が中心だったが、私たちは家庭の排出削減に直接結びつく活動を中心とする内容に転換した」と強調。「全国各地の現場の団体が参加している。成功事例を集めて各地に広げるなど、草の根的に地域の実情をふまえた柔軟な取り組みができる」と意気込む。

当面は、家庭ごとの排出量を分析したり省エネ策を助言する「うちエコ診断」や、削減効果の測定法開発などに力を入れる。

2月5、6日には、全国47団体が職場や学校、地域での自慢の温暖化対策を発表する初のイベント「低炭素杯」が東京都内で開催された。

理事長の長谷川公一・東北大教授は「家庭や地域での対策の重要性は伝わりにくいこともあった。地道な取り組みによる削減効果を明確に示し、家庭部門の削減強化につなげたい」と話す。【大場あい、写真も】

正会員として、都道府県などの地球温暖化防止活動推進センターを運営する43団体が加盟している。事務局は東京都千代田区(☎03・6273・7785)にあり、ホームページはhttp://www.jccca.org/

(4) メディア等の掲載

■新聞

地域発の環境活動表彰

低炭素杯2011 大賞にオフィス町内会

低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会（委員長＝小宮山宏・三菱総合研究所理事長）は先月、東京都文京区の東京大学で「低炭素杯2011──低炭素地域づくり全国フォーラム」を2日間にわたり開催した。地球温暖化防止活動に取り組む全国各地の学校や企業など47団体が活動内容を発表。審査の結果、環境大臣賞グランプリには「環境NPOオフィス町内会」が選ばれた。

同フォーラムは09年度まで環境省が行っていた「一村一品・知恵の環づくり」事業を引き継いだもの。地球温暖化防止に関する全国各地の地域活動を報告し、連携の輪を広げる目的。東京電力やトステムなどが共催する。

初日は全国から集まったNPO（民間非営利団体）や自治体、学生サークルなど47団体が活動内容を発表し、二酸化炭素（CO_2）削減効果や地域を巻き込んだ取り組みの様子などをアピール。小宮山実行委員長や東電の影山嘉宏執行役員・環境部長らが審査にあたった。

2日目の表彰式で各賞を発表。会員企業のオフィスから出る古紙の回収とリサイクルの促進、再生紙利用の普及啓蒙などにより森林の保全を図る「森の町内会」活動を展開するオフィス町内会が環境大臣賞グランプリを受賞した。準グランプリには「里山再生プロジェクト」を実施した大分県立日田林工高校林産クラブなど3団体が選ばれた。

このほか、「地域づくりとコミュニケーション」をテーマにした分科会や、記念シンポジウムなどが開かれた。

環境大臣賞グランプリに選ばれた「オフィス町内会」の発表の様子

「ストップ温暖化大賞」フォーラム

日田林工林産クラブ 全国2位

接着剤使わず 里山の竹＋余る木材→板材開発

発表方法も工夫、奏功

地球温暖化防止に取り組む全国の団体が活動内容を競う「ストップ温暖化大賞─低炭素杯2011─低炭素地域づくり全国フォーラム」（5、6日・東京都）で、日田市の日田林工高校林産クラブ（諫山準部長）が2位の「環境大臣賞準グランプリ」に輝いた。環境に配慮して竹とバーク（樹皮）を組み合わせた板材「ファイバーボード」の開発で好評価を得た。

準グランプリを獲得した林産クラブの4人＝日田市の日田林工高校

開発者は3年生の諫山部長(18)、河津洋紀君(18)、矢羽田祥真君(18)、吉長善昭君(18)。里山で処理に困る竹と市内で余る木材の有効活用に着目。表層部に繊維化した竹、中にバークを挟む3層構造のボードを作った。建築用内装材などへの利用が見込めるという。「おおいた地球温暖化防止推進大会」では最優秀賞に輝いた。

全国フォーラムは47団体が参加。各団体が活動を発表して順位を競った。ファイバーボードは接着剤などを使わない工法が環境に優しく、里山にはびこる竹の実用的な打開策として評価が高かったという。

4人は年末から放課後に毎日、発表を練習。河津君が文章を作るなど役割を分担して内容を考えた。本番は堂々としゃべり、諫山部長が全身緑の衣装で竹を表現するユニークさも審査員を引きつけた。

諫山部長は「実験や発表練習の苦労が報われた」と笑顔。一方で、「せっかくなので1位を取りたかった」と悔しさもにじませた。

ファイバーボードは特許申請をせずに工法を全面的に公開。現在は企業数社から技術提供の依頼が届いている。吉長君は「将来は住宅の内装材などで普及してほしい」と願っている。

里山生かす新素材開発

日田林工4人組、環境大臣賞

竹と樹皮 有効利用

県立日田林工高（日田市）林産クラブが今月5、6両日に東京であった「ストップ温暖化大賞─低炭素杯2011─低炭素地域づくり全国フォーラム」で環境大臣賞（準グランプリ）を受賞した。（堺謙一郎）

フォーラムは、地球温暖化防止活動を都道府県代表の47団体が報告し、受賞の13団体が選ばれた。日田林工林産クラブは吉長善昭君、諫山準君、河津洋紀君、矢羽田祥真君のいずれも18歳の3年生4人グループ。顧問の河津文昭教諭(52)の指導で取り組んだ「里山再生プロジェクト─竹とバーク（樹皮）を活用したファイバーボードの開発」を発表した。

4人は、林業が盛んな日田市の雑木林にはびこる竹と、製材の過程で出る樹皮を有効利用して里山を再生しよう、と考えた。2年生の頃から、放課後や自主学習の時間を利用してボードの開発に当たった。強度がある竹の繊維を表面にし、バークの繊維を挟む方法で実験を繰り返し、接着剤も使わず日本工業規格（JIS）に合格する全く新しい木質材料を完成させた。

この成果は昨年の「バイオ甲子園」で優秀賞、「森林の流域管理システム推進発表会」で九州森林管理局長賞を受けた。さらに県代表で同フォーラムへ出場。諫山君は全身緑色の着ぐるみで竹を表現し、発表で緊張気味の河津君をリラックスさせた。そんな工夫もあって、環境大臣賞の4団体に選ばれた。

4人は「グランプリの自信はあった。ちょっと悔しい」「認められてうれしい。いい思い出」「結果は満足」「純粋にうれしかった」と感想を述べた。4人は専門学校への進学や住宅機器会社などへの就職が決まっている。

環境大臣賞を受賞した日田林工高林産クラブの吉長君、諫山君、河津君、矢羽田君（右から）＝日田市の日田林工高

オフィス町内会（東京）大臣賞

温暖化防止 岩泉などの間伐支援

岩泉町や葛巻町の間伐を支援する「森の町内会」事業を展開する環境NPOオフィス町内会（東京都、半谷（はんがい）栄寿代表）は、低炭素地域づくり全国フォーラム（通称・低炭素杯2011）で最高賞の環境大臣賞・グランプリを獲得した。

フォーラムは、都内で5、6の両日開催。地球温暖化防止に取り組む全国の47団体が活動を発表した。

オフィス町内会は、企業の環境貢献活動を支援する「森の町内会」事業を実施。間伐促進費が上乗せされた紙を企業が購入、使用することにより、地方の間伐活動を補助する。

間伐活動は2005年、岩泉町を実施パートナーにスタート。同町では、2009年度までに計57㌶実施した。町によると、二酸化炭素の削減や雇用確保に貢献しているという。

活動は全国に広がり、参加企業数は今年1月末時点で218社。県内では葛巻町も間伐実施パートナーになっている。

「低炭素地域づくり全国フォーラム」

CO_2削減で準最高賞

楽しむ活動評価 出水・六月田下自治会

年2回「通知表」、エコ達人の称号も

出水市六月田町の六月田下自治会が、温暖化防止の地域活動を発表する「低炭素地域づくり全国フォーラム」（5、6日・東京）で、環境大臣賞準グランプリを受賞した。最高賞のグランプリに次ぐもので、住民全体で楽しみながら行う活動が評価された。同自治会公民館で報告集会があり、住民らが快挙を喜び合った。

58世帯が暮らし65歳以上の高齢者が42％を占める同自治会。2006年度からCO_2排出量削減に取り組み始めた。節水や照明の間引きに加え、削減効果をまとめた「通知表」を年2回配布し数字で削減効果を実感できるようにしたのが特徴。世帯ごとの目標を達成すると、「エコ達人」の称号が贈られるなど遊び心も十分だ。

松田正幸自治会長(64)によると、09年度1戸あたりの光熱費やCO_2排出量は、06年度比でそれぞれ4万2千円、10・5％減った。浮いたお金で趣味などを楽しむ人も多いという。

フォーラムには37都道府県から47団体が参加した。同自治会は住民18人が活動をプレゼンテーション。フォーラム事務局によると、みんなで楽しく取り組んでいる点が評価された。受賞を記念して風倒木で作った「低炭素杯」、副賞には温暖化防止活動が盛んなイギリスへの視察旅行が贈られた。

13日あった報告集会では、スライドなどでフォーラムの様子が紹介された。松田自治会長は「他地域の手本となるよう、受賞を機に心を新たにしてみんなで頑張りたい」と話した。

快挙に沸く六月田下自治会の住民ら＝出水市六月田町

■新聞

媒体名	掲載日
環境新聞	2011月 1月 12日
朝日新聞	2011月 1月 21日
山形新聞	2011年 1月 24日
金融経済新聞	2011年 1月 24日
福島民報	2011年 1月 25日
福島民友	2011年 1月 25日
化学工業日報	2011年 1月 25日
住宅新聞	2011年 1月 25日
日本プレハブ新聞	2011年 1月 25日
建設通信新聞	2011年 1月 26日
愛媛新聞	2011年 1月 29日
十勝毎日新聞	2011年 1月 30日
毎日新聞（札幌）	2011年 1月 31日
毎日新聞（東京）	2011年 1月 31日
毎日新聞（名古屋）	2011年 1月 31日
毎日新聞（大阪）	2011年 1月 31日
週刊全国賃貸住宅新聞	2011年 1月 31日
福島民報	2011年 2月 1日
読売新聞	2011年 2月 1日
日刊工業新聞（東京）	2011年 2月 1日
日刊工業新聞（大阪）	2011年 2月 1日
朝日新聞	2011年 2月 3日
富山新聞	2011年 2月 6日
山口新聞	2011年 2月 6日
北日本新聞	2011年 2月 7日
毎日新聞（札幌）	2011年 2月 7日
毎日新聞（東京）	2011年 2月 7日
毎日新聞（名古屋）	2011年 2月 7日
毎日新聞（大阪）	2011年 2月 7日
金融経済新聞	2011年 2月 7日
福島民報	2011年 2月 9日
岩手日報	2011年 2月 10日
南日本新聞	2011年 2月 11日
大分合同新聞	2011年 2月 13日
南日本新聞	2011年 2月 19日
朝日新聞（大分）	2011年 2月 22日
毎日新聞（大分）	2011年 2月 22日
西日本新聞	2011年 2月 23日
住宅産業新聞	2011年 2月 23日
電氣新聞	2011年 3月 4日

■雑誌

媒体名	掲載日
新・住宅ジャーナル	2011年 3月
Newton	2011月 3月

■TV

番組名	放送日
びわ湖放送「滋賀経済NOW」	2011年 2月 19日

(4) メディア等の掲載

全国各地で、情報発信！ 拡がる低炭素地域づくりの輪

地域メディアとの連携で、各地域代表のエントリーから結果報告までの軌跡をフォロー。地域に向けて、タイムリーに情報を発信。

【福岡県／株式会社ひまわりの事例】

①県代表決定

②出場の事前告知

③結果報告

「低炭素杯」本県代表に
須賀川のひまわり 5、6日、東京で発表

須賀川市の下水道総合メンテナンス業「ひまわり」は二月五、六の両日、東京・文京区の東京大本郷キャンパスで開かれる「低炭素杯―低炭素

廃食用油からバイオディーゼル燃料を精製するプラント

①福島民報(2011年1月25日)

温暖化防止の全国イベント
ひまわり(須賀川)が出場へ

低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会が主催する地球温暖化防止の全国イベント「低炭素杯2011」が2月5、6の両日、東京都で開かれる。地域で積極的に地球温暖化防止に取り組む37都道府県、47団体が一堂に会し、プレゼンまえて、本県代表に選ばれた。

グランプリなどの各賞は審査によって決定するが、インターネット上の投票(WEB投票)で最多の支持を受けた団体に対する「WEB賞」もあり、同実行委員会が投票を呼び掛け

①福島民友(2011年1月25日)

かわら版

◆「エコPRしたい」と張り切っている。

◆大玉村の馬場桜保存会副会長の武田明守さんは「元気な後継樹が育つことを願う」と話しています。国指定天然記念物の馬場桜は近年、樹勢の衰えが目立ち、後継樹の植栽が計画されています。「千年の歴史がある大事な桜。村からなくすわけにはいかない」と桜を守る気持ちが枯れることはありません。

活動は地道なもの」と話すのは須賀川市の下水道メンテナンス業、ひまわり社長の佐藤博さんです。五、六の両日、東京・文京区の東京大で開かれる「低炭素杯」に出場、行政と一緒に取り組む菜の花プロジェクトを紹介します。「地域に根差した取り組みとして

②福島民報(2011年2月1日)

郡山・県南

「低炭素」で全国優秀賞
県代表 須賀川のひまわり

廃食用油を公用車燃料に
市との活動紹介

須賀川市の下水道総合メンテナンス業「ひまわり」は五、六の両日、東京・文京区の東京大安田講堂で開かれた「低炭素杯―低炭素地域づくり全国フォーラム」に本県代表として出場し、優秀賞を受賞した。

優秀賞を受賞した「ひまわり」の佐藤社長

実行委の主催、環境省の後援。三十七都道府県の推薦を受けた企業や学校、自治体など四十七団体が出場し、環境保全の取り組みを発表した。小宮山宏東京大総長顧問ら実行委審査員とウェブ投票で環境大臣賞と最優秀賞、優秀賞を選んだ。

同社からは佐藤博社長と岩崎康夫ゼネラルマネジャーが臨み、「人に、地球にやさしい脱・温暖化地域づくり」をテーマにプレゼンテーションで発表した。

廃食用油をバイオディーゼル燃料として公用車などに再利用する市の「菜の花プロジェクト」の概要について、同社が積極的に関わっていることなどを紹介した。同社は廃食用油をバイオディーゼル燃料に精製するプラントを独自開発している。

佐藤社長は「全国には先進的な取り組みを民間ぐるみで進める地域などが多いことを知り、良い刺激になった。次のステップに進めるよう環境保全に一層力を入れたい」と話している。

③福島民報(2011年2月9日)

■ WEB

プレスリリース配信・掲載サービス PR TIMES

PR TIMESは、企業、メディアそして生活者の3者をつなぐ有益なプレ

サポートデスク

ー低炭素杯２０１１ー各賞受賞者が決定

低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会
2011年02月08日 21:38

関連資料
オリジナル画像ファイル

低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会（委員長小宮山宏（三菱総合研究所理事長））は、２月５日、６日に東京大学安田講堂で「ストップ温暖化大賞ー低炭素杯２０１１ー低炭素地域づくり全国フォーラム」（延べ約1000人が参加）を開催致しました。

フォーラムでは全国からエントリーされた４７団体によるプレゼンが行われ、厳正な審査（審査委員会委員長小宮山宏）の結果、次の団体が優れた温暖化防止の活動として各賞を受賞しました。環境大臣賞には近藤昭一環境副大臣から賞状と低炭素杯が、最優秀賞には小宮山宏実行委員会委員長から賞状と副賞が授与されました。

【環境大臣賞】
○グランプリ
東京都環境ＮＰＯオフィス町内会
森の町内会（新たな仕組みによる間伐促進と森林のＣＯ2吸収）
○準グランプリ
大分県大分県立日田林工高等学校林産クラブ
「里山再生プロジェクト」
竹とバークを原料としたファイアーボードの開発
鹿児島県出水市六月田下自治会
集落全員でＣＯ2削減１０％達成しつづける元気なエコ集落
京都府京都府立桂高校ＴＡＦＦ「地球を守る新技術の開発」班
都市を冷やせ！～温暖化・水消費を抑える緑化システムの普及～

【最優秀賞】
○地域でエコ賞
静岡県静岡県立富岳館高等学校・光触媒研究班
富士山の環境を元気にする富岳館高校生の挑戦
○家庭でエコ賞
北海道わがやの省エネコンテスト実行委員会
平成２２年度「わがやの省エネコンテスト」
○グローバル賞
兵庫県特定非営利活動法人ワット神戸
省エネ・新エネでストップザ温暖化
○コミュニケーション賞
東京都エコ・リーグCampusClimateChallenge実行委員会
CampusClimateChallenge（ＣＣＣ）

【審査員特別賞】
滋賀県株式会社滋賀銀行
「しがぎん琵琶湖原則」でお客様と手を携えて地球環境保全
秋田県ＥＮＥＸ株式会社

エコトレンド

「低炭素杯」全国フォーラムの参加者募集　―　記念シンポや分科会も

2011年01月17日

環境goo編集部

２月５日（土）、６日（日）に東京・文京区の東京大学安田講堂などで開催される、「―低炭素杯―低炭素地域づくり全国フォーラム」の一般参加者募集が始まった。低炭素杯は、社会全体を低炭素なものにするために学校やＮＰＯ、企業、地方自治体などさまざまな主体が行っている取り組みを表彰する催し。事業仕分けにより廃止となった温暖化対策の「一村一品・知恵の環づくり」事業が、民間の支援を受けて生まれ変わったものだ。

１日目は、全国37都道府県から公募により選ばれた47の温暖化防止活動について、各団体がプレゼンテーションを行う。低炭素社会の実現に向けて活動する人たちの話を直接聞き、交流することができる貴重な機会となるだろう。また、２日目には三菱総合研究所理事長で東京大学総長顧問の小宮山宏さんらをパネリストに迎えた記念シンポジウムと、地域づくりとコミュニケーションに関する２つの分科会、そして表彰式などが行われる。

来場者にはエコグッズがプレゼントされる特典も。参加希望者は２月３日（木）午後４時までに、同フォーラム実行委員会事務局に申し込む。応募方法などの詳細は公式サイト（下記リンク）で。

「低炭素杯」全国フォーラムが２月５日、６日に東京大学で開催される
写真を拡大

大分合同新聞 oita-press
アイぶんぶんひろば | oitatv.com

HOME | 大分のニュース | 全国・海外 | ミニ事件簿 | スポーツ | 特集 | コラム | 動画 | 選挙
ぶんぶん倶楽部 motto+ | メールマガジン カボスプレス | 新聞購読申込み | 読者投稿はこちらから

大分のニュース

温暖化防止で全国２位　日田林工林産クラブ

[2011年02月13日 10:07]

メールで記事を紹介する　印刷する

地球温暖化防止に取り組む全国の団体が活動内容を競う「ストップ温暖化大賞―低炭素杯２０１１―低炭素地域づくり全国フォーラム」（５、６日・東京都）で、日田市の日田林工高校林産クラブ（諌山準部長）が２位の「環境大臣賞準グランプリ」に輝いた。環境に配慮して竹とバーク（樹皮）を組み合わせた板材「ファイバーボード」の開発で好評価を得た。

準グランプリを獲得した林産クラブの４人＝日田市の日田林工高校

開発者は３年生の諌山部長（１８）、河津洋紀君（１８）、矢羽田祥真君（１８）、吉長善昭君（１８）。里山で処理に困る竹と市内で余る木材の有効活用に着目。表層部に繊維化した竹、中にバークを挟む３層構造のボードを作った。建築用内装材などへの利用が見込めるという。「おおいた地球温暖化防止推進大会」では最優秀賞に輝いた。

全国フォーラムは４７団体が参加。各団体が活動を発表して順位を競った。ファイバーボードは接着剤などを使わない工法が環境に優しく、里山にはびこる竹の実用的な打開策として評価が高かったという。

４人は年末から放課後に毎日、発表を練習。河津君が文章を作るなど役割を分担して内容を考えた。本番は堂々としゃべり、諌山部長が全身緑の衣装で竹を表現するユニークさも審査員を引きつけた。

諌山部長は「実験や発表練習の苦労が報われた」と笑顔。一方で、「せっかくなので１位を取りたかった」と悔しさもにじませた。

ファイバーボードは特許申請をせずに工法を全面的に公開。現在は企業数社から技術提供の依頼が届いている。吉長君は「将来は住宅の内装材などで普及してほしい」と願っている。

asahi.com　MY TOWN 大分

トップ | ニュース | スポーツ | エンタメ | ライフ | ショッピング | Astand | トピックス
社会 | ビジネス | 政治 | 国際 | 文化 | サイエンス | 社説 | コラム | 天気 | 交通 | 動画 | マイタウン | ENGL

現在位置：asahi.com > マイタウン > 大分 > 記事

里山生かして新素材　日田林工の４人組み、環境大臣賞

2011年2月22日

環境大臣賞を受賞した日田林工高林産クラブの吉長君、諌山君、河津君、矢羽田君（右から）＝日田市の日田林工高

県立日田林工高（日田市）林産クラブが今月５、６両日に東京であった「ストップ温暖化大賞―低炭素杯２０１１―低炭素地域づくり全国フォーラム」で環境大臣賞（準グランプリ）を受賞した。

フォーラムは、地域の特色を生かした地球温暖化防止活動を都道府県代表の４７団体が報告し、受賞の１３団体が選ばれた。日田林工林産クラブは吉長善昭君、諌山準君、河津洋紀君、矢羽田祥真君のいずれも１８歳の３年生４人グループ。顧問の河津文昭教諭（５２）の指導で取り組んだ「里山再生プロジェクト―竹とバーク（樹皮）を活用したファイバーボードの開発」を発表した。

４人は、林業が盛んな日田市の雑木林にはびこる竹と、製材の過程で出る樹皮を有効利用して里山を再生しよう、と考えた。２年生の頃から、放課後や自主学習の時間を利用してボードの開発に当たった。強度がある竹の繊維を表面にし、バークの繊維を挟む方法で実験を繰り返し、接着剤も使わず日本工業規格（ＪＩＳ）に合格する全く新しい木質材料を完成させた。

この成果は昨年の「バイオ甲子園」で優秀賞、「森林の流域管理システム推進発表会」で九州森林管理局長賞を受けた。さらに県代表で同フォーラムへ出場。諌山君は全身緑色の着ぐるみで竹を表現し、発表で緊張気味の河津君をリラックスさせた。そんな工夫もあって、環境大臣賞の４団体に選ばれた。

４人は「グランプリの自信はあった。ちょっと悔しい」「認められてうれしい。いい思い出」「結果は満足」「純粋にうれしかった」と感想を述べた。４人は専門学校への進学や住宅機器会社などへの就職が決まっている。（堺謙一郎）

3 広報等実績一覧

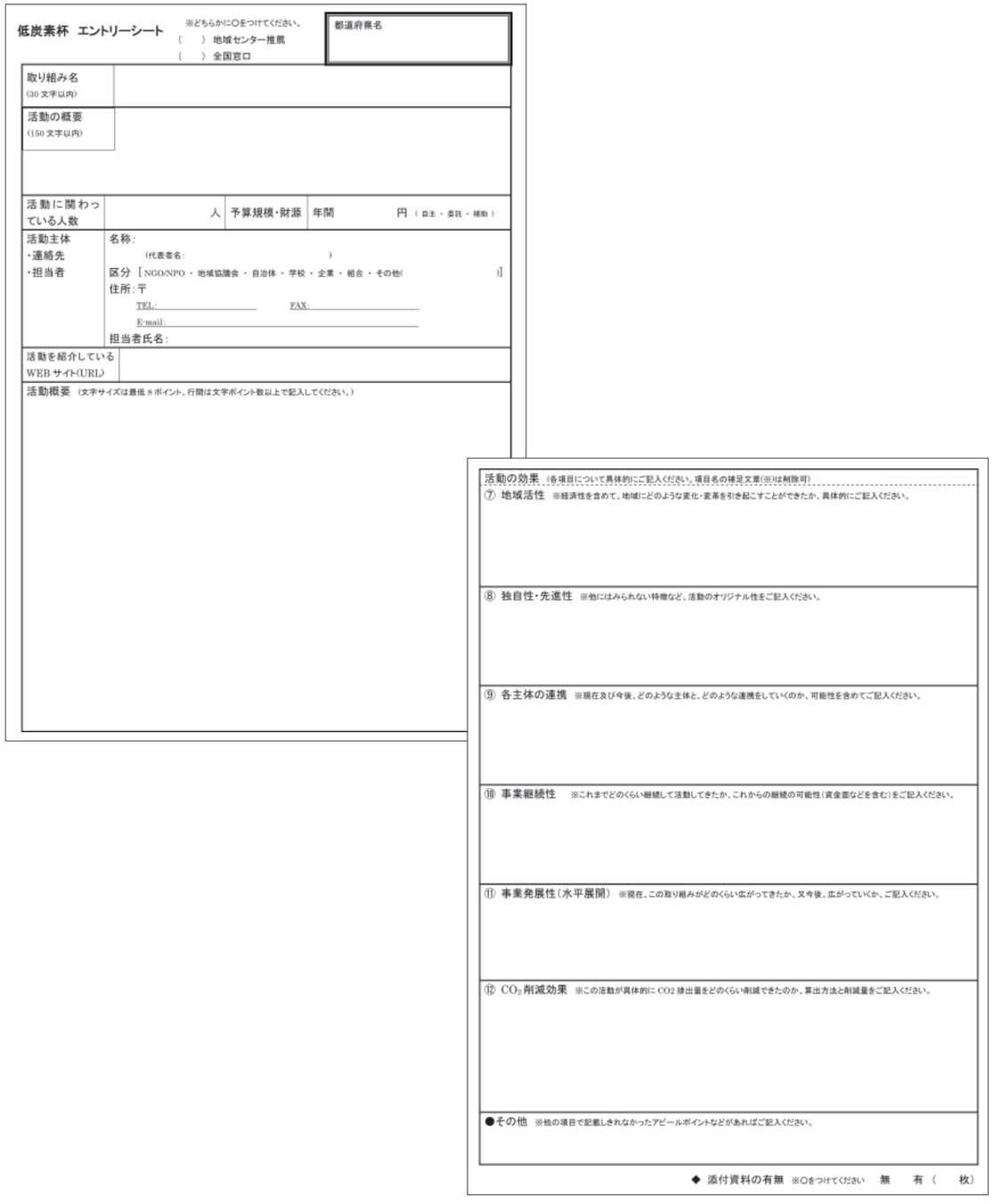
(4)メディア等の掲載

■ WEB

■ WEB

サイト名	掲載日
環境goo	2011年 1月 17日
EICネット	2011年 1月 19日
@niftyビジネス	2011年 1月 21日
47NEWS	2011年 1月 21日
COBS ONLINE	2011年 1月 21日
goo ビジネスEX	2011年 1月 21日
Infoseekニュース	2011年 1月 21日
Infoseekマネー	2011年 1月 21日
livedoor ニュース	2011年 1月 21日
SEOツールズ	2011年 1月 21日
YUCASEE MEDIA	2011年 1月 21日
AEROPRES	2011年 1月 23日
EICネット	2011年 1月 23日
Qlep東京	2011年 1月 23日
ことさが	2011年 1月 23日
山陰中央新報	2011年 1月 24日
pressrelease-jp	2011年 1月 24日
エキサイトニュース	2011年 1月 21日
47NEWS	2011年 1月 25日
KENCHIKU	2011年 1月 25日
福島民報	2011年 1月 25日
asahi.com（マイタウン）	2011年 1月 26日
Yahoo!地域情報	2011年 1月 27日
REALTOKYO	2011年 1月 28日
alterna	2011年 2月 6日
Yahoo!ニュース雑誌	2011年 2月 6日
CSRコミュニケート	2011年 2月 7日
毎日jp	2011年 2月 7日
mediajam	2011年 2月 8日
MSN トピックス	2011年 2月 8日
ベンチャー通信	2011年 2月 8日
PR Times	2011年 2月 8日
WEBnow	2011年 2月 8日
@niftyビジネス	2011年 2月 9日
Bizloopサーチ	2011年 2月 9日
COBS ONLINE	2011年 2月 9日
goo ビジネスEX	2011年 2月 9日
IBTimes	2011年 2月 9日
Infoseekニュース	2011年 2月 9日
J-CASTニュース	2011年 2月 9日
livedoor ニュース	2011年 2月 9日
SEOツールズ	2011年 2月 9日
YUCASEE MEDIA	2011年 2月 9日
とれまがニュース	2011年 2月 9日
フィデリ・プレスリリース	2011年 2月 9日
フレッシュアイニュース	2011年 2月 9日
マピオンニュース	2011年 2月 9日
楽天woman	2011年 2月 9日
oita-press	2011年 2月 13日
alterna	2011年 2月 15日
373news.com	2011年 2月 19日
asahi.com（マイタウン）	2011年 2月 22日
毎日jp	2011年 2月 22日
西日本新聞	2011年 2月 23日

4 エントリー様式


低炭素杯 エントリーシート

※どちらかに○をつけてください。
（ ）地域センター推薦
（ ）全国窓口

都道府県名

取り組み名（30 文字以内）	
活動の概要（150 文字以内）	
活動に関わっている人数	人 予算規模・財源 年間 円（自主・委託・補助）
活動主体・連絡先・担当者	名称:（代表者名: ） 区分［NGO/NPO ・ 地域協議会 ・ 自治体 ・ 学校 ・ 企業 ・ 組合 ・ その他( )］ 住所:〒 TEL: FAX: E-mail: 担当者氏名:
活動を紹介しているWEB サイト(URL)	

活動概要（文字サイズは最低 8 ポイント、行間は文字ポイント数以上で記入してください。）

活動の効果（各項目について具体的にご記入ください。項目名の補足文章(※)は削除可）

⑦ 地域活性 ※経済性を含めて、地域にどのような変化・変革を引き起こすことができたか、具体的にご記入ください。

⑧ 独自性・先進性 ※他にはみられない特徴など、活動のオリジナル性をご記入ください。

⑨ 各主体の連携 ※現在及び今後、どのような主体と、どのような連携をしていくのか、可能性を含めてご記入ください。

⑩ 事業継続性 ※これまでどのくらい継続して活動してきたか、これからの継続の可能性（資金面などを含む）をご記入ください。

⑪ 事業発展性（水平展開） ※現在、この取り組みがどのくらい広がってきたか、又今後、広がっていくか、ご記入ください。

⑫ CO_2 削減効果 ※この活動が具体的に CO_2 排出量をどのくらい削減できたのか、算出方法と削減量をご記入ください。

●その他 ※他の項目で記載しきれなかったアピールポイントなどがあればご記入ください。

◆ 添付資料の有無 ※○をつけてください 無 有（ 枚）